
水沢夢 [イラスト]春日歩
俺、ツインテールになります。4
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。４

水沢　夢

イラスト　春日　歩


俺、ツインテールになります。4
水沢夢 【イラスト】春日歩

CONTENTS

プロローグ　ツインテールだった私。010

第一章　俺、ツインテールのままです。014

第二章　ツインテールな日々。075

第三章　まなツインテール。140

第四章　俺のツインテール、進化します。224

エピローグ　最強の戦士。283

デザイン／新井隼也＋ベイブリッジ・スタジオ


桜川 尊
神堂慧理那
トゥアール
ソーラ
津辺愛香


俺のツインテールは――
絆だ!!

目次

プロローグ　ツインテールだった私。
第一章　俺、ツインテールのままです。
第二章　ツインテールな日々。
第三章　まなツインテール。
第四章　俺のツインテール、進化します。
エピローグ　最強の戦士。
あとツインテールがき

水沢夢 ［イラスト］春日歩

俺、ツインテールになります。4

人物紹介

観束総二（みつかそうじ）
主人公。
ツインテールを愛する高校一年生。
テイルレッドに変身。

トゥアール
異世界から来た美少女。

津辺愛香（つべあいか）
総二の幼馴染。
テイルブルーに変身。

神堂慧理那（しんどうえりな）
総二たちの通う高校の生徒会長。
テイルイエローに変身。

桜川 尊（さくらがわみこと）
神堂家のメイド兼
ボディーガード。

ダークグラスパー
眼鏡を愛する
アルティメギル首領直属戦士。

プロローグ　ツインテールだった私。

　私は、ツインテールでした。
　今はもう二度と、その髪型にはできません。
　大好きな髪型でした。その思いが世界を救うことになるとは、思いもしなかったけれど。
　そして……滅ぼすことにも。

　観み束つか総そう二じ様。
　私が渡り歩いた異世界で、一番強いツインテール属性を持っているのは……男性でした。
　本来なら、あり得ないんです。ツインテール属性が、これだけ強大に男性に芽吹くなんて。
　でも私は、嬉うれしかった。
　私の力の全てを……ツインテールそのものを託すことができるのが、素敵な男性で。
　私は初めて、自分の中の女を自覚しました。──初恋でした。
「悲しい思い出なんか……俺が忘れさせてやるよ」
　程なく、私を受け入れてくれた総二様は、私を激しく掻かき抱き、そう言ってくれました。
　最初は戸惑いがちに空くうを泳ぐ私の手が、そっと総二様の背中に回される……。
　けど、私にロマンチックな営みなんて分不相応なんです。
　総二様は、私の両手首を摑つかんで壁に押しつけ……荒々しく、服を破りました。
　優しい方なのに。厳しくすることで、痛くすることで、あえて私

の心の痛みを、全て洗い流そうとしてくれた。
　気持ちを確かめ合う言葉なんて、二人にはいらなくて。
　互いの温ぬくもりだけを求め、貪むさぼるように、身体からだを重ね合いました。

　戦いはひとまず終わり……総二様たちの世界に、平和が訪れました。
　私は、やっと過去を絶ち切り、前だけを見て生きていけるんです。
　ううん。前……ではなくて、横、でした。
　私の隣にずっといてくれる……総二様を見て。
　総二様の世界を、これからも一緒に守るために。

　腕を組んで、朝の通学路を歩く二人。
　向けられる好奇の視線がちょっぴり恥ずかしいけれど、きっとすぐに、祝福に変わると思います。これから、ずっと二人は一緒なんだから。
「ったく、見せつけてくれちゃってさ……。あーあ、あたしもいいオトコ探さなくっちゃ！」
「わたくしは、これから別のご主人様を探しますわ……」
　総そう二じ様の幼おさな馴染なじみの、津つ辺べ愛あい香かさん。生徒会長の、神しん堂どう慧え理り那なさん。
　二人の言葉に、ほんの少しだけ胸が痛みます。それが……強がりだとわかっているから。
　でも、総二様は私を選んでくれた。二人を気遣うことは、二人を傷付けること。
　だから私、今、この瞬間を精一杯感じます。

　精一杯、普通の女の子として生きます。
　お昼には、私の作ったお弁当を一緒に食べて。
　放課後、少しだけ教室に残って、廊下を誰だれかが通りがからないか、ドキドキしながらキスをしたり。夜は宿題を一緒にやった後、二人でお風ふ呂ろに入るんです。
　そして、いつものように、どちらからともなく求め合う。
　いつまでも、こんな時間が続いてほしい。
　総二様。
　私の……王子様。

　私、幸せです――
「―どうして、こうならなかった……」
　練りに練った脚本は崩壊し、私のドリームスクールライフは初日で頓とん挫ざ。
　なぞの美少女転校生と、彼女とイチャイチャして嫉しっ妬とされる男子生徒。
　それらの夢は日の目を見ぬまま、時ばかりがいたずらに過ぎていきました。

　けれど今、私の憧れたシチュエーションを体現する美少女が、体育館のステージに立っています。
「ソ……ソ……ソーラ・ミートゥカです。よろしくお願いしましゅ」
　噛かんだ……やだ可愛かわいい……。
　体育館に響く、割れんばかりの歓声。

　戦いに縛られた私を解放してくれて。

そして今、憧れの美少女転校生として遇されたあなた。

まさかあなたは、二度も私の夢を叶かなえてくれようというのですか……。

総二様。

私の……王子様──が、ツインテールです。

第一章　俺、ツインテールのままです。

「テイルレッドよ！　この俺、フリイギルディと一対一の勝負を所望する!!」
　血気(あふ)れる宣言と共に、俺の前に仁王立ちするエレメリアン。
　フリイギルディ………フリイ………ノミだな。
　丸みを帯びて、ささくれだった甲殻で全身が覆われている。かぎ爪(づめ)のようになった両手は、その勇ましい宣言とは裏腹にやや震(ふる)えていた。
「駄目よ。あんたたちの相手は全部、あたしがするんだから。レッドには戦わせない」
　決闘の申し出を一方的に反(ほ)故(ご)にし、俺を庇(かば)うように、テイルブルーが前へと進み出る。
　フリイギルディはだらだらと脂汗を浮かべながら、それでも平静を装ってブルーへの説得を試みる。
「テイルブルー、お前はここのところ、多くのエレメリアンと戦って疲弊しておるだろう！　そんな貴様を破ったとて、何の栄誉にもならぬ！　俺はテイルレッドとの尋常な勝負を所望するゆえ、貴様は身体(からだ)を休めておくがよい！」
　尋常な勝負を求めた相手は、尋常ではない形相で睨(にら)みつけられるのみだった。
「御託は終わり？」
　ウェイブランスを構え、ゆっくりとフリイギルディに近づいていくブルー。
　さながら、ギロチンの止め縄を切ろうと断頭台に向かう、処刑執行人のように。

──愛香は、いや、テイルブルーは、変わってしまった。
　元々エレメリアンに情をかけたり容赦をすることはなかったが、最近は鬼気迫るものがある。
　きっかけは、間違いなく二週間前のダークグラスパーとの戦いだろう。
　激しい死闘のあと、ダークグラスパーはまるで試合後に選手がユニフォームを交換するかのように、俺に…………その、キスをしてきた。
　テイルレッドに変身している時だったし、あいつも冗談半分な感じだったので、俺は忘れて……いやたまに唇の感触を思い出すけど……いやいや忘れようとしたが──何故か愛香は、その冗談が相当頭に来たようだ。
　真剣に戦った後だったので、侮辱と受け取ったのかも知れない。
〝愛香〟は、学校や家ではいつもと変わらない……俺に対して今まで以上に過保護になっている気はするが、とりあえず普段通りだ。
　しかし、ひとたびテイルブルーへと変身すると、全てのタガが外れたように凶暴性を解放し、破壊の化身と化す。
　ブルーはもはや現れるエレメリアンを、ダークグラスパーをおびき寄せるとしか考えていない。こいつのように、彼女の直属部隊の強力な昆虫の戦士にさえ恐れられていた。
　それが逆効果なのだろうか。あれ以来、ダークグラスパーは一度も俺たちの前に姿を現していない。
　今日も陸上競技場が、白昼堂々エレメリアンの襲撃を受けた。
　女子陸上部の大会が行われている最中、競技場の遥か外からトラック内に一気に跳躍して乱入してきたらしい。
　パニックになるかと思いきや、俺たち三人が到着した瞬間、避難

もせずに待ち構えていた女子高生たちは俺たちに喝かっ采さいと声援を浴びせるほど、怪物たちの襲撃に慣れ、余裕を持っていた。
　ここまでは、まあいい。いつものことだ。
　しかし、テイルブルーの表情と、立ち昇る憎悪のオーラを目の当たりにした瞬間、その女子高生たちは蜘く蛛もの子を散らすように逃げ出してしまった。
　敵からも、守るべき人間からも恐怖される。
　今やテイルブルーは、かつてないほどに四し面めん楚そ歌かな状態なのだ。
「ぃよし、ならばテイルレッドとテイルイエロー、二人がかりで構わぬ！　ちょうどいいハンデよ!!　さあ来い!!」
　どんだけブルーと戦いたくないんだ、こいつは……。
「……あんたの属性力エレメーラ、脚属性レッグなんですってね。レッドの脚にすりすりする気でしょう？」
「失敬な、直接触れはせん！　俺は世の女性の健康的な美脚を愛めで、その大切さを諭さとし、脚属性レッグの開花を待つだけだ!!」
　……妙だな。
　いや、これは最近現れるエレメリアンの傾向なのだが、やけに自分自身の属性の主張だけが強くなっている気がする。こいつらがダークグラスパーの直属部隊だからか？
　それとも――。
「嘘うそよ、もうだまされないわ……あんたたちアルティメギルの言うことなんて、二度と信じるもんですか」
　虚うつろな目に昏くらい炎を宿し、フリイギルディへとにじり寄るブルー。
「仕方ない、ここは日をあらためて……うぐああ!!」
　足払いをかけたブルーは、転倒したフリイギルディの背が地面に

着く前に、さらに空中で踏みつけ、地面にめり込ませる。

　その攻撃に耐えながら、フリイギルディはブルーの脚をうっとりと見つめた。

「おおう、なんという脚線美！　胸から脚まで鮮やかな一直線!!　この脚に誇りを持ったその時、素晴らしき脚属性レッグが貴様の中に宿ったであろうに!!」

「ほら、あんたの大好きな脚よ……嬉うれしいでしょう？　お礼を言いなさい」

「ぐあああああ！　ありがとうございます！　ありがとうございます!!」

　凍りつくような無表情のまま、フリイギルディをストンピングしていくブルー。

「あそこの戦闘員アルティロイドが撮影してる映像は、今、あの女も見ているの？　ダークグラスパーに向かって泣きつきなさい……そして、あんたたちの基地の場所を教えなさい……！」

「フ、フフ、手を……いや、脚を誤ったな！　脚属性レッグを持つ者にとって、ストンピングとは手厚い看護を受けるに等しい！　すまぬがもう少し上を……!!」

　その割りには、見る見る弱っていくように見えるが。医療ミスじゃないのか。

「あんたらにも痛覚はあるんでしょう？　永遠に痛めつけ続けることもできるのよ……？」

「身体からだの痛みなど……仲間を売る心の痛みに比べれば！　貴様の思い通りには、断じてならんぞ!!　はおおう両足!?」

　ノミらしからぬ、大いなる誇りを胸に、恫どう喝かつを撥はね除のけるフリイギルディ。

　ブルーは無慈悲にもその身体の上に乗り、両足で交互に踏み始め

た。
　もうこれ、どっちが悪の怪獣でどっちが正義の戦士なんだ。
「くっ……！　いくら敵だからって、嬲なぶるような真ま似ねは俺は認めないぞ、ブルー!!」
　いい加減止めに入らなければと、駆け出そうとした俺は、柔らかいものを踏んづけてしまい、咄とっ嗟さに足元を見た。



「ぎゅむっ」
「え？」
　イエローが、息を荒らげながら仰向けに寝転がっていた。
　全く戦闘に参加していないのに何故かアーマーを脱衣したい胸を、俺に踏ませるようにポジション調整をしている。
「何をしてるんだイエローッ!?」
　脚属性の敵にあてられてしまったのか!?
「はあ、はあ……最近、ブルーばかり戦うから……仕方がないのですわ……仕方がないことなのですわ……」
　よくわからないのでひとまずイエローは放っておいて、その場を離れようとすると、
「あふんっ」
　俺が一歩を踏み出す度、足の着地点に胸が来るよう、高速で地面をいずってポジショニングするイエロー。
　はあはあしているのはいつものことだが、よく見ると、イエローも目が尋常ではなくなっていた。自発的にやっているわけではないのに、女の子の胸を踏みつけるという行為への罪悪感で、俺の胸の方が押し潰されそうになる。
『ずるいですよ何ですかそのおもしろ空間は!?　総二様、もうそのおもしろイエローだけ引っ張って、基地に帰ってきてください！　おもしろいことしましょう！　エレメリアンなんて、おもしろ蛮族に相手をさせておけばいいんです!!』
　トゥアールが、この阿鼻叫喚を羨ましいなどと、おもしろトークで和ませようとしてくる。
　俺は天にも見放された気持ちで、死の足踏み運動を続けるおもしろブルーに視線を戻した。
「お、おのれテイルイエロー！　テイルレッドのおみ足を独占する

とは、卑劣な!!」
　フリイギルディは踏まれながらこちらを見て、的外れな怒りに滾たぎっていた。
「喋しゃべる気はないのね……ならもういいわ」
　ブルーが左腕をかざす。
〈体操服属性ブルマ〉
　以前は大岩の重量を軽減するように使われた体操服属性ブルマの属性玉エレメーラオーブ……重力操作の力を、ブルーは増加の方に発動させた。
「なっ……うおおおおお!?」
　大の字に地面にめり込み、フリイギルディを中心に地面に亀裂が入っていく。
「──エグゼキュートウェイブ!!」
　オーラピラーで拘束もせず、一気にとどめをさすブルー。
　爆炎を背にランスで残心すると、離れて撮影していた戦闘員アルティロイドに向かって歩いて行った。
「モ、モケエッ」
「ダークグラスパー………こんな雑ざ魚こばっかり寄越さないで、とっととあんたが出てきなさい……さもないと、どんどん犠牲者が増えるわよ……？」
　もう用はない、とばかりに、戦闘員アルティロイドを帰らせるブルー。撮影要員だから見み逃のがしたのだろう。
　明らかに見逃しているのに、「いや、そう言っておいて後ろから撃つんでしょ!?」とばかりに、戦闘員アルティロイドが何度も何度も後ろを振り返りながら逃げていくのがシュールだった。
　愛あい香かのツインテールは、激しい怒りと憎しみを宿してしまった。

　もはや、名実共に修羅となったテイルブルーを、止められるエレメリアンはいない。
　そして、この俺も……。
　最近、テイルギアが妙に重く感じる。力が全身にあふれるいつもの感覚が、ない。
　ダークグラスパーと戦ったあの日から、変身の解除にタイムラグがあるのも不安要素だ。
　イエローの呼吸で胸が上下するのに合わせ、俺の足も緩やかに揺れる。
『総(そう)二(じ)様、私のおっぱいの方が大きいですから！　踏み心地の違いを実感してください！』
　オペレーター役のトゥアールは、新商品のプレゼンターみたいになってるし。
　もう、みんなメチャクチャだ……ツインテイルズは、どうなってしまうんだ!!

◇

　秘匿された基地。世界の何(なん)人(ぴと)の目にも触れぬ、神秘の巨艦。アルティメギル秘密基地。
　その中央に位置する会議場、大ホールに、戦(せん)慄(りつ)が走る。
　モニターを彩る火炎━燃え上がる同志の命(いのち)火(び)を、戦士たちは呆(ぼう)然(ぜん)と見つめていた。

　フリイギルディの戦いをリアルタイムで見守っていたアルティメギルのダークグラスパー部隊だったが、その凄(せい)惨(さん)さは、歴戦の戦士たる彼らでさえ、目を覆わんばかりだった。

「な、何という巨大な殺気か……この地球全てを覆い尽くすようだ……」

　今、この部隊はダークグラスパーの直轄軍の一つである美の四心ビー・テイフル・ハートを中心に、強力に再編成されている。

　だが、様々な異世界を巡り、幾多の戦いを制してきた彼らでさえ、テイルブルーには力を超えた鬼気迫る何かを感じ、怯おびえずにはいられなかった。

「対エレメリアン戦闘のエキスパートだ」

「プロ中のプロだ……!!」

「俺は人間ひとを恐れたことはない……だが、テイルブルーは怖い!!」

　口々に怯えを発し、恐怖で竦すくみ上がる面々。

　映像を見れば早送り、資料を渡されればページを飛ばし、フィギュアは制作拒否。

　そんな扱いではあったが、決してテイルブルーを軽んじてきたわけではない。

　ただ、圧倒的なツインテール属性を持つ愛いとしき女神・テイルレッドにばかり注目してしまっていただけなのだが、それが徒あだとなった。

　そんな彼らが、ついにテイルブルーを脅威として認識し始めたのだ。

「修羅だ！　現うつし世よの修羅が、テイルブルーだったのだ!!」

「何な故ぜだ……何故神は、ツインテールを修羅に変か貌えてしまったのだ!!」

　ざわめく戦士たちを尻目に、ダークグラスパーはというと、画面の隅でしょんぼりと立ち尽くすテイルレッドを見て、眼鏡めがねの奥の目じりをだらしなく下げ、口くち端はから涎よだれを滲にじませていた。

「かわいいのう……テイルレッドはかわいいのう……」
「……これで、我ら美の四心(ビー・テイフル・ハート)の戦士も、五体連続でテイルブルーに倒されたことになります。我が主よ」
　バッタのような外見の戦士。美の四心(ビー・テイフル・ハート)の参謀格であるホッパーギルディは、鮮やかな朱の複眼を無念で滲ませ、ダークグラスパーへと戦局を報告した。
「ふうむ、やりおるのう。どこの誰(だれ)とも知れぬ貧乳が、これほどの爆発力を見せよるとは」
「いかがでしょう、ダークグラスパー様。執(しつ)拗(よう)に貴女(あなた)様の指名を繰り返すテイルブルー、直(じき)々(じき)にきゃっつめのツインテールっ柱をヘシ折ってやっては」
「たわけ、指揮官であるわらわを恃(たの)む前に、お前たちでなんとかしてみせよ」
　この場にいる全員の総意であろうホッパーギルディの進言を無(む)碍(げ)にされ、戦士たちは、落胆交じりにダークグラスパーを見た。
「何じゃその目は！　戦えばわらわの方が、奴(やっ)ら三人よりも強いのじゃからな!?　別に戦いを恐れているわけではないぞ!?」
　しばしの無言……その後、戦士たちはダークグラスパーに背を向け、話し合いを始めた。
「……仕方がない、遺憾ではあるが、テイルブルーのデータも研究せねばなるまい」
「テイルブルーの映像を編集しようとすると、コンピュータの動作速度が二〇倍は重くなるのですが……」
「コンピュータとはいえ、選ぶ権利はある。許してやれい」
　自分の言葉を無視し、ポジティブに今後の対策を立て始める面々に、ダークグラスパーは怒りの形相で机を叩(たた)いた。
「疑っておるのか貴様ら！　先日の戦い、わらわの圧勝であったの

だぞ!!」
「しかし、何故かその時の映像が残っておらず……」
　ホッパーギルディがやんわりと諫いさめようとする。
「当たり前じゃ、途中で撮影者を撤収させたのだからな」
「何故そのように!?　ツインテイルズを追い詰めるあなた様の勇姿、是ぜ非ひ一目与あずかりたく!!」
　なおも疑問を呈する部下たちに、やや頬ほおを赤らめてダークグラスパーは答えた。
「戦いの中、奴らの不意打ちで着衣が乱れてしまったのじゃ！　誰が貴様らのごとき筋肉達磨だるまどもに見せるものか!!　わらわの柔肌を男が見ようものなら、責任は取ってもらう!!」
「はっ！　慎んで遠慮いたします!!」
　最敬礼を以もってして拒否する一同。
　ぐぬぬ、と歯ぎしりをするダークグラスパーだったが、不敵に笑い大おお仰ぎょうにマントを翻ひるがえした。
「ようするにあの貧乳、妬やいておるのじゃな。この前、わらわがテイルレッドの唇くちびるを奪ったから。わらわが、テイルレッドとちゅーしたから!!」
　夏休み明けに脱童貞をこれでもかと自慢し吹聴する男子中学生のように、鼻び孔こうを広げて部下たちに武勇をひけらかすダークグラスパー。
「なんですと!?」
「何な故ぜそれを早く言ってくださらなかったのです!!」
「ずっと貴女あなた様の唇だけを見て、会議を進めたものを!!」
　殺到する巨漢たち。
　微妙に羨うらやましがられるポイントがずれているのだが、自尊心が満たされたのか、ダークグラスパーの声こわ音ねも明るい。

「わかったわかった。そんなに羨ましいというのなら、どれ。あめと鞭むちじゃ、貴様らにやる気を出させてやろうではないか」
　充分に溜ためてから、投げキッスを放つダークグラスパー。
「ん～……………………まっ」
　うおおおおおおお、と歓喜に沸くかと思えば、戦士たちは棒立ちのまま無言であった。
「光栄です……多分」
「身に余る幸せ……おそらく」
「やや⁉　私のバリアが無意識に発動を⁉　こ、これ、防ぐでない‼」
「馬ば鹿かにしておるのか貴様らあああああああああああああああああああああ‼」
　を袖そでにされた反動で、制裁という名の鞭が乱舞する。

　テイルブルーの捨て身の蛮行も虚むなしく、アルティメギルはまだ若干の余裕があるようだった。

◇

　地下基地に戻って、いつもの反省会。だが、今日という今日は、俺も黙っている気はなかった。
　変身を解いた瞬間ケロッとしている愛あい香かに、俺はわずか数十分前の惨状を糾きゅう弾だんする。
「いい加減にしろ、愛香！　いくら何でも、今日のはひどすぎだぞ！」
「あいつら、人間に害をなす敵なのよ⁉　やり過ぎなんてことはないわ！　警官が犯罪者に凄すごんだら、警官の方が悪者になるの⁉」

　なるほど、愛あい香かなりに今の自分の蛮行を喩たとえると、そうなるわけか。
　しかし、こういうものには得てして市民感情がある。
　ガムをクチャクチャ嚙かみながら警棒を手の上で弄もてあそびつつ、小心者の犯罪者をじわじわと追い詰め、路地裏で必要以上にいたぶる不良警官……イメージとしてはそうならないだろうか。
　同じ警官と犯罪者でも、印象は大きく変わる。
「……見ろ……今、テイルブルーが世間でどう扱われているか」
　俺はさらに反論したい気持ちを抑え、リモコンを操作してメインモニターにテレビの映像を映した。
　ニュースも終わったゴールデンタイムに、バラエティではなく、ツインテイルズの特番が放送されていた。時間帯問わず、どの局も一日一本は必ずこういう番組がある。
　もっとも、内容は必ずしも、ほのぼのとした進行だけではない。
　俺の予想通り、今日はテイルブルーの特集が組まれていた。
　テロップが画面に躍る。

〝もし、テイルブルーに遭遇したら〟

〝嬉うれしいね〟、とは続かない。
　紹介されているのは、その対処方法だ。
　その存在がすっかり定着したエレメリアンだが、世間一般での今の認識はせいぜい、良識が多少ある変質者、というところだろう。
『防犯グッズによる威嚇』
『スマートフォンなどの通信端末による通報』
　その程度で事足りる、とタカを括くくられている。
　少し心配ではあるが、世間であまり騒がれないことが望みなの

で、俺もそれは構わない。
　だが、テイルブルーにはそのような対処法は通用しない。
『木に登る』
『走って逃げる』
『手近な民家に駆け込む』
　それらが全て×印で塗りつぶされ、「ではどうすれば」と議論が始まった。
　さながら、友達と談笑しながら下校中、角を曲がったら出会い頭にライオンが待ち構えていた時に「どうすれば」、という、ありえないほどに絶望的な状況だ。
　番組では、これまでの調べでわかったブルーの生態に言及する。

　カバ：時速四〇㎞
　ダチョウ：時速七〇㎞
　チーター：時速一〇〇㎞
　テイルブルー：時速一八〇㎞

　外国人コメンテイターが手で顔を覆い、Ｏｈ……とオーバーリアクションで悲嘆した。
　チーターが、人類によって与えられた陸上動物最速の栄冠タイトルを、勝手に再び人類によって剝はく奪だつされてしまっている。
　Ｆ１カーに乗った人間がチーターを追い越しても、「君はチーターより速いな」とは賞賛されないだろう。
　だが、テイルブルーは違う。同じ野生の動物として比較されてしまっているのだ。
　さらに司会者が、例としてステルス戦闘機の流線型のフォルムに触れた後、テイルブルーの胸に言及。これを速さの理由として説明

し、パネラーの納得を集めていた。
　名だたる識者たちが、こんなことを時間いっぱい議論しあうのだ。
「見ろ愛あい香か、もう来るとこまで来ちまったぞ！　さすがにこれ以上はまずい！」
「……このぐらい我慢する。いつかきっとわかってもらえるわよ。別に気にしない」
　じゃあ何な故ぜ、お前の椅い子すの肘ひじ掛かけが両方とも破壊されているんだ……。
　トゥアールが身を乗り出し、あおるように半笑いで愛香を見る。
「愛香さんが蛮族なのは、最初からじゃないですか。それをさも、心を鬼にして戦ってるように演出して自己犠牲気取りとは。鼻で笑っちゃいますね、フフン」
「まあ、感情豊かなお鼻さんだこと。割りばし縦に入れてどこまで入るか試しちゃおっと」
「やめて壊れちゃううううう奥に……奥に当たってりゅううううううううううううう!!」
　美少女に鼻割り、これほどリアクションに窮する光景があるだろうか。
　トゥアールは鼻を押さえながら、自分の席に戻る。
「そ、それより……戦闘に参加しても脱ぐチャンスがないせいで、慧え理り那なさんに禁断症状が出ています」
　横を向くと、身体からだを抱きしめ、目を見開いてカタカタ震ふるえる慧理那の姿があった。
「かふー、かふー……」
　いつもの凜りんとした面影は消え失せ、トゥアールの言う通り禁断症状を発したようになっている。

　俺にできるのは、症状が和らぐよう、ツインテールをさすってあげることだけだった。

　ちなみにテイルイエローは、武装を脱ぎたがる以外あまり脅威はないので、報道もここまでひどくはない。対処法もソフトなものだ。

　先日陽よう月げつ学園の初等部のグラウンドの前を通りかかった時、先生の「あっ、テイルイエローだ！」の号令のあと、整列した子供たちが一斉に防犯ブザーのピンを抜く光景を見てしまったが、ようするに夜道でトレンチコート姿の不審者を見かけたぐらいの危険度というわけだ。

「わ、わたくしは大丈夫ですわ……。変身の副作用……ヒーローにはつきものですもの……」

　大好きなヒーローのお約束として自己解釈し、何とか耐えている。

「……無理するな慧え理り那な。我慢できなかったら、脱いでもいいんだぞ？」

　悪化して公衆の面前で脱ぎ出しても困るので、俺はガス抜きを提案したのだが……。

「み、観み束つか君はわたくしのことを変質者か何かと勘違いしていますわ！　ひどいですわ!!」

「ご、ごめん、そんなつもりで言ったんじゃないんだ」

　確かに、語ご彙いの足りない俺が悪い。

　学のある人なら、地面をはいずって自分の胸を踏ませようとしてくる女の子のことを、もっと的確に表す言葉を見つけて、本人を傷付けないように諭さとすこともできるのだろうが……。

「そうですよ総そう二じ様、テイルイエローが所構わずなのはともかく、女の子は脱ぐ生き物です。そして男の子は、それを見る生き物

です」
　いつの間にかテーブルの上に立って上下下着姿になったトゥアールが、今まさにブラジャーを外そうとしているところだった。
「ちょっと目を離すとあんたは!!」
「ひっ……愛あい香かさん！　鼻は！　鼻はもう!!」
「フロントホックのブラしてる女を見ると、血圧が上がるのよ!!」
　下着姿で怪物に捕食されるというホラー映画のお約束を踏襲する二人をよそに、慧理那は恨めしそうに俺を見てきた。
「観束君……いくら同居しているからって、女の子の下着姿を見るのはいけませんわ……」
「俺だって悪いと思って一生懸命見ないようにしてるんだぞず――――――っと!!」
　トゥアールが初めて家に来たその日から、ずっと自分でも注意していることなんだ。
　同じ卓につきながらもここまで無言だった家主は、湯飲みを手に、ほえほえと平和な笑顔で言った。
「いいわねえ～ほのぼのラブコメ……母さんは書き割りに徹してこの行く末を見守るわ」
「ほのぼの!?　地獄絵図以外の何物でもないだろ!?」
　これだけ訴えても、みんなおおらかに考えているのか、聞き入れてくれない。
　俺は、胸騒ぎがするんだ。
　あれだけテイルレッドやトゥアールに執着を見せていたダークグラスパーが、沈黙を守っていること。そして、いたずらにアルティメギルを挑発する愛香。
　トリガーになりそうなことが多い。
　とんでもないことが起こらなければいいけど……。

『こんにちは～！　あんこちゃんだよ～！』

「ッ……!!」
　つけっぱなしだったテレビから聞こえてきた声に、条件反射で身を硬くする。
　ダークグラスパー……いや、善いい沙すな闇あん子こが、ゴールデンのバラエティ番組に出演している。
　愛あい香かとトゥアールも即座に反応し、愛あい嬌きょうを振りまくアイドルに難癖をつけ始めた。
「ペッ。何があんこちゃんですかいやらしい。総そう二じ様、だまされてはいけませんよ、あの女、間違いなくとんでもないキャラ作りしてます。きっと本性は男漁あさりが趣味のビッチです」
　ああ、キャラは作ってるだろうよ。元はメチャクチャ暗い女の子だもんな……。
「そうね。結局三つ編みからツインテールに戻しちゃってるし、眼鏡めがねといい、自分でツインテールに変わる流行を作り出そうとして失敗してる感じだわ」
　何な故ぜ、愛香が逆上してモニターに鉄てっ拳けんを食らわせないかというと。
　俺は……愛香たちに、善沙闇子の正体を伝えられずにいるのだ。
　彼女の認識攪乱装置イマジンチャフを破ったのは俺だけのようで、あの日の出来事も、結局愛香たちはアイドルのライブにアルティメギルが襲撃をかけたもの、と思い込んでいる。
　知ったが最後、愛香がどのような行動に出るかは、火を見るよりも明らかだからな……。
　俺に正体が知られた後も、彼女は何食わぬ顔でアイドル活動を続

けているので、メディアを通しては毎日のように顔を合わせている。

　冠の番組を持たず、ゲスト出演やこのように番組内に自コーナーを持つことで、様々な局、様々な時間帯の番組に露出する。短期間で名を売るための手堅い方法だ。

『好きな男性のタイプですか？　やっぱり、眼鏡の似合う人ですね！』

　彼女の顔がアップになり、思わず唇くちびるを意識してしまった。慌てて画面から目を逸そらす。

　そう。あくまでダークグラスパーの最終目標は、眼鏡だ。

　アイドル活動を続ける以上、眼鏡属性グラスの拡散を、彼女は諦あきらめていないんだ──。

◇

　夢の中で、テイルレッドが悲しんでいた。

　たまに、夢を見ながら、「ああ、これは夢だな」と他ひ人と事ごとのように俯ふ瞰かんする時がある。

　今がまさにそれで、俺は、真まっ暗くら闇やみの中ぽつんと立ち尽くすテイルレッドを見ていた。

　自分相手だというのに、慰めの言葉すらかけられないことがもどかしかった。

　何をそんなに悲しんでいるんだ？

　いや、そもそも何故、それじゃあ当の俺は悲しくないんだ？

　テイルレッドは、テイルレッドのツインテールは……俺自身じゃなかったのか!?

　悲嘆の果てに、フォースリヴォンを取り外していくテイルレッ

ド。

「……ツ……」

　やめろ、そんなことをしたら――――！
　俺はあらん限りの声を上げ、必死に手を伸ばすが、テイルレッドには届かない。

「ツ……！」

　それどころか、俺はどんどんテイルレッドから離され、やがて空の彼方かなたへと飛ばされてしまった――

「ツインテール!!」

　俺は夢から覚め、跳ね起きた。
　喉のどがからからに渇いている。時計を見ると、アラームの時間よりも少し早いくらいだった。
　よっぽどうなされていたんだろう。悪夢を見るよりも、寝覚めが悪い。
　いよいよ夏も本番という時節も相まって、ひどい量の寝汗だ。ツインテールも肌に張りついてしまっている。
「……ツインテール？　――ってうわ、変身してる!?」
　ようやくその事実に気がつき、ツインテールの房を片方摘つまむ。
　いったい、いつから変身していたんだ？
　そのことに気づかないまま眠り続け、しかも、目覚めてから気づくまでにこれほど時間がかかるくらい、違和感がなかった。

テイルレッドの身体（からだ）と、観束（みつか）総二（そうじ）の身体が、無境界（ボーダーレス）になりつつあるのでは……。
「おはよーそーじ、今日は起きて……」
　タイミングの悪いことに、愛香（あいか）がノックもなしに部屋に入ってきた。
　ベッドの上で、上体を起こしている俺（テイルレッド）と、バッチリ目が合う。
「またあんたは！　ツインテールのまま寝てみようとか、意味不明なこと考えたんでしょ!!」
「いや、今日のは違う。勝手に変身してたんだ。……それはずっと前に思いついてやってみたんだけど、テイルギア着たままだと寝づらくて、諦（あきら）めたんだ」
　愛香は口をあんぐりと開けて俺を見た後、床に膝（ひざ）を着いて肩を震（ふる）わせ始めた。
「どうすれば……あたしはどうすれば……」
　最近暴れすぎて、疲れているんだろうか。
　そして、ふと思い出したように顔を上げて言う。
「！　ねえ、今……勝手に変身してたとか言わなかった？」
「ああ。もしかしたら、ツインテールの夢見たからかな」
　俺も原因はわからないので、若干弱気に答える。
「ちょっとー！　何、おねしょするみたいにツインテールになってんのよ!!」
　俺に詰め寄る中、愛香（あいか）のツインテールがふわりと舞った。ツインテールに活気が満ちている。
　それは、悲しみに満ちていた夢の中のテイルレッドのツインテールと比べれば、歴然だ。
　やはりあれは、俺の見間違いではなかったんだ……。

「……思春期の男性なんですから、そういう『やっちまったモーニング』はもっと的確な喩たとえがあるじゃないですかぁ、うへへへ」
　おねしょってのはさすがに喩えとしてどうかと思うが、確かにいい年してのおねしょと同じくらい、深刻に考えなきゃいけないことだ、これは。
　例えば授業中、抗あらがいがたい眠気にたゆたっていたとする。
　ぼーっとした時俺は十中八九……いやほぼ十、ツインテールのことを考えている。
　そんな時、今朝のように無意識に変身してしまったら……身の破滅だ。
　……などと思考を巡らせている間に、いつの間にか現れたトゥアールが、いつの間にか天井に突き刺さっていた。



昼夜暗殺者に命を狙（ねら）われ、「曲（くせ）者（もの）！」と天井を槍（やり）で刺すことが日常だった戦国時代の大名の部屋ですら、俺の自室よりはまだ破壊率が少ないと思う。

俺と愛（あい）香（か）、トゥアールは、三人揃って家を出る。
七月にもなると、太陽の照りつけも容赦がない。
学園までの道を歩き出して程なく、見知った顔があった。
「あ、あの……観（み）束（つか）君。おはようございます……偶然ですわね」
「慧（え）理（り）那（な）？　どうしてこんなところに？」
慧理那とはたまに学園の近くで合流はするが、家の近所で出会うなんてのは初めてだ。
そもそも、俺の家と慧理那の家は、ほとんど逆方向にあるのだから。
「そ、その……用事があって……登校前にこちらを通りかかったんですの」
「え、お嬢様、観束の家まで車で送ってと仰（おっしゃ）ったではな……」
慧理那の後ろで控えていた桜（さくら）川（がわ）先生が言い終わる前に、さらにその後ろに並んでいたメイドさんたちが組み付き、口を塞（ふさ）いだり腕を抱きかかえたりと取り押さえにかかった。
メイドさんたちは俺に「ほほほ」と愛想笑いを向けると、桜川先生に何やら怒鳴りながら、引きずっていった。
何だったんだろう。
「それで、あの……よければ、わたくしも一緒に登校してよろしいですか？」
「そんな大（おお）袈（げ）裟（さ）な……。わざわざ確認なんて取る必要ないだろ、慧理那」

　もっとも、俺も一度、それを気にしたことがあったのを思い出す。
　以前登校途中で慧理那と会った時、俺は一緒に登校したらよからぬうわさが立って迷惑だろうと心配したのだが、慧理那はきっぱりと否定してくれたのだ。
「は、はいっ！　それでは……」
　遠く離れたメイドさんたちに「ファイト！」などと応援され、慧理那は俺の横に並んだ。
　いつもと違う道で登校するのは、そこまで気合いを入れないといけないものなんだろうか。
　後ろで、トゥアールと愛香が騒ぎ出す。
「愛香さん！　私を殴ってください!!」
「え、何よ急に!?　ごめん、もしかして今朝のあれ、打ち所が悪かった!?　それとも昨日!?　一昨日おととい!?」
　心当たりがありすぎるのだろう。
　俺から見ればむしろ打ち所がよかった攻撃など限りなく絶無だったと思うが、その張本人が心配するほど、トゥアールの発言は突拍子もないものだったようだ。
「忌いま々いましいラブコメ時空を破壊するには、それしかありません！　私の部屋で、慧理那さんを牽制するためこれから力を合わせるって言ったじゃないですか！」
「ばか、声が大きいっ……！　けど、よく言ったわ!!　歯ぁ食いしばりなさい!!」
　ワイヤーアクションのような軌道をワイヤーなしの生身で描き、トゥアールが吹っ飛ぶ。
　こういう光景を見ると、テレビ番組でのブルーの扱いも、あながち大おお袈げ裟さではないと感じる。

「津っ辺べさんとトゥアールさんは、本当に仲良しさんですわね」
　慧ぇ理り那なを見ると、いつものように頬ほおを赤くしていた。
　俺のシャツの裾すそをそっと摘つまみ、上目遣いにお願いされる。
「み、観み束つか君……ここなら人目もないですし、わたくしのことも、叩たたいていいですわ」
「人目のあるなしにかかわらず、本来は他人を叩いちゃ駄目なんだぞ⁉　頼むからあれを受け入れて、感化されないでくれ‼」
　俺が躊ちゅう躇ちょしている間に、目の前にトゥアールが落下し、メンコのような快音を響かせた。
　相変わらず、二人のやりとりは、クリエイティビティを刺激する。
　喧けん嘩かしながらも互いを高め合っているのだろう、やる方もやられる方も毎回バリエーションに富んでいる。
　児童玩がん具ぐ開発会社の重鎮がこの二人の遊やり戯とりを見れば、インスピレーションが浮かんで一大ブームを巻き起こす新感覚玩具が完成するのは必至だ。人目がなくてよかった。
「そうだ、トゥアールさんにはまだお願いしたことなかったですわ。トゥアールさん、わたくしのこと、叩いてください！」
　ほう々ほうの体ていのトゥアールに、慧理那がとんでもないお願いをする。
　瞬間、トゥアールの双そう眸ぼうに活力が漲みなぎり、妖あやしく輝いた。
「…………………………………………………………………………………いいんですか？」
　トゥアールは、脂ぎった視線で慧理那の頭から爪つま先さき、ツインテールの端はしから端までを舐なめ回すように見ると、たっぷりと舌なめずりをした。

俺が止める間もなく、軟体動物のように慧理那に絡みつくトゥアール。

「くふふ、うーふーふーふーああ、すべすべ……」

「や、ち、違いますわトゥアールさん、わたくしは叩いてと……！」

身をよじって逃げようとする慧理那だが、逃げれば逃げるほどトゥアールは絡みつく。

「現行犯極刑ッ」

初秋を待たずフライングでやって来た局地的台風が、トゥアールに襲いかかる。

「合意なのに！　合意なのに!!　何ですかこの卑劣な美人局つつもたせは――――ッ!!」

台風というよりもはや嵐のような拳けん蹴しゅうを受け、トゥアールは再び空へと舞い上がる。

「……何でしょう。やっぱり、トゥアールさんだと何か違う気がしますわ……」

美少女が発するとは思えぬ太い呻うめき声を背に、慧理那は俺のことをじっと見つめてきた。

「やっぱり、わたくし、観束君じゃないと――」

俺と慧理那との間に、再びトゥアールが垂直落下して来た。

「私の……命に代えても……ラブコメだけは……」

トゥアールの行動がよくわからないことが頻ひん繁ぱんにあるが、これだけはわかった。

トゥアールにとってそれは、命を懸かけるに値する大切なことだということだ。

それなら俺は、無む闇やみに止めるわけにもいかない。むしろ、応援すべきなのかもしれない。

そんなふうに思った、ある朝の登校だった。

◇

アルティメギル基地のホールに、仕方なしに制作されたようなテイルブルーのフィギュアが飾られている。

ツインテールだけに情熱の全てを注ぎ込み、残りの部分は幼児の紙粘土遊びに比肩する低クオリティ。隣に飾られたテイルレッドとの差は歴然で、彼らのやる気の程が窺うかがえる。

本格的なテイルブルー対策が、アルティメギルで始まった。

直属部隊、残存部隊の垣根なく、ドラグギルディの参謀を務めたスパロウギルディが進行役となり、意見を募っている。その横には、ホッパーギルディ、マンティスギルディの姿もある。

「レッドやイエローは滅多にないが、テイルブルーの強みは、我らエレメリアンを倒して得た力を自在に使いこなすところにある」

「鬼をも喰くらい糧にするか……まさに羅ら刹せつ!!」

属性玉変換機構エレメリーションはツインテイルズ全員に備わっている機能だが、レッドとイエローは滅多にそれを使わない。

ツインテール一筋のため使おうとしないレッド、また、武装の多さで必要性がほとんどないイエローと違い、それを十全に使いこなすブルーは、彼らエレメリアンにすれば、まさに血肉を喰らう悪鬼だろう。

「最強の存在はテイルレッドでありますが、やはり幼な子。戦いの最中に怯おびえることも多く、そこが弱点といえば弱点。しかし、〝仁〟に篤あつき戦士ゆえ、我らの意志を汲くみ、正々堂々と戦う誠実さを持ち合わせております」

正面の定位置に座り、テイルレッドの方のフィギュアをいじりな

がら話を聞くダークグラスパー。スカートをはいているわけでもないのに、下から股こ間かんを覗のぞき込んだりしている。

「ふむ、子供ならではの実直さ、敵ながらやはり好感の持てる奴やっ。して、ブルーは」

「テイルブルーの最大の強さは、その非情さにあります。相手の申し出になど耳を貸さず、ただ殺さっ戮りくを求める戦闘マシン。未いまだ一人としておりませぬが、仮に命乞いをしたところで、嗤わらって絶命に至らしめるでしょう」

「まるで完全無欠のように扱いおって。奴も人の子、弱みの一つもあろう」

「御意に。しかし、此の程の戦いを見るだに、人の子かどうかもいよいよ怪あやしく……!!」

　ふう、と溜ため息いきをつくダークグラスパー。敵が非情なのは、ある意味当然。それをここまで恐れる部下たちの気の緩みようを正そうとした時、一つ意見が出た。

「弱みといえば、ひどく自身の胸の小ささを気にかけている様子。そこを指摘するやいなや、容赦無く殴り殺しにくることはすでにわかっています」

「パワーアップさせてどうするのじゃ。だから、弱点はないのか弱点は」

　トゥアール──先代テイルブルーとの関係を部下たちにもちろん明かせないダークグラスパーではあるが、彼女のはち切れんばかりの胸を包んでいた蒼あおのテイルギアが、今や貧乳の洋服掛けになってしまっている現状は許せないのだろう。やや声が苛いら立だっていた。

「テイルブルーはどうやら、うねうねしたものが怖いようです。触手を展開し近づいたクラーケギルディ様を見てかつてないほどに取

り乱し、止めに入ったリヴァイアギルディ様を夜叉(やしゃ)もかくやという形相で殴殺しております」
　スパロウギルディが、後世に語り聞かせるべき凄惨(せいさん)な巻き込まれ事故の顚末(てんまつ)を切々と語る。
「それは弱点と呼べるのか……!?」
「その時もやはり、クラーケギルディ様が胸の小ささを褒(ほ)め称えたことが、きゃっつめの逆鱗(げきりん)に触れた様子」
「つまり、つい指摘したくなるのもわかる貧乳じゃが、そこを何とか我慢し、目の前でうねうねすればよい……そうなるの」
　あまりにも不名誉な結論付けをされてしまったテイルブルーだが、無念にも、一つとして間違ったことを言われていない。
　ダークグラスパーは、ホールに集まった無数の戦士たちをぐるりと一望する。
「おい、一番奥にいるミミズよ」
「ミミズ!?」
　部屋の隅で、隠れるように身を縮めていた細長い身体(からだ)のエレメリアンが、指名された。
　ミミズから手足が生えたようなビジュアルは、どこか愛嬌(あいきょう)さえ感じる。
「お前、うねうねしておるな。よし、今日よりテイルブルー対策班隊長に任命する」
　直球過ぎる理由での人事。
　その場のエレメリアン全員が、言葉を失った。
　当然だ、赤紙を渡される瞬間を目撃したのだから。
「む、無理です、僕には……！　まだそのような大任を負う域には達しておりません!!」
「しかし、お前は仮にもわらわの直轄軍、美の四心(ビー・テイフル・ハート)の

一員であろう。それに、わらわも認める、美の四心(ビー・テイフル・ハート)の副官・アラクネギルディの弟子でもあったはず。いつまでも縮こまっていては、師を超えることなどできぬぞ。名前も覚えてやらぬ」

「も、もちろん無理です、師匠を超えるなんて……。それに、僕はもう……」

　いくらダークグラスパー直属部隊の一員とはいえ、ワームギルディは一度の実戦経験もない、新参者。片道分の燃料しか積まない複葉機で巨艦へ特攻させるには忍びない。

　他の戦士たちが、口々に擁護するも、ダークグラスパーは聞く耳を持たない。

　そこへ、もう一人の戦士が進み出た。

「……わたくしめを、補佐役に。あの凶獣を相手取るには一人では手に余ります」

　背中に大きな殻を背負い、ぬめっとした胴体に、頭からは二本の角。カタツムリの姿をしたエレメリアン……スネイルギルディだ。

「よかろう。お前もまた、アラクネギルディの弟子であったな」

　ダークグラスパーの許しは得たが、肝心のワームギルディが怯(おび)えている。

「ス、スネイルギルディ君……。でも、無理なんだ、僕には……」

「いいや、首領補佐様はさすがのご慧(けい)眼(がん)。この任、お前にこそ相応(ふさわ)しいことを見抜かれておられる」

　スネイルギルディは、ぬめっとした手で、ワームギルディのぬめっとした肩をそっと叩(たた)いた。ひどくぬめぬめしている。そしてさらに、ぬめっとした頭を持ち上げ、進言する。

「私の見立てでは……テイルブルーは、男(おとこ)の娘(こ)です」

「何、男の娘⁉」

　にわかにざわめき出す一同。
「むう、言われてみれば納得できる部分も多い」
「うむ、あの(あふ)れんばかりの獣性……とても女(にょ)性(しょう)のそれとは思えぬ」
　それを聞き、いまいちどこが目かわからないワームギルディの目にも、輝きが灯(とも)る。
「て、テイルブルーが、男の娘……!!　ぼ、僕、頑張るよ!!」
「その意気だ。今まで誰(だれ)も敵(かな)わなかった最凶のツインテール……ここで武(ぶ)勲(くん)をたてれば、必ずお前の男の娘属性(ガールズボーイ)も、多くの理解を得られるはずだ」
　がっちりと握手を交わす両名。やはり、直視しがたいほどぬめぬめしている。
　テイルブルーを倒すべく、二体の戦士が起(た)ち上がった。
「ありがとう、でもスネイルギルディ君……どうして僕に協力を？」
「私も、微(かす)かな希望を抱いているからな。万に一つの可能性だが、テイルブルーは……私の求め続けた存在なのではないかと」
「そうか……。君も、なかなか理解を得られない属性だったもんね。性転換属性(トランスセクシャル)という──」

　思いもよらぬところから、最大の危機を迎えようとしていることを、テイルレッドは……総(そう)二(じ)は、この時まだ、何も知らなかった──。

◇

　放課後、ツインテール部の部室で、俺と愛(あい)香(か)、そして遅れて

合流した慧ぇ理ゥ那なは、長テーブルの前に置かれたホワイトボードを注視していた。
　トゥアールは何な故ぜかサマースーツを着込み、眼鏡めがねに指示棒という女教師スタイルだった。
　結局、その上から白衣を着込んでいるのだが。

〝男おとこの娘こ〟

　ボードには、トゥアールの手で大きくそう書かれている。
「アルティメギルが今標的にしているのは、この属性のようです」
　この数日、エレメリアンの反応を感知して駆けつけると、すでにその姿はない……逃走を許すという、追いかけっこの状態が続いていた。
　決して俺たちの到着が遅いわけではない。
　あいつらも一目散に逃げ出しているため、俺たちが取り戻すまでもなく、一時的に属性力エレメーラを奪えてすらいない状態だ。
「逃げの一手に関しては、罠わなという可能性もある。一応、注意しておこうぜ」
　俺たちの油断を誘っているのかもしれない。皆に、注意喚起をしておく。
「標的にされたのはいずれもお嬢様校。由緒正しい、男子禁制の園ばかりですね」
　トゥアールが指示棒で叩たたくとホワイトボードが液晶モニターに切り替わり、日本地図が表示される。丸印は列島に幅広く点在し、襲撃範囲の広さが浮き彫りになる。
「おかげで、女子のふりをして女子校にこっそり通っていた男子の秘密がバレるという事件が続発しています」

「……男子が女装して女子校に通っていたことからして、すでに事件なんじゃないのか」
　というか、続発するほど日本にはそんな事例が多くあるのか。
「あの、トゥアールさん、男の娘とは、具体的にどんなものなんですの？　女装をした殿方……ということでしょうか」
「男の娘は、女装よりもレベルアップした存在ですよ」
「ランク分けされているんですの……？」
　慧理那は、戦いのために必要だからと、最近こういう性癖に関して勉強熱心だ。
　知らないなら知らないまま生涯を終えた方がいいような属性も、多い気がするが……。
「今回のあいつらの目的はなんだ？　そういうふうに、後ろ暗い事情がある人を曝(あば)き立てて、あいつらに何のメリットがある？」
　周囲にバレた時点で、女装は続けられない。属性力(エレメーラ)の育ちようがないのだ。
「あたしもそう思うわ。それに、男の娘……外見が女の子っぽいって言っても、男であることに変わりはないんでしょ？　アルティメギルって、これまで女ばっかり狙(ねら)ってたような気がするけど……」
「被害者にツインテールではない人の方が多かったのも、気になりますわ」
　俺たちは矢継ぎ早に、トゥアールに疑問を投げかける。いずれも気になることだ。
　ターゲットはみんな男(おとこ)の娘(こ)だが、全員がツインテールというわけではなかったようだ。
「決して全て女ばかりを狙(ねら)うわけではないのですが……もしかしたら、アルティメギルの作戦は、次の段階に移行したのかもしれま

せん」
「次の段階？」
「むしろ、遅すぎたほどです。ツインテールの完全拡散という鉄壁の作戦が、一度総二様たちとの戦いで完壁に破られている以上、その後に行うはずだったその他多くの属性の各個奪取を前倒しするのは、予想されていたことです。ダークグラスパーまでもが退けられたことで、決断したということでしょう」
　さらりと言っているが、これは大変なことじゃないのか。
「つまり、今までは他の属性はツインテール属性を奪うおまけだったのが、それそのものがメインにもなるってことか!?　それじゃあ、ターゲットが無数になっちまうぞ!?」
　俺の不安への答えも聞けぬまま、机の上のノートパソコンから、アラートが鳴り響いた。

『トゥアールのおっぱい（おっぱい）（おっぱい）（おっぱい）』

「輪唱になってんじゃねえか消せ消せ――――――――――ッ!!」
　油断していると、何度変えさせてもおもしろアラートを仕込んでこようとする。
　全く悪びれることなく、トゥアールは発信元を特定した。
「……場所は……やっぱり、今回も女子校ですね。名門の」
「よし、これ以上イタチごっこは続けてられないからな、今回は挟み撃ちにしよう。俺が正面から突っ込んでいくから、愛香と慧理那は回り込んで、ゲートに逃げ込もうとしたところを阻止してくれ」
「わかったわ」
　全員で部室から自宅の地下基地へと移動し、速やかに出撃する。

　結果として、挟み撃ちの作戦は成功した。
　俺たちはついに、なぞの逃亡者を捉え、全容を明らかにしたのだが——
「な、な、何よあいつ、ミミズ……ミ、ミミ……ズ……」
　近頃の阿あ修しゅ羅らぶりはどこへやら、ミミズのような姿をしたエレメリアンを見るや、ブルーはガタガタと震ふるえ始めた。
　そうか、こいつ……触手みたいに、うねうねしている!!
「ブルーの苦手な奴やつを送り込んできたってことか……ダークグラスパーめ!!」
　昆虫のエレメリアンが増えたということは、こういう奴が出始めてもおかしくはないってことか。隣にいるカタツムリのようなエレメリアンも、背中に背負った殻以外はやたらとぬめぬめしている。
　それはともかく——

「……ごめん、僕、実は男だったんだ……」
「知ってたわ。ホントにドジなんだから。知らんぷりしてあげてたのに」
「で、でも、僕、一緒に着替えをしたり、お風ふ呂ろに入ったりしたのに……怒らないの？」

　対たい峙じする俺たちの横で、属性力エレメーラを奪われそうになったことで正体がばれた女学生……いや男子学生と、妙に勝ち気そうな女の子が、周囲を無視して何やら盛り上がっていた。
『あの女の子、完全にゲームヒロイン気取りですね。自分の周りをモニター準拠のワイドサイズに切り取った時、どの角度がもっともイベントＣＧとして映えるか、熟知した立ち方です』

何を冷静に分析してるんだ。
写真写りのいい角度をというのならわかるが、最近の女の子は、ＣＧ映えする角度まで気にするのか。

女生徒が後ろ手に組みながらくるっと回転し、男子に向かって微笑ほほえんだ。
「そうね、それじゃあ、責任取ってもらおうかな――」

「早く逃げんか貴様らああああああああああああああ!!」
ブルーがコンクリートの地面を踏み抜き、それによって生じた亀裂が、今にも男の胸に飛び込んでいきそうだった女生徒の足元まで走っていく。
メロドラマに酔っ払った男女を力ちから尽ずくで非難させ、ようやく目の前の敵へと向き直るブルーだが、途端に及び腰になってしまった。
相手はどこからどう見ても、ミミズだ。魚肉ソーセージから手足が生えたような……。
適当といえば適当だが、洗練されているといえば、それも納得できる。
「うわああ、ごめんなさい！」
ミミズのようなエレメリアンが、自分が怒鳴られたと勘違いしたのか、頭を抱えて怯おびえる。
珍しく、幼い男の子みたいな声だ。
「……腹の決め時だ。今日という今日は、テイルブルーを恐れて退却することはできぬようだぞ、ワームギルディ」
カタツムリのエレメリアンが、ワームギルディと呼ばれたミミズ型の肩に、ぬめっとした手を置く。

　まさかこいつら、罠わなとかじゃなく、ただ単にブルーにビビって逃げてただけなのか!?

「わ、わかったよ。ごめんね、迷惑ばかりかけて……」

　ワームギルディは、一挙手一投足がうねうねしている。

「ひいっ!!」

　うねうねぬめぬめの相乗効果。

　鳥肌が立つ音が聞こえてきそうなほど、ブルーは竦すくみ上がっていた。

「ぼ、僕はワームギルディ……男の娘属性ガールズボーイのエレメリアンです……」

「そして私はスネイルギルディだ」

　ワームギルディは、スネイルギルディの背中にうねうねと隠れた。

「──うう、やっぱり怖いよう……」

　どうも精神が子供なのか、ワームギルディはブルーを見て怯おびえている。

「ワームギルディよ！　立つのだ！　お前の目は、涙を流すためのものではない！　男おとこの娘こを愛めでるためにあるのだ！　そうであろう!!」

　……目？

　……………………どこ？

「あなたたちは二体とも、男の娘属性ガールズボーイのエレメリアンですの？」

　イエローの質問を受け流すことなく、スネイルギルディは、自分の信条を口にし始めた。

「私の属性は性転換属性トランスセクシャル……。だが、ひとくちに性転換と言っても、多岐にわたる。医術による転換を果たす者もいよう。

一切肉体に手を加えず、精神のみの転換を果たす者もいよう！　しかし、私の求めるものは、もっとも険しき道!!」
　ぬめっとした腕を天に掲げての大演説だ。
「望まぬ女性化を果たし、戸惑う男子！　それには、青天の霹へき靂れきのごとく降り注ぐ神秘が不可欠！　どこに、そんな神の悪戯いたずらが転がっていようか!!」
　ワームギルディはその演説を目（？）にし、少しずつ震ふるえを抑えていく。
「滅ぶ残るの話以前に、私が求める真の性転換属性トランスセクシャルはその存在すら不確かなのだ!!　ならばこの夢、友に託すしかあるまい!!　男の娘属性ガールズボーイという、未来への輝きを持つ者に!!」
「スネイルギルディ君……」
「さあ立て！　立って、私と共に夢を叶かなえるのだ!!」
「うん、わかったよ!!」
　何だ、このスポ根ノリは。
　今回のコンビは随分仲良しだな。クラーケギルディとリヴァイアギルディとは正反対だ。
「トランスセクシャル……性転換か。また随分なぞな属性だな……」
『おそらくスネイルギルディが崇拝しているのは、その中でもいわゆるＴトランスＳセクシャルＦフィクション……人ならざる力などで完全に女性化してしまう、フィクションやファンタジーの領域ですね』
　トゥアールの通信を聞いて、何かが引っかかる。
　完全に、女性化……。人ならざる力で……。

　男おとこの娘こ。
　性転換。

　――――ちょっと待て。
　それって。
　それって、もしかして。
　俺は慌てて、ブルーとイエローに耳打ちした。
「やばい。俺、あいつらと戦ったら、正体がバレるかもしれない」
　要領を得ない俺の言葉に、二人は首を傾げる。トゥアールが、すかさずフォローしてくれた。
『認識攪乱装置イマジンチャフの弱点は、先入観です。あの二体、意識が今日のターゲットの方に行ってたからまだ今は総そう二じ様を気にしていませんが、戦い始めて違和感を持ち始めたら、テイルレッドが男が変身した姿だと連想してしまうかもしれません！　確かに、危険な属性の相手です!!』
「な、何ですって!?　レッドがピンチですわ!!」
　イエローが、俺を背中とツインテールで庇かばう。
「まずいわね。あんたは下がってて。今回はあたしとイエローだけで戦うわ。いいわね？」
「ああ、すまない……」
　しかし、ブルーは未いまだに震ふるえている。
　出来る限りの援護はしようと決め、俺は二人から離れた。
「イエロー、あのミミズをお願い。わたしはカタツムリを……」
「レッドは……ご主人様は、わたくしが守りますわ!!」
　後方援護型でありながらインファイトを挑む悪い癖が出て、イエローはブルーの作戦も聞かずにスネイルギルディへと突っ込んでいった。
「ちょ、ちょっとー!!」
　そうこうしている間に、ワームギルディがブルーのそばまで恐る恐ると距離を詰めてきた。

「話を聞いてください！　テイルブルーさん!!」
「ち、近づかないで!!」
　上擦(うわず)った声を上げ、後ずさりするブルー。
　うねうねと、まるで音に反応して揺れるおもちゃのように頭をくねらせながら、ワームギルディはブルーへと接近していく。
「いっ……いや────────っ!!」
『これは……電動おとなのおもちゃとビッチ。絵になる映像ですね、壁紙にしましょう』
　トゥアールが何か冗談を言っているが、それどころではなく、ブルーは動転し鉄拳(てっけん)を放つ。
　ワームギルディの頭（？）を打ち抜くが、ビニールでできたパンチングマシーンのように、ぼよんぼよんと前後左右にぶれるだけで、吹き飛びはしなかった。
「ぐ、うぐぐぐ……僕は……敵じゃありません……」
「はぁ!?　何言ってんのよ!!」
「僕は、あなたを理解する存在……味方です!!」
「何なのよ、何でうねうねした奴(やつ)ばっかりに好かれるのよあたしは────ッ!!」
　無抵抗のまま歩み寄るワームギルディを、テイルブルーは容赦無くボコボコにしていく。
「むおおおおおおワームギルディ!!」
　たまらず飛び出そうとするスネイルギルディを止めたのは、ワームギルディ自身だった。
「止めないで！　ここが正念場なんだ……！　僕は……今まで強いみんなの陰に隠れてびくびくしながら過ごしてきた。でも、今回ばかりは頑張るんだ！」
　ぼよんぼよんと上体を跳ねさせながら、テイルブルーに迫るワー

ムギルディ。
「彼女は戸惑っているだけなんだ。たとえこの肉体が朽ち果てようと、この魂で彼女を説得してみせるよ!!　スネイルギルディ君は、イエローをお願い!!」
「うむ！　男の顔になったな！　そちらは任せたぞ!!」
　顔……。
　………………どこ？
　とにかく、ミミズな見た目によらず、なかなか熱い奴だ。
　野生の動物に、言葉で訴えかけても意味はない。まずは手なり腕なりと噛かまれようとも耐え、敵意がないことを示す。覚悟は本物のようだ。
　問題は、テイルブルーが、愛あい香かが、敵にまでそんな対応をされるようになってしまったということだが。
「ッ……はあ、はあ……。わ、わかったわよ。あんたに敵意がないってのは、認めるわ。でも……あたしを説得してどうしようってのよ。あんた、男の娘属性ガールズボーイなんでしょ？」

「だからテイルブルーさん、あなたは男おとこの娘こなんでしょ!?」

「死ねボケエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!」
　ワームギルディが言い終わるが早いか、テイルブルーは拳こぶしを叩たたき込んだ。
　ぼよんびょんと跳ねながら、地面をバウンドするワームギルディ。
「どこで判断した!?　何で判断したァ!!」
「だって……胸が小さいからおぶおああああああああああああ

あ!!」
　今度は言い終わる前に、渾身の蹴りで吹き飛ばされるワームギルディ。
　全身を蒼の鎧で包んだ戦士──その双眸だけが、怒りと憎しみの真紅に染まる。
「あなたは、男の娘なんでしょ!?　認めてくれるまで、僕は……僕は、何度でも立ち上がるよ!!」
　立ち上がるという言葉と無縁の生物のはずでありながら、二本の足で強く大地を踏みしめ、ブルーの前に立ちはだかるワームギルディ。
「男の娘は、素晴らしい存在なんだ！　神話に語り継がれる天使は、両の性を持つ完璧な存在であったというよ……！　僕は、男の娘とは、人類を新たなる世界へと導く、選ばれし存在だと思っているんだ!!」
『両の性はありませんよねえ、女の子の女の子が男の娘には搭載されてないじゃないですか。そう言ってやってください総二様、その部分の具体的な名称を口にして!!』
　嬉々として通信してくるトゥアール。
　具体的な名称は断じて口にはしないが、確かに、両性具有ってわけじゃないよなあ、男の娘って。
「胸で判断してんじゃないわよ、つ、ついてな……」
「え、何がですか？」
「じろじろ見るなああああああああああああ!!」
　ブルーはとうとう、ウェイブランスを取り出し、メタメタに突いていく。
　打撃には強くても斬撃には弱い、軟体生物の限界だ。
「く、ううううう……あなたは、間違っているんだ……。男の娘は、

清らかな女性の心を宿した存在……。その凶暴性と決別しない限り、あなたは真の男の娘にはなれないんだ!!」
「完全解放ブレイクレリーズ！」
「あっ」
　息も絶え絶えでなおも説得に徹していたワームギルディを、容赦無くオーラピラーが包む。
　おそらく生涯決別することはない凶暴性をいかんなく発揮し、テイルブルーが必殺の一撃を放つ。
「そんなのになって……たまるかあああああああああああああああああああ!!」
「ス、スネイルギルディ君……ごめん……」
　エグゼキュートウェイブの直撃に、ワームギルディはついに力尽き、全身から放電していく。
　イエローと戦っていたスネイルギルディが、血相を変えて振り返る。
「ワームギルディ！　駄目だ……！　逝いくな！　私は、あの方にお前を──」
「一緒に戦ってくれて、ありがとう───」
　爆散するワームギルディ。スネイルギルディは絶叫した。
「ワームギルディイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!」
　震ふるえる拳こぶしを何とか持ち上げ、指をブルーに突きつける。
「うっ……くっ……おのれテイルブルー！　これでもまだ認めぬのか！　奴やつは、奴は自らの命をとして、貴様が男おとこの娘こであることを証明しようとしたのだぞ!!」
「そんな大嘘うそに、勝手に命懸かけてんじゃないわよ!!」
「うおおおお！」

　スネイルギルディは、遺志を受け継いだように迷いなく、真まっ直すぐにテイルイエローへと駆け出す。

「ヴォルティックブラスター!!」

　連射される雷の銃。しかし、それは背中の殻を盾たてのように向けて防御態勢を取ったスネイルギルディに、全て弾はじき返されてしまった。

　さらにイエローは肩のバルカンや、胸のミサイルを放つが、全て殻に阻まれてしまう。

「すごく硬いですわっ……!!」

『お義か母あ様、また音声素材が増えました!!』

『総そうちゃんの台詞せりふと組み合わせて使いましょう』

　基地でオペレーターを担ってるバックアップ役の二人が、全く役に立つ気配がない。

「私の防御能力は、美の四心ビー・テイフル・ハートでも最強を誇る！　どれだけ攻撃しようと、この鉄壁の鎧よろいには傷一つつけることはできぬぞ!!」

　すかさずイエローは距離を取り、属性玉変換機構エレメリーションを発動させる。

「属性玉エレメーラオーブ――文学属性ブック!!」

　イエローの眼前に小さなスクリーンが浮かび、データが表示される。

　相手の能力や弱点を探る、文学属性ブックの力だ。

「……わたくしの今の火力では、あの殻を破壊するのは困難……。本当に、最強の防御力を誇るようですわね……」

　イエローはこちらをちらっと見た。

　見られると力が上がることを思い出し、大丈夫、見てるから、とアイコンタクトを送る。

イエローのテイルギアの全身の武装が、発射態勢を取っていく。

ツインテールがコンクリートの地面に突き刺さり、全力発射の反動から身体からだを支えるアンカーロックとなる。

完全脱衣形態フルブラストモード──テイルイエローが武装を全開する。

校舎に向かわないよう一極集中での全武装発射。

戦争における最激戦地を思わせる機銃掃射と弾薬と光弾の嵐は、爆炎のマグマを作り上げ、コンクリートの通路を轟ごう音おんと共にめくり上げていった。

息を荒らげ攻撃を止めるイエロー。

しかし、土煙の中から現れたスネイルギルディは───無傷だった。

殻の中に全身を隠し、殺到する極弾から身を守りきったのだ。

あのイエローの攻撃が、全く通用しない。

「あいつ、強敵だ……！」

たまらず飛び出そうとした俺を、イエローは手の平を突き出して制止した。

「大丈夫ですわ。このエレメリアンは、わたくしが必ず倒します!!」

全武装を脱衣パージし、生身同然の姿になるイエロー。

「むう、武装を全て捨てるとは……！」

過去のイエローの戦いを見ていないのだろうか。その姿を初めて見たらしいスネイルギルディは、何な故ぜか嘆息を漏もらしていた。

「いい目だ……死中に活、ということか」

いい目、って、全脱衣パージして興奮してはあはあしているようにしか見えないのだが、どんなフィルターがかかっているのだろうか。

「よかろう！　この勝負を受けねば、私は心まで女と転換なろう!!

受けて立つぞ、テイルイエロー!!」

　命綱である殻を、思い切りよく脱ぎ捨てるスネイルギルディ。

「これで対等だ。後ろ暗い勝利などを捧げても、ワームギルディは喜ばぬだろうからな!!」

　台詞せりふはかっこいいが、おかげで、完全にナメクジ……スラグギルディとなってしまった。

「勝負は一撃で決まる……覚悟はよいか!!」

　盛り上がっている元スネイルギルディだが、イエローは構わずツインテールの反動で大ジャンプした。

「完全解放ブレイクレリーズ!!」

「フッ……来い!!」

　上空を見上げる元スネイルギルディ。

　乾けん坤こん一いっ擲てき、上空からの一撃を想像していたのだろうが……そこには、弾丸の発射を待ち鳴動する、ユナイトウェポンが浮遊していた。

「……あれ？」

　ぽかんとし、間抜けな声を上げる元スネイルギルディに、無数の弾丸が殺到し、雷の円柱に変化して拘束する。

「待て！　お互い身一つの勝負と約束したではないか、何だその大砲は!!」

「そうですわ！　あなたを倒すのはこのわたくしの身体からだ一つ！　お受けあそばせ!!」

　話が嚙かみ合わないまま、天空から雷の矢と化したテイルイエローが降り注ぐ。

「ヴォルティック———ッ！　ジャッジメント————————ッ!!」

「私が想像していた一騎討ちと何か違うおあああああああああああああああ!!」
　渾身の蹴撃──ヴォルティックジャッジメントに無防備な本体を直撃され、無念の声を上げながら爆散する元スネイルギルディ。
　最硬を誇るという、主人を失った殻が、虚(むな)しく地面を転がった。
「わたくしだって、こう、殻ごと貫いてかっこよく決めたかったのですわ！　そのために、フルブラストも全弾同じ箇所に当てて、亀裂を入れていましたのに！　防御力の高い敵の打倒方法といえば、一点集中撃破に限りますわ!!」
「いや、全然一箇所に当たってなかったぞ!?」
　亀裂なんて入ってたかなあ、と、目の前に転がってきた殻を見つめる。
　───転がってきた……まるで、意志を持っているかのように、不自然に、俺の元へ。
　瞬間。
「わっ!?」
　殻がパン、と弾(はじ)け、粉になって俺の身体(からだ)に降り注いだ。
　もしかしたら最後の奥の手があったのかもしれないが、その前に主人が消滅したから、鎧(よろい)もその役目を終えたのか……。

「グアアアアアアアアルルルルルル、キシャ──────────ッ!!」
「どうどう、ブルー、もう終わりましたわ！　敵はもういませんわ!!」
　まだ暴れていたテイルブルーを、戦いを終えたイエローがなだめる。

　最後には俺も一緒になって、無む理り矢や理り基地まで引っ張っていった。

◇

「久々の強敵でしたわね」
「……そーね。あいつらが最初っから全力でターゲットの属性力エレメーラを奪いに来てたら、危なかったかも」
　転送ゲートを抜け、コンソールルームへの廊下を歩く。
「明らかに、お前の苦手なタイプを狙ねらって送り込んできたんじゃないか、あれ。もう、無駄に挑発するような戦い方はよそうぜ、愛あい香か」
「わかった。でも、そーじも気をつけてよ。あんな属性の敵が、また現れるかもしれないし」
　しぶしぶ頷うなずき、変身を解除しながら、愛香も俺に注意を促してきた。
　確かにワームギルディたちみたいに、テイルレッドの秘密に近づきそうな属性は厄介だ。
　しかし結局のところ、奴らが脅威なのは、愛する属性のために命をとして戦えることだ。
　それに比べて最近の俺ときたら、ダークグラスパーにからかわれたぐらいで、女の子のことで頭がいっぱいになったりして……こんなことじゃ駄目だ。
　もっとちゃんと、ツインテールに集中しなければ。
　慧え理り那なも変身解除したのに続き、俺も解除しようとし──失敗した。
　男に戻った姿での歩幅を意識して歩いていたため、つんのめりそ

うになる。
「とと」
　今度は立ち止まり、落ち着いて変身解除を試みる。
　全く反応しない。
　愛あい香かと慧理那が、足を止めて振り返った。
「どうしたの？」
「……いや」
　もう一度、ブレスに意識を集中する。まるで腕につけているのがただのアクセサリーであるかのように、ぴくりとも反応しない。
「…………」
「ちょっと、そーじ」
「観み束つか君!?」
「やばい。変身が解けない」
「はあ!?」
「そ、そんな、落ち着いて、もう一度試してみてください!!」
　事態を飲み込み、二人は足早に駆け寄ってくる。
　努めて落ち着こうとはするが、いよいよ俺も焦燥感に駆られ始めた。
「くっ……!!」
　落ち着け。テイルギアは、俺のツインテールの力で動かしているんだ。
　俺がツインテールの手綱を放したら、誰だれが制御できる！
　心の中にツインテールを集中し、思い描くんだ!!
　ブレスに赤い稲妻がほとばしる。
　やがてそれは全身を駆け巡り、俺は激しいエネルギーの奔ほん流りゅうに苦く悶もんした。
「うわああああああ!!」

「そ、そーじ!!」
「観束君!!」

　薄れゆく意識の中、あの日の夢が脳裏を過よぎった。
　悲しそうな目をして、ツインテールを解ほどこうとするテイルレッド。
　駄目だ。──解かないでくれ。
　俺は腱けんが千ち切ぎれんばかりの力を込めて〝空くう〟を蹴り、テイルレッドへと手を伸ばした。

　ぼんやりと、愛あい香かたちの顔が見えた。呆ぼう然ぜんとして、俺を見つめている。
「ッ────！」
　急激に意識が引き戻され、激しい頭痛を覚えた。
　起き上がって、両手、両足と視線を走らせ、状態を確認する。
　出撃前の格好……陽よう月げつ学園の制服だ。ほっと胸を撫なで下ろす。
　妙に柔らかな感触が、手の平に広がった。
「愛香、慧え理り那な、ごめん、心配かけて。変身は解けたみたいだ」
　知らない女の子の声が、俺の言葉を代弁してくれた。
「一度トゥアールにテイルギアを見てもらうことにするよ」
　もう一度その女の子が俺に先んじて言ってくれたので、俺はこれ以上二人に心配をかけまいと、歩き出す。
　ふわりと揺れる自分のツインテールを見て、悲しい夢の結末を想う。
　あの時きっと、俺の手は届いたんだ。このツインテールに。

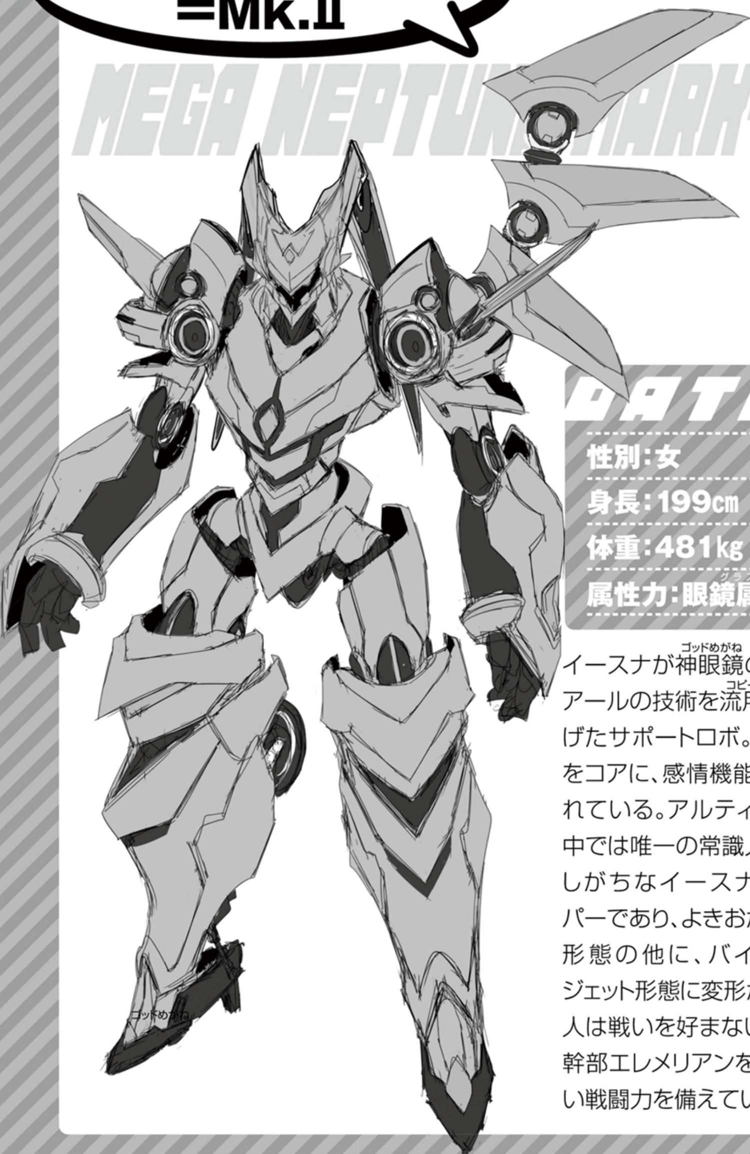
「□□□□□□」

　自分の、ツインテール？
　ようやく違和感に気づき、垂れ下がるツインテールを両手で掬(すく)う。
「やばい、やっぱり変身解けてないじゃないか！　あれ!?」
　意識が混濁(こんだく)しているわけではない。しっかりと覚醒しているにもかかわらず、俺は現状が把握できずに狼狽(うろた)えた。
　振り返ると、愛香たちは先ほどの位置に立ったまま、俺を見つめている。
　もう一度自分の手足を確認する。
　テイルレッドの小さな手ではないが、よく見れば、慣れ親しんだ自分自身の手でもない。
　何より、ツインテールが違う。
　震(ふる)える手で、そっと掬う。
　俺のツインテールが、見知らぬツインテールになっていることをようやく悟った。
「このツインテールは、誰のツインテールだ!?」
　その時俺は初めて、さっきまで別の女の子が代弁してくれていたと思っていた俺の言葉を、俺自身が発していることに気づいた。
「まさか……」
　そして、困惑するその女の子の声が……実は、よく聞いていたものに似ていることも。
　愛香は、泣きそうな声で事実を告げた。
「あんた……変身が解けても、ツインテールのままなのよ!!」

キャラクター名鑑 014

メガ・ネプチューン=Mk.Ⅱ

MEGA NEPTUNE MARK-Ⅱ



DATA

性別：女

身長：199㎝

体重：481㎏

属性力：眼鏡属性（グラス）

イースナが神眼鏡（ゴッドめがね）の力でトゥアールの技術を流用（コピー）し作り上げたサポートロボ。眼鏡属性（グラス）をコアに、感情機能が搭載されている。アルティメギルの中では唯一の常識人で、暴走しがちなイースナのストッパーであり、よきおかん。基本形態の他に、バイク形態、ジェット形態に変形が可能。本人は戦いを好まないが、並の幹部エレメリアンを上回る高い戦闘力を備えている。

第二章　ツインテールな日々。

　横一列に並べた椅子（いす）に愛香（あいか）たちが座り、それに向き合う形で俺一人が座っている。
　地下基地のコンソールルームは、緊迫した雰囲気に包まれていた。
　まるで今から、面接でも始まるかのようだ。
　今俺の身に起きていることが、不安でないかと言われれば嘘（うそ）になる。
　しかし、それでもパニックを起こさずにいられるのは、仲間がついていてくれることと、すでに最近、胸騒ぎを感じていたことが大きいと思う。
　ダークグラスパーとの戦いの後から、変身する度に感じていた。
　このまま、変身が解けなくなったらどうしよう——と。
　漠然と感じていた不安が、今、現実になってしまったのだ。

　正面に座るトゥアールがやたらと脚を組み替えながら、俺に質問した。
「総二（そうじ）様、試しにもう一回、変身してみていただけますか」
「ああ……」
　俺は立ち上がると右腕を胸の前でかざし、変身した。すぐに視点が下がる。
　この視点にも、随分と慣れた。
　鏡で見なくてもわかる、これはいつものテイルレッドの身長だ。
「テイルレッドには、普通に変身できるようですね。では、その逆は……」

頷うなずき、俺は再び変身を解除する。

ついさっきまでの不調が嘘うそのように、あっさりと変身解除はできたのだが──

「……女性の姿ですわ」

慧え理り那なが席を立ち、俺の前までやって来る。

ちょこん、と肩をくっつけ合い、慧理那と身長を比較した。

「でも、背丈は観み束つか君より、随分と縮んでいますわ。わたくしより、少しだけ大きいくらい」

子供の背比べのような微笑ほほえましさだが、それは、俺でもテイルレッドの身長でもない……全く異質の存在になったのだという証明でもある。

待ちかねたように母さんが席から立ち上がる。俺の身体からだをぺたぺた触った後、母さんは夢見る乙女のように手を組み、身体をくねらせた。

「やだわ総そうちゃん、本当に女の子になっちゃったの!?　ああもうどうしましょう、ちょっと待ってて、今父さんの遺影持ってくるから!!　見せてあげなくっちゃ!!」

「持ってくんなあああああああああああああああああ!!」

俺の訴えも虚むなしく、母さんは一流のスケーターを思わせる軽やかな足運びスケーティングで部屋を出ていった。

「どうぞ、総そう二じ様」

どこから持ってきたのか、トゥアールが俺の目の前に姿見を置く。

そこに映っていたのは、テイルレッドより成長した姿のテイルレッド──テイルギアをまとわずツインテールになった、少女の姿の俺だった。

「どーいうことよトゥアール────────────ッ!!」

愛(あい)香(か)がトゥアールの胸倉を摑(つか)み上げる。やけにすんなりと上着のボタンが外れ、胸元が露(あら)わになったのが気になる。

「残念なのは私ですよ！　どうせ女体化するなら……テイルレッドの外見のままだったら！　どんなに幸福だったか……!!」

「どっちだろうがおんなじよ！」

「愛香さんには無理でしょう……でも、私はできます！　テイルレッドとならできます!!」

また例によって吹っ飛ばされたが、トゥアールは飛ばされても自力で着地した。気迫がいつもと違う。

「もしかしたら、スネイルギルディの能力のせいなのかもしれない」

俺は、今、唯一思いつく理由を言った。

「女体化が!?」

「ああ。戦いの後、あいつの殻が急に爆発して、その粉をかぶっちまった。その時は特に気にしなかったんだけど……あいつ、性転換属性(トランスセクシャル)だろ。そういう力があってもおかしくない」

トゥアールは首を振って否定する。

「考えられません。フォトンアブソーバーの防護を透過して肉体に完(かん)璧(ぺき)に作用する能力……そこまで強大な属性力(エレメーラ)、幹部エレメリアンでさえ持ち得るかどうか」

しかし、今のところ、原因は他に考えられない。

いや、元々最近俺のテイルギアは調子が悪かった。抵抗力が弱くなっていたのかもしれない。

責任を感じさせるだろうから、開発者のトゥアールには言えないな……。

「ああうううう、どーして、どーして半端に大きくなっちゃったんですかあ」

巻き戻し映像のように、再び愛あい香かに吹き飛ばされ、またもや軽やかに着地するトゥアール。

「案外、そーじの無意識の抵抗かもしれないわよ。女体化しちゃうにしても、テイルレッドの姿のままじゃ、トゥアールに何されるかわからないもの。防衛本能ね」

あえて追撃することはせず、愛香はツインテールを掻かき上げて溜ため息いきをついた。

「いえ、これが総そう二じ様が本来なるはずだったテイルレッドの姿かもしれません」

「本来？　だって、高校生にしては小、さ…………」

「別にわたくしは気にしませんわ、津つ辺べさん」

慧え理り那なを気遣ったのか途中で言い淀んだ愛香だったが、それをも察して、慧理那は苦笑交じりにフォローした。

「本来の姿……ようするに、俺のテイルギアに子供になる効果がなかったら、テイルレッドはこのぐらいの身長だったってことか？」

「一般的に、思春期の男性と女性とでは、成長速度にかなりの差があると言われています。総二様の肉体成熟度を女性に当てはめれば、本来はこのぐらいだったはずなんです」

「じゃあ何で胸があるのよ、中学生ぐらいの身長よ!?」

「いや、普通中学生にもなれば、胸はありますから──あれ、高校生でも胸のない人がいる!?」

愛香を見るや、くわっと目を見開いて大おお仰ぎょうに驚くトゥアール。

すぐさま愛香の怒りの鉄てっ拳けんで舞い飛んだトゥアールだったが、その反動を利用し俺の背後に回り込むと後ろから抱きついてきた。豊満な胸が、背中に存分に押しつけられる。

それだけでは済まず、トゥアールはやけに育ってしまった俺の胸

を、鷲わし掴づかみにしてきた。

「ちょっと、トゥアール、何してるんだ!?」

「あん、動かないでください、総二様。私は医学知識も多少はありますので、少々触診をさせていただこうと思いまして。やましさはありません」

　お医者様の涎よだれが、めっちゃ肩にかかっているんですが、本当にやましさはないと!?

「本物ですねえ……お、これは意外と……Ｄカップぐらいあるかも」

「Ｄですって!?　今、Ｄと言ったの!?」

　椅い子すを蹴倒す勢いで愛あい香かが立ち上がる。俺は、目を合わせないようにした。

　トゥアールはさらに身体からだを密着させてくる。

「一応悪いしこりがないか、ちゃんと確認しますね～」

「何で女になって数十分で、そこまでチェックされないといけないんだ!?」

　トゥアールは完全に我を忘れ、その過呼吸にも似た荒々しい息が、しきりに首筋や耳をくすぐる。

「ト、トゥアールッ……耳、息がぁっ……」

「ふひへぇ!?　何ですかこの初心な反応っ……よし、もう隅々まで検査しましょう、服を全部脱いでください!!」

　愛香のドロップキックを側頭部に受け、トゥアールは俺から引き剝はがされた。

「見損なったわよトゥアール！　あんた、小っちゃい女の子を変な目で見ても、ある程度成長した女には手を出さないと思ってたのに!!」

　むしろ最初に見損なって然るべきじゃないのか、それは。

「マンモグラフィさんが渾身の力を込めて何とか薄皮一枚挟むのがやっとの人は、医療行為に口を挟まないでください！　……ごあああああおっぱいががせんべいになるー!!」



　人間マンモグラフィが、トゥアールに無慈悲な医療行為を施ほどこす。
「冗談じゃないわよ、男に成熟度で負けるなん……て……」
　憎しみを込めた視線を俺の胸に送っていた愛あい香かだったが、何かに気づき赤面し、慌て始める。
「っ……！　そーじ！　今すぐ何か羽は織おりなさい!!」
「え？」
「う、浮いちゃってる……じゃない……」
　自分の胸元を見る。
　着ている服は、男子制服だ。夏服で、上はシャツ一枚。
　肩口も半袖そでもサイズが全く合っておらず、ズボンにいたってはベルトもろともずり下がりそうだ。そこまでぶかぶかなのに、胸だけがシャツを持ち上げている。
　先端の形がシャツの生地に浮き出ている上に、薄く透けて見えている。
　俺は慌てて視線を前に戻した。
「何でブラしてないのよ！」
「無む茶ちゃ言うなよ！　突然女になって即座に、あ、いけないブラしなくちゃ、なんて機転の利く男がいると思うか!?」
　変身した状態ではないから、身体からだに合わせて服が勝手にフィットしてくれるなんて、もちろんありえない。
　あれ……でも、今俺のツインテールを結んでいるこの普通のリボンは、元はなかったものだよな。テイルレッドに変身している時は、フォースリヴォンで結ばれているんだから。
　テイルギアの力が、ツインテールだけは守ろうと作用したのかもしれない。
　仮にスネイルギルディの能力が強大であっても、ツインテールだ

けは不可侵だったんだ。
「ちょ、ちょっと待ってなさい……家からあたしのブラ持ってくるから……」
　耳まで真っ赤にして、愛香が立ち上がる。テンパっているのかもしれないが、これはさすがに止めなければ。
「いや、待て！　それは駄目だ!!」
「ちゃんと洗濯したやつよ！　当たり前でしょ!!」
　違う、そーじゃなくて!!
　白衣をはためかせ、トゥアールが愛香の前に立ちはだかった。
「フッ……引っ込んでいなさい、雑娘ザコが」
「何勝ち誇ってんのよ！」
「愛香さんのブラなどつけたら、総そう二じ様が窒息死してしまいます。っていうか愛香さんなんて、絆ばん創そう膏こうで充分でしょう絆創膏で。あ、ディスクがちょうど二枚ありますから、差し上げます」
　ＤＶＤかＢＤか、もしくはそれ以外の異世界規格か、トゥアールはポケットから円盤を二枚取り出して、愛香に渡した。
「こんなもん使えるわけないでしょ!!」
「えっ、この大きさでも先っちょ周辺全部隠れないんですか!?」
「隠れるに決まってるでしょーが！　断面がこのサイズになるまであんたのおっぱい輪切りにしてくわよ!!」
　……女の子って何で、男がいても気にせず身体情報を次々に暴露していくんだろう……。
　俺のこと、異性だって思っていないのかもしれないな。いや、今はその通りなんだけど。
「総そう二じ様、見た目もそうですが、やはりブラジャーはしないと色々困ります」
「ブラジャーはいいから、早く元に戻る方法を調べてくれよ……。

シャツ重ね着して我慢するから」
「いけません！　そのうち擦こすれて痛くなってきますよ！　それにそんなに大きいんですから、何もつけずに激しい運動したら、型崩れしちゃいます！」
「型崩れするほど長い間、女の身体からだでいるつもりはないんだよ、俺は!!」
　くっ、意識したら、何か胸がやたらと重く感じてきた……。
「観み束つか君、顔色が悪いですわ……大丈夫ですの？」
　慧ぇ理り那なが心配そうに覗のぞき込んでくる。
　胸だけじゃない。全身、まるで自分の身体じゃないみたいに、不自然で動かしづらい。
「何か、身体にすごい違和感があるんだ……。テイルレッドに変身してる時は、ここまでじゃなかったのに」
　慧理那は顔を真っ赤にしてトゥアールに耳打ちし、何か相談している。
「……違和感って、ま、まさか観束君、その、女の子……の……」
「生理ですか？　さすがにないでしょう」
「あわわわ、はっきり言わないでくださいましっ」
　相談を結託と勘違いしたのか、愛あい香かが悔しがりながら、慧理那へと指を突きつけた。
「会長！　何でトゥアール側についてるのよ！　Ａカップ仲間でしょ!!」
　せめて、ついでに他の女の子の情報まで暴露するのはやめろ、愛香……。
「わ、わたくしも変身すればＥカップにはなりますし……」
「測ったの!?　測ったのね!?　家で変身してサイズ測ったんでしょ!!」

「慧理那さん、負け犬の遠とお吠ぼえなど聞く必要はありませんよ。しかもさりげにＡカップとか見栄を張っていますが、私は愛香さんがＡＡカップなのを知っています」
「いいでしょ！　ＡＡもＡも変わんないわよ!!」
　普通、Ａ、ＡＡ、ＡＡＡと、重なって並ぶほど位が上のような気がするが、ブラジャーは違うのか。
　……この知識、本当に俺に必要なのか!?
「じゃあ、今から一緒にブラジャー買いに行きましょう！」
　トゥアールが嬉うれしそうに手を叩たたいて提案する。
「俺も!?　無理に決まってるだろ！」
　下着売り場なんて、デパートとかで通路に面してるその前を歩くだけでも恥ずかしいってのに、買い物だなんて絶対無理だ!!
「適当に何か見み繕つくろって二、三枚買ってきてくれればいいから、頼むよ……柄がらとかどうでもいいから」
「総そう二じ様、ブラジャーはトランクスみたいにＳ□Ｍ□Ｌなんて大雑把に決められるものじゃないんですよ!!」
「え、ＡとかＢとかわかればいいんだろ？　それなら、今測ってくれれば……」
「ちーがーいーまーすー！　それじゃ駄目なんです、下着はきちんと自分に合ったものを選ばないと！　血行やリンパの巡りが悪くなって、健康に害を及ぼしますよ!!」
　いつになくぐいぐいと押してくるトゥアール。
　だから、そういう長期的な健康を気にするより、一秒でも早く男に戻る方法を調べて欲しいんだが……。
　愛あい香かが、俺とトゥアールの間に割って入る。
「そうだ！　ワームギルディの男の娘属性ガールズボーイ！　男おとこの娘こってくらいだから、使えば男に戻れるんじゃない!?」

「お前は何度希望を打ち砕かれれば懲りるんだ……」
　属性玉エレメーラオーブが名前通りの効果にならないことは、巨乳属性ラージバストの時にお前が散々身を以もって知った事実じゃないか……。
「一応分析してみたのですが、ワームギルディの属性玉エレメーラオーブは発動できるほど純度が高くありませんでした」
　先手を打っていたような用意のよさで、すかさず否定するトゥアール。
「じゃあ、スネイルギルディの性転換属性トランスセクシャル！　性転換して男に戻るかも!!」
「俺の話聞いてたか!?」
　胸の属性の一件から、愛香は全く進歩していないな……。

　□□□□□!?

　身体からだに走るピリッとした刺激に、俺は身み震ぶるいした。
「どーしたの、そーじ」
「緊急事態だ」
　何で、この危険に真っ先に気づかなかったんだ。
　元に戻れなくなっても、ツインテールであるという安心感が、俺を油断させた。
「……トイレに行きたい……」
「ちょ、えええ━━━━━━っ!?」
　俺だって、こんなこと言いたくなかったよ！
　やばい。男の時と、感覚が全然違う。我慢しようとして力を込めても、するっと抜けていく感じがする。
　これじゃあ五分と我慢できる気がしない。
　気を抜いたら、すぐにでも決壊してしまいそうだ。

「トゥアール！　頼む！　早く元に戻る機械造ってくれ！」
「残念ながら……」
　手の施ほどこしようのない病状であることを患者の家族に伝える医師のような無念さを滲にじませた顔で、トゥアールは首を横に振る。
　当然俺は「何とかならないんですか！」と縋すがりつくが、トゥアールはただ首を振るだけだ。
　うっすらと開いた瞳には、悪徳医師のような濁った感情が見えるが、気のせいだと信じたい。
「う、うう……どうしよう……」
　服に関しては、いい。我慢するさ。
　ブラジャーをつけなければ駄目だといわれたら、渋々ではあっても従おう。
　でも、トイレは駄目だ。絶対駄目だ！
　押し寄せる尿意に耐えきれず、咄とっ嗟さに股こ間かんを押さえようとして、すぐに我に返った。
　それも駄目だ。今、俺は、自分の身体からだに不用意に触れることさえ許されない状態なんだ。
「そーじ、無理しないで……行きなよ」
　もじもじしながら小声で促す愛あい香か。
「だって、やり方がわからない……どこか、摘つまんだり押さえたりしなくちゃ駄目なのか？」
「聞かないでよそんなこと――――――――――――――――っ!!」
　大声が……に響く……やばい……。
「ちょっと育っちゃって身体のストライクゾーンは外れたと思いましたが、この純真無む垢くさが私的にヒットです！　全部私にお任せください総そう二じ様、拭き拭きアフターケアまで万全です!!」
　そろそろ目が正気じゃなくなってきているトゥアールには、身の

危険を感じる。
　そうなると――
　謀ったようなタイミングで、母さんが遺影を背中に担いで帰ってきた。
　……担いで!?
「ただいまー！　うふふ、お父さん、ほーら、総そうちゃんの晴れ姿よ～」
「何で、巨大化してんだ……!!」
　親父おやじの遺影は、俺の与あずかり知らぬ間にバージョンアップを果たしていた。
　この人たち風に言えば、悪の秘密組織のホールに飾られているレリーフぐらいのサイズだ。
「っ！　あ、あの、神しん堂どう慧え理り那なです、初めましてっ……」
　何な故ぜか慧理那が遺影に挨あい拶さつをしている。
　と、とにかく、頼むなら身内である母さんしかいない。
「か、母さん、お願いだ……い、一緒にトイレに……」
　母さんなら、付き添ってもらってもギリギリ恥ずかしさに耐えられる。
　しかし、母さんは腰に手を当て、ぷんぷんと怒り出した。
「高校生にもなって母さんにおトイレつき合わせるなんて、何考えてるの！　みんなに手伝ってもらいなさい!!　母さんは、後ろからそれをしっかりと見守るわ!!」
「何考えてんだこの母親……」
　意識が遠くなってきた。膝ひざから崩れ落ちそうになるが、そうなったらもうハルマゲドンは止められない。
「総そう二じ様！　変身してください!!」
　トゥアールがドヤ顔でサムズアップしてくる。

藁わらにも縋すがる思いで変身したが、尿意は収まるどころかますます強くなった気がする。
「で……ど、どうすれば、いいん、だ……」
「私も現役時代一度も使ったことありませんが、ついにエクセリオンショウツの力を解き放つ時がやって来たのです!!」
「何てこった、そういえば、そんなの、あった……」
もはや記憶の彼方かなたに起き去られていた、テイルギアの標準搭載機能だ。
もう、いいじゃないか。
おもらしと思うから駄目なんだ。
前にテレビで、宇宙飛行士の船外活動のドキュメンタリーを見た時に知った。長時間の作業が必要な職業では、オムツを着用するのは珍しいことではないという。
だから……使える機能を使うのは、罪ではないはずだ……。
「あ、う、ううううう……」
「そーじ！　負けちゃ駄目！　トゥアールの思うつぼよ!!」
「くくくへへへへへへ、必死に我慢する姿……最高です……我慢しきれず決壊しても、このまま我慢し続けても、私にとっては至福の時です……」
トゥアールが血走った目でガン見してくる。
恐怖に負けて、もう今にも決壊してしまいそうだ。
「冥めい府ふに堕おちろクソド変態があああああああああああああああああああああ!!」
愛あい香かの渾身のハイキックを側頭部に受けるトゥアール。
しかし、身動じろぎさえせず、けろっとしている。
「……今、何かしましたか？」
「な、効いてない!?」

「至福の時を迎え、かつてないほど昂たかぶっている今の私に、愛あい香かさんごときの攻撃など通用しません」

　愛香はムキになって次々に攻撃を加えていくが、トゥアールはもう愛香を見向きすらせず、ただ俺を犯罪者の目で見つめてくる。

「ああ、あ、暴れるなああああああ振動があああぁぁ……!!」

「はい！　わたくしに何かできることがありまして!?」

　ただおろおろするだけだった慧え理り那なが、指名されたと勘違いして駆け寄ってくる。

「いや神しん堂どうじゃなくて……あっぐ、ぐ、ツッコむ余裕ももう、ない……」

「……こうなったら……少し待ってください、観み束つか君!!」

　決然とした面おも持もちで、奥の整理棚に向かう慧理那。

　壁の操作ボタンを押すと、冷蔵スペースが展開した。中にはジュースなどのドリンク類が入っている。

　一体何をするつもりか、震ふるえながら見守っていると、なんと慧理那は、ジュースのペットボトルを次々に取り出し、一気飲みし始めたのだ。

「な、何を……して……」

　ペットボトルを両手に抱えながら、俺の方にふらふらと歩いてくる慧理那。

　トゥアールは何かを察したように、慧理那に駆け寄った。

「その意気やよし！　私も協力します！　さあ慧理那さん、これを！」

　ポケットから取り出した薬瓶を手渡すトゥアール。

「これは……？」

「愛香さんの飲み物にブチ込む機会を虎こ視し眈たん々たんと窺うかがっていたのですが、愛香さんが疑り深くて今日まで使えず仕舞いだっ

た、トゥアール特製利尿剤！　即効性です!!」

　やめろおおおおお！　今、そんな単語を聞くだけでもダメージ積み増しになりそうだ!!

　薬瓶から錠剤を取り出し、躊ちゅう躇ちょせずに飲み下す慧理那。

　途端、ビクンビクンと震えながら、俺にしな垂れかかってきた。

　俺のツインテールと、慧理那のツインテールとが、緩やかに重なり合う。

「慧理那、ま、まさか……」

「わ、わたくしにできるのは……苦しみを共に分かち合うことだけですわ……！　仲間として……い、一緒に……おトイレを我慢しましょう、観束君……」

　苦しみと言いながら、口くち端はを吊っり上げ、はあはあと息を荒らげ始める慧理那。

　どうすればいいのこの子。

　喜びや楽しさだけではない。痛みも苦しみも、悲しみも分かち合うのが、本当の仲間だ。

　しかし、尿意など分かち合いたくない……!!

　いや、待てよ。

　休み時間、連れ立ってトイレに行く女の子が多いのは、まさか……分かち合って……

「うおおおあああああ……」

　もはや、思考も正常ではなくなってきた。

「利尿、剤が、作れるなら、その、逆も……作れな、いのか……トゥア……」

「わーいわーいダブル我慢！　ダブル我慢!!」

　トゥアール……大恩あるお前だが、今、ただの一度だけ、グランドブレイザーを撃たせてはくれまいか──

「もうっ……来なさい！　変身解除して!!」

　愛あい香かに腕を掴つかまれ、強引に歩かされる。

　慌てて変身を解除した俺は、そのままコンソールルームを出て、出口の近くにあるトイレへと連れて行かれた。

「…………中、入って」

　俺は言いかけた言葉を飲み込んだ。

　言葉こそぶっきらぼうだが、愛香は耳まで真っ赤にしている。

　愛香だって、恥ずかしいのを我慢してくれているんだ。

　俺は無言で頷うなずき、ズボンのベルトを外そうとするが……もう、手に力が入らない。

「……目、瞑つぶってて」

　愛香は中腰になり、カチャカチャと音を立ててズボンのベルトを外し始めた。

　そのままトランクスにも手をかけたので、俺は言われた通りぎゅっと目を瞑った。

「っ……い、い、いいわよ、座って。目も開けて」

　上うわ蓋ぶたを開けた便座へと腰を下ろす。

「ストップ！」

　途中で肩を掴まれ、ギクリとする。

「ツインテール摘つまんで、お腹なかの方に持ってくるとかして。気をつけないと、床についちゃうでしょ。さっき椅い子すに座ってた時も、気づいてなかったわよ」

　――――そうか……。

　変身しなくても、女の姿に、ツインテールになったということは。

　日常生活の中で、ほんの些さ細さいなことであろうと、常にツイン

テールを気遣わなければいけないということだ。
　焦って、大切なことを忘れていた。ただ属性力エレメーラが世界一強いだけでは、駄目なんだ。もっと、ツインテールのことを考えなくちゃ……。

　天上から光が差しているように感じる。
　一通りの手順を教えてもらい、何とか危機を脱した。次からは一人でも大丈夫だろう。
　手を洗って化粧室を出ると、先に出た愛あい香かが壁に背をもたれて待っていた。
「ごめん、愛香……」
「…………気にしなくていいから」
　愛香だって、恥ずかしいんだ。合わせる顔がない、なんて思ったら、それこそ申し訳が立たない。引きずらないように努めて、俺たちはコンソールルームへと戻った。
　──モニターの前で、トゥアールが痙けい攣れんしながら倒れている。
「そーじがここを離れて心の支えがなくなった瞬間、蓄積されたダメージが一気に身体からだを駆け巡ったのね……」
　そしてその横では、顔を青くして震ふるえる慧え理り那なが。
「も、もう、立てません……」
　俺は、再び愛香に頭を下げるのだった。
「……愛香……慧理那も連れて行ってやってくれ。頼む」
「嘘うそでしょ……」

◇

　基地まで慧理那を迎えに来た桜さくら川がわ先生は、当然ながら俺の

姿を見て絶句した。

　事情を説明すると、桜さくら川がわ先生は手に持っていた婚こん姻いん届とどけを、エプロンのポケットに仕舞った。

「……トゥアール。早く観み束つかを元に戻す方法を探すんだ！」

「もちろんやりますよ！　別に尊みことさんのためじゃありませんからね!!」

「フッ……ツンデレというやつか、私も若い子の流は行やりは押さえているつもりだ」

「全然的外れじゃないですか!!」

　桜川先生ぐらいのリアクションで済むなら、心強い。

　周囲に騒がれると、逆に冷静になって、気が動転しそうだからな。

「さあ、お嬢様、帰りましょう」

　エレベーターの前まで、慧理那を送る。

　先生に促されても、慧理那は俺をじっと見て心配そうにし、その場を動こうとしない。

「本当に、大丈夫ですの？」

「大丈夫」

「本当の本当に、大丈夫ですの!?」

「な、何とかなるって」

　後ろ髪ツインテールを引かれるようだが、慧理那は桜川先生に連れられ、渋々自宅に帰った。

　不安げなその後ろ姿が見えなくなるやいなや、トゥアールは意気揚々と提案してきた。

「よし！　総そう二じ様、そろそろお風ふ呂ろの時間ですね!!」

「一日ぐらい、入んなくたっていいよ」

　今日はもうこれ以上、神経を磨すり減らしたくない。

「きちんと洗わないと、ツインテールが傷みますよ」
「それは駄目だ」
　俺は即答し、足早に基地を後にする。
　とにかく、身体からだを見ないようにすれば大丈夫だ。
　最難関のトイレを乗り越えたんだ、もうちょっとやそっとじゃ動じないぞ。
「待って、待ちなさい!!」
　俺とトゥアールを、慌てて追いかけてくる愛あい香か。
　さらにその後ろからは母さんが、相変わらずホバー走行じみた不可思議な歩法で、一定の距離を保ってついてくる。
「大丈夫、そーじ？　一人で入れる!?」
「当たり前だろ。ツインテールさえきちんと洗えば、あとは水でもブッかけとけばいいんだから」
「それが駄目だっつってんの！　女の子の身体はか弱いんだから、手荒に扱っちゃ駄目!!」
　────このギャグは、笑ってやるのが正解なのだろうか……。
　一番身近にいる、そのか弱い女の子とやらが、変身しなくても素手でコンクリートぐらいはブチ壊すのを毎日のように見ているんだが。
「ご心配なさらず、愛香さん。お風呂には私が付き添います」
「またよからぬこと企たくらんでんでしょ！　いいわよ、あたしが付き添うから!!」
「愛香さんは大だい胸きょう筋きんしかありませんから、おっぱいの洗い方なんて知らないでしょう！　私がレクチャーします!!」
「ふざけんじゃないわよ、ツインテールの洗い方はあたしじゃなきゃレクチャーできないでしょ!!」
　──浴室を前にして、俺は足を止める。

俺も、口にした愛香本人でさえも、左から右へ流していくような、二人のいつもの口くち喧げん嘩か。

そんなたわいないはずの一言に、愛香が息を飲む気配を感じた。

喉のどまで出かかった言葉を飲み込み、俺は二人の方へと振り返る。

トゥアールはからっと笑いながら、愛香の肩を叩たたいていた。

「……仕方ありませんね、今日は欲求不満な愛香さんに譲ります。私はすぐさま鏡をマジックミラーに改造して、裏側から見守るとしますか」

「そーじ。先入って、脱いでて」

愛あい香かは軽く突き飛ばすように俺を脱衣場へと押しやり、ドアを閉めた。

乱暴にドアを閉めたせいで、わずかに隙すき間まが空いており、二人の会話が聞こえてくる。

「…………じゃ、あんたも脱いで」

愛香がトゥアールの服に手をかけたので、俺は覗のぞき見るのを止やめ、後ろを向いた。

「はい？」

「脱ぎなさい」

「ひい!?　ついに女まで射程に捉えた蛮族!?」

ビリビリと服を破る音が聞こえる。

「……ごめん、トゥアール……言いすぎたわ」

「か細く謝りながら何素手で軽々と服引き千ち切ぎってるんですか！　エロアニメの世界に帰ってください!!」

照れ隠しにしても、普通にできないのか……。

「いいから、三人で入るわよ」

「いやー服ビリビリという夢も愛香さんに汚されたー！　ああも

う、パンツくらい自分で脱ぎます!!」
「何よ、見せらんないようなのはいてるの？」
「失礼な！　私のはかわいい紐ひもパンです！　いつ何時、『パンツの紐を解ほどきたい』と思われてもリクエストに応こたえられるよう、緩めに結んであるんですからね!!」
　二人の会話にはもう、何の遠慮もない。俺は苦笑し、シャツに手をかけた。
　見ないように、見ないように。
　十何年住んだ家だ、極端な話、目を瞑つぶってても服脱いで風ふ呂ろに浸つかるぐらいはできるさ。
　──俺はあの時……愛香に一言言うつもりだった。
　遠慮のいらない仲にだって、守るべき一線、払うべき敬意はあるからだ。
　でも、踏みとどまってよかった。
　愛香もちゃんと、わかってくれている。
「……ん？」
　ちょっと待て。
　さっき愛香、三人で入るって──
「ヒャッハアアアアアアアアアアアアアアアアアおっぱい祭りの開催です!!」
　不意打ちだった。
　声に驚いて振り向くと、一糸纏まとわぬトゥアールが俺の顔面目掛け突っ込んでくるところだった。
「身体からだにタオルを巻けっつってんのよ!!」
　愛香が背中に見事なタックルを決め、インターセプトする。
　トゥアールは顔面から風ふ呂ろ場ばの床のタイルにビターンと突っ込んだ。

「何がタオルですか、本当に隠したいなら水着でしょう！　どうせ頃合い見計らって総そう二じ様の前で落とすつもりなんでしょう、いやらしい!!　いつもいつもいい子ぶって!!」
「……もういい。あたしが馬ば鹿かだったわ!!　もうぜーったい、謝ったりなんかしない!!」
　愛あい香かはタオルを巻いているが、愛香の握力でギチギチに端はしを捻ねじり止めてなお、タオルは心こころ許もとない。
　引っかかるものがないから、油断すればすぐに落ち──
「……そーじ、ブラ嫌いやがってたわよね？　あたしは解決する方法を知っているわよ？　なくなればいいんだもの」
　最新のデジカメの機能をも上回る認証力で俺の視線を察知した愛香が、冷たく言い放つ。
「いや、その気持ちだけ受け取っておく！」
　よく愛香はツインテールに対する俺の第六感を訝いぶかしんでくるが、愛香も胸に対する思考に過敏になっている気がする。
「タオルなんて無粋ですよ！　あのくされストーカーに全裸見せられバージンを奪われてしまったんですから、もう侘わび寂さびなんてクソくらえです！　好きあらばどんどん見せていきましょう!!　さあ総二様、まずは私が担当のおっぱいの洗い方から!!」
「うわああ、ちょっと待て!!」
　愛香は無言でトゥアールの両足首を摑つかみ、むんずと持ち上げた。
　そして浴槽の上にある乾燥用のポールに縄をかけ、その細い足首をきつく結んだ。
「ごぶぶぶぶぶぶぉあ」
　江戸時代の罪人のように、トゥアールは逆さまに吊つるされ、水責めの刑に処される。

いつものパンツ丸出しどころか、今日にいたってはお尻まで丸見えになっているが、苦悶(くもん)の声が、俺に色気というものを感じさせることを頑(かたく)なに許さない。

バスチェアに座り、愛香のレクチャーを待つ。
「じゃあ、ツインテールを解(ほど)くわよ。はい、見て」
愛香は、自分のツインテールを解き始めた。
「な、何だって!?　解くのか!?」
「何宇宙人でも見たような顔してるのよ、それが当たり前なの!!」
「で、でも、でも……解かなくても洗おうと思えば……」
「四六時中縛ってたら根元が傷むでしょ!!　あんたツインテールがぽろっと取れてもいいの!?」
想像しただけで両腕を切り落とされるような激痛を感じた俺は、断腸の思いで自分のツインテールを解いた。
リボンを解く感覚。髪がはらりと背中に落ちていく感触──。
つい、鏡に映るその光景を注視してしまった。
女になった自分の裸身も視界に映らないほどに、身体(からだ)を満たしていく虚無感。
ツインテールを解(ほど)くというのは、こんなにも辛(つら)いことだったのか……。
「死にそうな顔してんじゃないの。トゥアールだって頑張ってるのよ」
「ごがぼぼぼぼぼぼぼぼ」
トゥアールは、あれは自発的に頑張っているのだろうか……。
「って、何当たり前に男物のシャンプー使おうとしてんの！　えーと……どうしよ、未(み)春(はる)おばさんの借りてもいいかな……」
「ごがぼぼぼ、ごーぼぼぶぶぶぼごご」

「……白衣のポケット？　ちょっと待って、取ってくる……あ、ほんとだ、持ってきたのね。ありがと、トゥアール」
「感謝の気持ちがあるならいい加減降ろしてやれよ!!」
　愛あい香かはボトル二本と、チューブタイプのものの計三本を持ってきて、俺の前に置いた。
　こんだけの物がなんで、白衣のポケットに収納できるのだろう。
「まずシャンプーね……違う！　爪つめ立てて頭引っ掻かくんじゃないの!!」
　早速愛香の駄目出しを受ける。力加減が難しい。
「髪も、擦こすりすぎ！　あんた、ツインテール好きだ好きだ言うくせに、扱いが雑よ!!」



「すまん……」

　そうか、ツインテールを解ほどいてしまったから、加減がわからなくなってるんだ……。

　しかし、髪の毛を一通り洗って流すだけでも、いつもの十倍ぐらい時間がかかかった気がする。

　そのあと、二通りのケアをしたようで、流し加減が重要だと言われた。

「お風ふ呂ろに入る時は、髪の毛を浴槽に浮かせちゃ駄目よ。ちゃんとまとめて」

「髪の毛っていうか、トゥアールが浮いてるぞ……」

　風呂から上がってからも、さらにアフターケアは続く。

「ドライヤーで乾かすのか？」

「しっかりタオルドライしてからじゃなきゃ駄目よ。……ちょっと、風強すぎ！　弱でいいのよ‼」

「俺、いっつもターボで乾かしてるけど……」

「熱風延々と当て続けたら、髪も地肌も傷むでしょ！　もう少し気を使いなさい、普段のあたしたちのツインテールは、テイルギアに守られてるわけじゃないのよ⁉」

「わ、わかった……すまん」

　大変なんだな、ツインテールをケアするのって……。

　考えを読んだかのように、愛あい香かは俺のおでこを指で軽く弾はじいた。

「そりゃあ、あんたは今まで、変身すればすぐお手軽にツインテールが手に入るからわからなかったでしょうけど……結構大変なのよ？　ツインテールにするのって」

「ああ、そうだな」

　ある意味、エレメリアンと戦うよりもくたくたになった。
　たった一度でも、充分にわかったよ。
　女の子はみんな、大変な努力をして、ツインテールを維持しているんだって。

　そしてこの大切なツインテールを、世界で一番大好きだった女の子が、自分の意志で手放す時……。
　それは、どんなに心が痛かっただろうか。

　俺が振り向くと、トゥアールは、まだがぼがぼいっていた。
「降ろせよ!!」

◇

　総そう二じが肉体的に女め々めしくなり大変なことになっている最中、一心不乱に漢おとこを磨く戦士がいた。
　看護服属性ナースの神童、スワンギルディ。
　亡き長おさの遺志を受け継ぎ、ツインテイルズ打倒に向けて黙々と修行を続ける日々である。
　策を弄ろうして戦う方針へシフトし始めた部隊から距離を置き、はぐれ者の汚名をもあえて身に受ける。彼の覚悟は固い。
　そんなスワンギルディには、目下、修行の苛か烈れっさよりも五体を苛さいなむ悩みがあった。
　同僚から透けている通販荷物を受け取ったダメージで傷だらけになった身体からだを押し、廊下を歩いていると、本日何度目かの着信があった。
　ダークグラスパーからのメールである。

あまりにも数量が多すぎて、まとめて見ることにしている。適当に流し見はできないし、雲の上の位に位置する上司からのメールとあっては、着信拒否など以もっての外。

紛まごうことなき、パワーハラスメントである。

震ふるえる指でタッチパネルをスライドし、数時間分溜たまったメールを確認する。

件名：だっぴ～

「ぬうう、面めん妖ような!!」

件名からしてすでに、目が痛くなるほど絵文字で装飾された新着メール。

「読むほどに魂を削そぎ落とされるかのような苦痛……これこそ、ダークグラスパー様が与える試練なのだ……。これしきのことで弱音は吐けぬ!!」

本文：

スワンギルディちゃん

ダークグラスパーだよ

ダーちゃんでいいんだゾ♪

教えてあげるね☆

だっぴ～っていうのは、ダーちゃん語で、おはようって意味なのだ～

「ぐわああああああああああああああああ!!」

携帯電話の画面を見ただけで猛烈な勢いで吹き飛ばされ、壁に叩たたきつけられるスワンギルディ。

「ご、ごふうう……さ、さすがはダークグラスパー様……手心など一切加えられぬ……」
　すでにスケテイル・アマ・ゾーンの試練を背負っているというのに、この上通販サイトのスパムメールすら上回る頻度で送られてくる、殺傷力の高いメールにも耐えなければいけない。修羅の日々であった。
「スワンギルディ。あまり無理をするな」
　よろめく彼に肩を貸したのは、通りがかったスパロウギルディだった。
「スパロウギルディ様……。も、申し訳ありませぬ、一人、勝手な行動を」
　スパロウギルディは、優しく首を振った。
「これからまた会議だが……今の部隊の有様では、お前の修行が徒労に終わるということはなさそうだ……。安心して励むとよい。陰口を言う者もおらぬ」
「ありがとうございます、スパロウギルディ様」
　スワンギルディは知っていた。自分の勝手な単独行動を、陰で支えてくれているのが、スパロウギルディだということを。
　失われていく活力を取り戻し、スワンギルディは、意を決してダークグラスパーへの返信を打ち始めた。気力を振り絞り、日に一度は返さなければいけない。
　悪夢の連鎖を絶ち切ることはできず、スワンギルディの苦闘の日々は続く。

◇

　男の娘属性ガールズボーイの若き勇者の見事な散り様は、蛮族に怯おびえ

ていた戦士たちの心を揺さぶった。

　アルティメギル基地ホールではエレメリアンたちが集い、打倒テイルブルーに向け冷徹な作戦を練っている。

「作戦の要かなめはこうだ。まず、一個小隊が各自まな板を持って、テイルブルーの前に立ちはだかり……」

　だが、ダークグラスパーは怒りに煮え立ち、歯ぎしりに貧乏揺すりと、何とも余裕のない様を晒さらしている。会議の内容などろくに耳に入っていないようだった。

「……によってうねうねした後、隙すきを突く。それだけ周囲にまな板があれば、レッドとイエローは誰だれと連係を取ればいいのか混乱を…………ダークグラスパー様、聞いておられますか？」

「……気にせず続けよ」

　ダークグラスパーは、ちらちらと携帯電話の画面を見ている。

　ホッパーギルディと共に意見をまとめていたスパロウギルディが、我が身顧みぬ思い切った進言をした。

「恐れながらダークグラスパー様、ワームギルディたちの奮闘に心動かされ、打倒テイルブルーの気運が高まっている中、あなた様がそのように上の空では部下たちの士気に影響します」

「士気ならばわらわも落ちておるぞ……。アドレスを配ったはずなのに、とんとメールを寄越さぬ部下たちのせいでな……!!」

　魂さえも凍りつくような声に、士気がダダ下がる戦士たち。

　直属軍でありながら無論メールなど送ったことのないホッパーギルディが、わけを話す。

「我ら未熟者ゆえ、このような要事において、メールを作るほどの暇いとまを持てませぬ。どうかお許しを……！」

　おお、さすがだ、とその手慣れた言い訳に感嘆する戦士たち。

　すかさず、私もです、俺もです、と迎合を始めた。

「なるほど、そうか。では、会議の中断を許す。今すぐ、わらわに送れい。一丸となるというのならば、メールの送り合いもまた、必要なことじゃと考える。どうじゃ？」
　誰(だれ)一人として、携帯電話を取り出せず、硬直してしまっている。
「――よもや、わらわのアドレスが登録されてすらいないとは言うまいな？」
　ピシ、と乾いた音を立て、ホールの壁に亀裂が入った。
　殺される。終末の絶念に誰もが支配された、その時。
『眼鏡(めがね)じゃ、おっぱいは隠せないの―だから、私の心も隠せないんだよ』
　絶賛発売中の善(いい)沙(すな)闇(あん)子(こ)４ｔｈシングルのサビが鳴り響いて着信を告げ、ダークグラスパーの顔がやおら綻(ほころ)んだ。
「おお、あやつめ、ようやく返信してきおったか！」
　携帯電話を握り締め、子供のようにステップし、ダークグラスパーはホールを後にする。
　残されたエレメリアンたちは、九死に一生を得たことに安(あんど)し、思い思いに脱力した。

　自室に戻ると、変身も解かずに、ダークグラスパーは入り口の近くに置いてあった段ボール箱を開封した。
　がしょんがしょんと硬質な足音を響かせ、彼女の相棒、メガ・ネプチューン＝Ｍｋ．IIが部屋の奥から姿を現す。
「何や、その箱？　また何かいらんこと思いついたん？」
「いらんこととはなんじゃ、歴(れっき)とした作戦じゃ。若年層―子供のファンの獲得のためじゃ。わらわの完(かん)璧(ぺき)な美(び)貌(ぼう)がどうも子供たちには親近感を与えぬらしい。Ｃ１層に眼鏡属性(グラス)の拡散

が鈍いゆえ、テコ入れを図る」
「ツッコんだら泣きそうやから黙っとくけど……ほんで、何や、テコ入れて」
「お前も、裏方だけではなく、わらわと一緒に活動してもらう」
「ウチが⁉　いや、目立つやろ……認識攪乱装置イマジンチャフは、機械のウチには満足に作用せんかったんとちゃうん？」
　反論を封じるように、メガ・ネプチューンに箱の中身を渡す。
　ずっしりと重量のある、布製品のようだった。
「メガ・ネ、お前はこの着ぐるみを身にまとうのじゃ」
「……何やこれ」
　両腕を高く掲げ、布を広げる。
　だぼっとした、アホ面の魚の着ぐるみであることに気づいたメガ・ネプチューンは、人間には大きすぎるそのサイズを見て、硬質の表情に一抹の不安を覗のぞかせた。
「眼鏡めがねをかけた鮫さめ、メガネドンじゃ。今度、善いい沙すな闇あん子この公式マスコットキャラクターにしようと思っておる」
「売れへん、これは売れへん……大爆死を約束された悲劇のゆるキャラや……」
「フ、いよいよ感性までおかんと化したか。わらわの相棒バディたるもの、常にトレンドにはアンテナを張っておくがよい」
　最先端のセンスすぎて、太陽系を突き抜けてしまっている。
　あまりリアルに作ってエレメリアンと間違われることを避けたのかもしれないが、本当に、ただデフォルメ化されたアホ面の鮫が眼鏡をかけているだけなので、一つもフックのないゆるキャラだった。
　メガ・ネはしぶしぶ着ぐるみに足を通す。
「あら、ピッタリやわ」

「当然じゃ、お前に合うようにしつらえたのじゃからな。そもそも、キャラクターデザインからして、お前が着ぐるみを着ることを見越して完成させたのじゃ」

　目元を指で擦こするメガ・ネ。

　涙無き鋼鉄の身体からだなれど、その目には光るものが。

「ううっ……ほんまにおかんの心境やわ……ミミズがのたうったような絵でも、我が子が一生懸命に描かいた似顔絵やと心が温かくなるようなもんや……カスみたいなアホデザインでも、ウチのこと考えて作ってくれたんや思うと、何や胸がぽかぽかするわ……」

　感謝と拒絶の板挟みの中、着ぐるみに着替え終わるメガ・ネ。

　二メートルを超えるアホ面の眼鏡女子サメ。

　着ぐるみ補正をもってしても、駅を出てすぐ警察に囲まれ、職務質問されるのは回避困難な容よう貌ぼうだった。

「とにかく、今後、善沙闇子がバックアップを必要とする時は、常にこの格好でついてきてもらうぞ」

「わかった、わかったわ」

　渋々従い、ダークグラスパーの後に続いて部屋を出るメガネドン。

　いつもの硬質な足音は、だぼんだぼんという間抜けな音に変わり、アルティメギル基地の廊下に木霊こだました。

◇

　翌朝、俺の願いも虚むなしく、一晩寝ても男の身体には戻っていなかった。

　はっとして、頭を押さえる。髪を下ろしていた。

　そうだ、昨夜結んだまま寝ようとしたら、愛あい香かに止められた

んだった。

　しかし、きちんとケアするために入浴時に解ほどくのはまだわかるのだが、寝る時にまで解く必要は本当にあるんだろうか？

　一度、ツインテールについて詳しく記された医学書を探して読んでみるか……。

　テーブルの上に置いたリボンを手に取って、ツインテールを結ぶ。

「あれ、何か……上ぅ手まくいかないな」

　思ったよりも難しい。髪が長いので、上手くまとまらない。

　ヘアゴムにした方が簡単かと思ったが、この髪の長さではリボンで結んだ方が早いと思う、と、昨日愛香にアドバイスされていたのだ。

　悪戦苦闘してようやく結び終わり、俺は階下のリビングへと向かう。

　母さんと愛香、トゥアールが揃って俺を迎えた。

「……着替えもしないのに、ツインテールにはするのねあんた……」

「総そうちゃん、学校はどうするの？」

　母さんが期待するような視線を向けてくるが、それは絶対に無理だ。

「とりあえず病欠ってことにして、しばらく休むよ。悪いけど」

「いけませんわ！」

　慧ぇ理り那ながリビングへと入ってくる。

「慧理那まで来てたのか!?」

「何だよ観み束つか、ちゃんと私も含めろ！　私もいるだろ!!」

　最近、自己主張の激しい桜さくら川がわ先生が、慧理那の後ろから身

を乗り出してアピールしてきた。
「観束君。学校生活というのはその一日一日が尊く、かけがえのないものですわ。仮病で休むなんていけません。わたくしに任せてくださいな」
「仮病っていうかある意味重病を患わずらってんだけど俺!?」
　生徒会長の慧理那からすれば、確かに仮病で欠席など看過はできないだろう。
　しかしこれは、もはや仮病という領分でさえない。
　それでも、慧理那の正義感に満ちた目を見ると強くは言えず、一応話を聞くことにした。
「わたくし、こういうものを作ってきましたの」
　一枚の書類が手渡される。最近、紙を見る度に、婚こん姻いん届とどけではないかと身構えてしまう癖がついてしまった。
「……編入生……」
　空欄の氏名欄の上には、大きくそう記述されていた。
「外国の姉妹校からの体験編入生という名目で、何日か通えるよう手はずを整えましたわ。安心して学校に通ってください、観み束つか君。その間に、ゆっくり元に戻る方法を探しましょう」
「あ、ありが……と……」
　きらきらと眩まぶしい笑顔を前に、いやだ、とはとても言えない。
「そうすると、総そうちゃん自身はどういう扱いになるの？」
　母さんの質問に答えたのは、桜さくら川がわ先生だった。
「観束は、私のアイディアで、ツインテルエンザという病にかかって入院したということにしました。ご安心ください未み春はるさん、皆勤賞は守られます」
「ひとっつもご安心できねえぞ何だその世紀の奇病はあああああああああ!!」

自分の手柄を強調するようにふんぞり返る、桜川先生。

「その奇病、常に罹かかってんじゃないのそーじ……」

愛あい香かに失礼なことを言われる。

「ずっと家にいるよりも、外で刺激があった方が、改善に繋つながるかもしれませんよ、総そう二じ様。何かの兆候があれば、私が見み逃のがしませんので！」

うーん……。確かに、色々試すことは必要かな。座したまま事態が好転するとは思えない。

トゥアールの目が血走っていなければ、すんなりと信用できたんだが。

「……でもそれってつまり、俺が女のふりをして学校に通うってことだろ!?　ワームギルディとかがターゲットにしてた学生と同じだぞ、それじゃ!?」

「あんたは今、完かん璧ぺきに女子なんだから問題ないじゃない」

無む茶ちゃを言う。

俺がたじろいでいる間に、トゥアールが陽よう月げつの女生徒の制服を持ってリビングに戻ってきた。どんどん包囲網が狭まっていく。

「ありがとうねトゥアールちゃん、総ちゃんのスカートまで作ってもらっちゃって」

「総ちゃんのスカートとか言うなよ!!」

「うふふ～、さらに！　私も昨日ただ水責めされていたわけではありません、総二様のバストをサーチし、完璧なブラジャーも作り上げました!!」

……まあ、買い物に行くよりはマシだけど……やっぱり、つけなきゃ駄目なのかあ……。

トゥアールが手にしているブラジャーを、桜川先生がひょいと摘つまみ上げた。

「そうか、観束はブラジャーのつけ方を知らんのか。よし、私が教えてやろう」

　いきなり胸が膨らんだらすぐにブラジャーをつけ、サイズ基準も理解し、つけ方もバッチリ。何な故ぜ俺の周りの女の人は、男が皆、ここまでできて当たり前だと思っているのだろうか。

「何を出しゃばってるんですか年とし増ま！　総二様にはフレッシュな私がすりすりさわさわ教えるんです!!　あなたは対象年齢外ですよ!!」

「ああ、年増だ！　だが、だからこそ、生涯でブラジャーをつけ外しした回数はお前より遥はるかに上だ！　だから、私が教えるのだ!!」

　超理屈でトゥアールを押しのけ、桜さくら川がわ先生がソファーに俺を突き倒してのし掛かってくる。

「どうだ観み束つか、ブラジャーのつけ方をちゃんと教えられる女こそ、妻に相応ふさわしいと思わんか。男に戻った暁には、サインを頼むぞ」

　この人は一体どんな夫婦生活を思い描いて、日々求婚しているんだ!!

　あっという間に上を脱がされてしまった。

　桜川先生の手が予想外に優しく胸に触れたので、ビクリと身体からだが震ふるえる。

　俺は歯を食いしばって天井を見つめ、桜川先生がブラジャーをつけ終わるのをじっと耐えた。

　レクチャーどころじゃない。犬に嚙かまれたと思って忘れよう。

「ああんもう、華やかね、朝から女の子…………ばっかり!!」

「未み春はるさん、あの、今なぞの間があったように感じましたが」

　桜川先生の追及を回転ターンでかわし、母さんはついに上から下

まで制服に包まれた俺を見て、歓喜の声を上げた。
「母親を十五年もやっていると、息子のブラ透けを見る日も来るものなのね……」
　こんなことでそこまで感慨深い顔をされたら、この先の親孝行のハードルが衛星軌道まで上がってしまう。
「浮かれすぎだ！　俺はすごい悩んでるんだからな!!」
「えー、だって～、総そうちゃん、例の女幹部も見事落としちゃったんでしょお？　驀ばく進しん中じゃない！　父さんも草葉の陰で泣いて喜んでるわ!!」
　何を驀進しているというのか。
「その草、俺の炎で燃やしてやるよ」
「やだ今の台詞せりふ、若い頃の父さんそっくり!!」
「う　そ　だ　ろ」
　俺はもう……戻れないところまで来てしまっているのかもしれない……。
　朝の準備だけでこの有様だ。本当に、女のふりをして学園に通うなんてできるんだろうか。
「とにかく慧ぇ理り那な、学校でのことをよろしく頼む」
　なるべく目立たないように、学校生活をやり過ごさなければいけない。
「ええ、もちろん。任せてください！」
　さすが、皆まで言わずともわかってもらえたようだ。あとは、生徒会長としての慧理那の手腕を信じよう。

◇

　一時限目に、臨時の全校集会が催される。

俺は、慧理那と一緒に登壇していた。
「というわけで皆さん、編入生のソーラ・ミートゥカさんをよろしくお願いしますわ」
慧(え)理(り)那(な)あああああああああああああああああああああああああああ!!
よりにもよって、全校生徒の前で自己紹介なんてアドベンチャーを！
張り切る方向が違うだろうが、瞬時に浸透させてどうする!!
慧理那からマイクを手渡された。全校生徒の前に立つなんて初めてだから、緊張する。
「ソ……ソ……ソーラ・ミートゥカです。よろしくお願いしましゅ」
噛(か)んだ!!

水を打ったような静けさに包まれる。やっちまった……！　輪をかけて目立っちまった!!
視線が集中しているのを、肌で……いや、ツインテールで感じる。
またた……。
この感覚……俺のツインテールが、みんなに見られてる──!!
耐えられなくなり、俺は一礼だけして足早にステージを降りた。

瞬間。
窓が割れるのではないかというほど、体育館は大歓声に包まれた。
「な、な、な、何!?」
ひっ、と後(あと)退(ずさ)る俺の元へ、男子も女子も学年も関係なく殺到

してくる。
「可愛かわいい！」
「彼氏とかいますか!?」
「スリーサイズは!?」
「髪の毛チョー綺き麗れい!!」
「一緒におトイレ行かない!?」
　何でこうなるんだよ!!
　助けを求め、俺のクラスへと視線を彷徨さまよわせると、愛あい香かはぽかんとして立ち尽くしている。
「どうなってるんですかここの生徒どもは、何な故ぜ私が編入してきた時にこのリアクションがなかったんですか――――――――――っ!!」
「この甲か斐い性しょう無しども、私があれほど質問しろと言っても無言だったくせに!!」
　微かすかに聞こえるトゥアールと桜さくら川がわ先生の抗議も、歓声に掻かき消されていく。
　……まさか……。
　この学校の生徒は、大半がテイルレッドのファンだ。
　今の俺の姿に、テイルレッドの面影を見てしまっているのでは!?　まずいぞ。巡り巡って、テイルレッドとの関連性を疑われでもしたら……。

　壁際では、クラス担任の樽たる井い先生が、他の先生に何かを促されているのが見えた。
　のそのそとスタンドマイクの前に向かう樽井先生。
　そうか、自分の受け持つ生徒がこんな目に遭っているんだ、担任の一喝が必要だもんな！

『え～と、彼女と交換で、一年の観みつか束総そう二じ君は……え～と何だったっけ～、ツインテルエンザという病気の療養で外国に行きました～』
　あの担任適当に聞き流して、更新された情報と混ぜてんじゃねえかあああああああ!!
「聞いたか、観束の奴やつ」
「やっぱりな、そういう病気に罹かかっているんじゃないかと、前々から心配してたんだ」
「ようやく闘病開始か……むしろ、遅すぎたくらいだぜ」
「愛あい香か、毎日電話してあげなよ！」
　クラスの奴らのありがたすぎる言葉が漏もれ聞こえ、俺は俺という存在の在り方を真剣に悩む。
　世の無情さを呪のろいながら、遠慮なく身体からだを触ってくる女子に戦せん慄りつした。
　昨日まで普通に顔合わせてたクラスメイトだぞ、一期一会じゃねーんだぞ、元に戻った後どのツラ下げて顔合わせればいいんだ!!

　多少身体が成長しても、俺は、女の子にもみくちゃにされてしまうのか──。

◇

　エレメリアンの自室には、個性が反映されやすい。
　心から生まれた存在である彼らにとって、身近に何を置くか、何で飾るか──それらで心が満たされることは、言葉通りの活力に繋つながるからだ。
　美少女フィギュアで埋め尽くされた部屋。

カーペットの代わりに、無数のブルマが床に敷き詰められた部屋。

ダークグラスパーのように、エロゲーで囲まれた要ようの塞さいのような部屋もある。

だが、それらと比べ、〝彼〟の自室は、あまりにも異質であった。

何もない。

人の手の入っていない、新築の家を見るかのように、汚れもないが、調度品もほとんどない。

ところが、不思議と寂さびれた印象はない。むしろ、ピンと張り詰めた、独特の緊張感に満ちていた。

明らかに〝和〟の意匠を基調とした、板張りの広間。

部屋の一角は、畳敷きで区分けされている。

それは、自室というよりも、道場と呼べる神聖な装いであった。

その部屋の奥で、一体のエレメリアンが正座をしていた。

フォクスギルディ以上にシャープなラインを描く、細身の体たい躯く。

筋骨隆々の多いアルティメギルの戦士たちと並べば、女性と見み紛まがうほどの小柄さだ。

しかしその背からは、中心から曝あばいた肋ろっ骨こつのように、先端の鋭く尖とがった八本の脚が突き出ていた。一本一本が、彼の腕よりも太い。

何より……彼のまとう闘気、彼の存在感が、巨きょ躯くを誇る同胞たちをも圧倒する大きさで立ち昇っている。

座する目の前には、胸の高さほどの燭しょく台だい。その受け皿に載る蠟ろう燭そくには火が灯ともっている。

あまりにも張り詰めた静寂の中、もはや、蠟燭の火の揺らめく音

が一番大きく聞こえてきそうであった。
　その静寂は、一気に破られる。

「鋭ぇぃツッッ!!」

　裂れっ帛ぱくの気合いと共に、神速の斬ざん撃げきが疾はしる。
　剣けん閃せんが条じょうとなって、大気に残っている。その軌跡は、完全に蠟燭の真芯を捉えていた。
　名刀・男の娘の棒アマノムラクモ。魔性の輝きを刃やいばに携えた、彼の命である。
　眼前まで持ち上げた刀を、音もなくさやに収める。
　そこで彼はようやく、ふう、と一息をついた。
　神聖な武の空間。
　唯一の装飾品と言ってもいい、壁の掛け軸には、見事なまでの達筆で〝男おとこの娘こ〟としたためられている。

　武士道とは、男の娘と見つけたり──。

　男の娘属性ガールズボーイの求道者、アラクネギルディ。
　首領直轄部隊、美の四心ビー・テイフル・ハートの副官である。
　かつて謀反を企てた咎とがで処刑されたフェンリルギルディが嘆いていたように、仲間意識の篤あつい アルティメギルの戦士たちでも、認められぬ属性はいくつかある。
　一つは、最大目標であるツインテール属性と共存の難しい、他の髪型の属性。
　もう一つは、彼らの美学に照らしどうしても許せぬ、〝邪道〟との誹そしりを受けし属性である。

　彼の奉ずる男の娘属性ガールズボーイもまた、幾度と非議に晒さらされた、難しい属性だった。
　しかし、だからこそ、彼に尊崇の念を懐いだき、師事するエレメリアンは多い。
　今や彼は部隊の内外問わず多くの弟子を抱え、男の娘属性ガールズボーイの師範と呼ばれている。
　燭台を片付け終えたところで、部屋に十体ほどのエレメリアンが入ってきた。
「失礼いたします！」
　彼の部屋は、自室であると同時に、広く門戸を開けた道場でもあるのだ。
　一通りの礼の所作を終えると、弟子たちは様になった正座で乱れなく整列する。
「よし、では、昨日の続きからでござる」
　弟子たちは、持参した化粧箱から道具を取り出し、正座のまま師範の指示を待つ。
「一！」
　アラクネギルディの掛け声が、道場の静せい謐ひつを破る。
　弟子たちは、剣で素振りをするように、手に持ったパフで右頰ほおを叩はたいた。
「二!!」
　今度は、左頰。いかつい怪物たちが、幼女がドレッサーに腰掛けてママの化粧道具をこっそり使ってみるように化粧をする光景は、見ただけで鼓動を停とめかねない魔界そのものだった。
　属性力エレメーラとは、形から。アラクネギルディは、新たな修練方法を提唱している。
　男の娘属性ガールズボーイを持つのならば、エレメリアンにも化粧は必

要だ。
　彼の突飛な意見に異を唱える者がいないのは、アラクネギルディ自身が、一兵卒からのし上がった幹部だからである。
　実力で逆風を撥はね除のけた小さな豪傑に、師事する弟子たちは希望を託していた。

　稽けい古こも終わり、再び道場に静けさが戻った頃、顔を青くしたダークグラスパーが入ってきた。
「これはこれは、お見苦しい稽古を」
「ほんとじゃぞ。あ、すまん、口が滑った。嘘うそじゃ」
　あれを見ても泡を吹いて倒れないことに、彼女の実力のほどが窺うかがえる。
「して、ダークグラスパー殿。何用にござるか？」
　アラクネギルディは、座布団を用意し、上官をもてなす。
「その様子ではやはりまだ、知らぬか。……ワームギルディのことは覚えておるな？」
「もちろん、片時も忘れた時はないでござる。あやつは誰だれよりも潜在能力を秘めておりましたゆえ、拙者の元で腐らせるよりも、独自の道を歩ませようと考えたのでござるよ」
　我がことのように嬉うれしそうに語るアラクネギルディ。
「あやつめとうとう、何か手柄でも立てましたかな？」
　しかし、ダークグラスパーの沈黙を前に、次第にその表情が曇っていく。
「あやつは見事、男の娘属性ガールズボーイに殉じおった」
　思わず立ち上がったアラクネギルディは、言葉を失い、膝ひざから崩れ落ちた。
「ワームギルディが……！」

「親の心子知らずと言うが──あやつは、落ちこぼれの自分が貴様に見捨てられたものと思っておったようじゃ。しかし、スネイルギルディの助けもあり、奮起したのじゃ」

　悲しきすれ違いだった。

「手柄なくとも、立派な最さい期ごであったぞ。他の連中が怖おじ気けに巻かれた凶戦士を前に、一歩も退かずに立ち向かったからのう。テイルブルーの奴やつめ恐怖に胸が縮んで、真っ平らにしか見えぬほどであった」

　散った者の手柄を伝え残すのは意義あることだが、無念ながらテイルブルーの胸がそう見えたことだけは、彼の奮戦がもたらした誉れとして語り継ぐことはできないだろう。

「スネイルギルディまでもが……！　な、何ということでござるか……!!」

　アラクネギルディは言葉を詰まらせた。

「才を腐らせたくなかったと先ほど申したが、真意か？　わらわはお前の指導者としての実力を買っておる。むしろ喜んで、自分の元でその花を咲かせようとすると思うのじゃがの」

　血涙を双そう眸ぼうに湛たたえ、アラクネギルディは面おもてをあげた。

「ならば白状いたす！　拙者、ワームギルディに……己が弟子に、あろうことか懸け想そうをしてしまい候そうろう!!」

「……やはりそういう…………ん？」

　聞き違いと思うのも無理はない。ダークグラスパーは、今し方聞こえた世迷い言を、何度も心の中で反はん芻すうしているようだった。

「確かに最初は、出来の悪い弟子と思っていたのも事実……。しかし、そのひたむきさと純真さに気づいた時、拙者は武士の本分を忘れ申した!!」

「おい、ちょっと」

「やがてその思いの正体を知るのに、そう時間はいらなかったでござる……。若葉のように瑞(みず)々(みず)しいワームギルディの男の娘属性(ガールズボーイ)に、拙者は……拙者は……！」
「いや、あのじゃな」
「しかし、所詮は許されざる思い！　断腸の思いで突き放したのでござる。それが、それがまさか、こんな結末に……」
　さんざん告白した後、糸の切れた人形のように崩れ落ち、悔恨に身を震(ふる)わせるアラクネギルディ。最高司令官の器を以(も)ってしても受け止めきれぬ懺(ざん)悔(げ)に、ダークグラスパーは軽く白目を剝(む)いた。
「確かに許されぬ思いじゃ、その絵面、想像するだに誰(だれ)も得をせぬ……!!」
　そっと寄り添うアラクネギルディとワームギルディ。
　背景には花々が咲き誇り、鳥たちが愛を詩(うた)う。
　アラクネギルディの雄々しき八本脚が、ワームギルディの背中に回され──
「……………………いや、割りとアリじゃな……」
　上官の感性がいよいよ人類を超越せんとしていたまさにその時、アラクネギルディは慟(どう)哭(こく)を振り払い、彼女の前に片(かた)膝(ひざ)をついた。
「……全ては、拙者の責。ダークグラスパー殿。拙者に、仇(あだ)討(う)ちの機会を!!」
「ならぬ。人(ひと)伝(づて)にこのことを聞いたらお前がそう言い出しかねないと危(き)惧(ぐ)したからこそ、あえてわらわが伝えに来たのじゃ。よいな、早まるでないぞ。多くの弟子がおるじゃろう」
　それだけ言い残し、ダークグラスパーは部屋を去った。
　この世界はもはや、一般兵が強くなくとも作戦に支障のない段階

を超えてしまった。有能な指導者の存在は、何にも代えがたい━━無駄死にはさせられない、という判断だった。
「ううううっ……!!」

（わあ、すごく立派ですね、触ってみてもいいですかっ？）
（ふふ、構わぬぞ）
　アラクネギルディが取り出いだしたる男の娘の棒を、好奇心からおそるおそる触ってみるワームギルディ。

　己が愛刀が大惨事を引き起こしている気がするが、忘れがたい、美しき思い出だ。
　愛いとしき弟子の笑顔を思い出し、アラクネギルディの頬ほおを、一筋の涙が伝った。

◇

　元々、ノリのいい生徒ばかりなのはわかっていたんだ。それに救われたこともある。
　しかし、ソーラを迎えた陽よう月げつの生徒の熱狂ぶりは、度を超えていた。
　学期末でテスト以外に特に行事もなく、刺激の少ない期間だから、それはもう、水を得た魚のようになっている。
　授業が始まっているというのに、クラスの男子たちは捻ねじり鉢巻きにふんどし一丁で御み輿こしを担ぎ、廊下を練り歩く。女子たちはその前後で、妙な踊りを踊っている。
　俺はというと、思考を全て放棄し、御輿の上に据えられていた。
「どうですソーラさん、これが日本の伝統芸能、ＭＩＫＯＳＨＩで

す!!」

　それに乗せられている俺には、お前らのＦＵＮＤＯＳＨＩしか目に映らねーよ……。

　こんなところテレビ局に撮影でもされたら、学級崩壊として取(と)り沙(ざ)汰(た)されるか、地元の新たな祭りとして特集を組まれるかのどちらかだ。

　何度か臨時の全校集会が開かれたりして授業が幾度も潰れてはいるが、カリキュラムが全く遅れてはいないので、何だかんだ言ってもここの教師は優秀なのだろう。

　その手腕を以(もっ)てして、この狂乱を止めてほしい。

「総(そう)二(じ)さ……ソーラさん、しっかりスカートを手で押さえていますね。ちゃんと女の子していて、何か敗北感です」

「敗北感以外に、感じるものがあるでしょ……」

「性感ですか!?　それはもう、ずっと!!」

「それじゃないわよ!!」

　踊りには交ざらないものの、愛(あい)香(か)とトゥアール、慧(え)理(り)那(な)は一応御(み)輿(こし)の前をＳＰよろしくガードしながら歩いている。何か相談しているようだが、彼らを止める算段でもつけてくれているのだろうか。

　後ろから不協和音が響くと思って振り返ってみると、鼓笛部と吹奏楽部が、覇(は)を競い合うように演奏をしていた。

　チアリーディング部に創作ダンス部が本場の踊りを見せようと列に加わり、華道部は生けた花を手に和服で登場。熱気が増していく。

「ゴール前！　ゴール前!!」

　鋭いドリブルで人波を掻(か)き分け、ユニフォームに身を包んだサッカー部員たちが乱入したのを皮切りに、運動部も続々と参戦。

もはや廊下は、ラッシュ時の満員電車もかくやの人口密度と化していた。お前たちのゴールはどこにあるんだよ。

「対抗意識燃やしてとりあえずで次々交ざってきてんじゃないわよ!!」

　ありがとう愛香、俺の代わりにツッコんでくれて……。

　こういう時にはしっかりと生徒を注意できるカリスマを持っている慧理那だが、流されるがまま、覇気がない。

　どうも今になってやっと、全校生徒の前で大々的に紹介したのが間違いだったと気づいたようだ。責任を感じているのか、項(うな)垂(だ)れたまま歩いている。

　そんな慧理那に、一人の男子生徒が近づいて紙を手渡した。

「会長！　この機会に是(ぜ)非(ひ)ご承認いただきたい部があります!!」

「部活ですの？　ええ、構いませんけど……」

　男子生徒が手渡した紙を検分する慧理那。程なく、きりっとした生徒の長(おさ)の表情になるのは、さすがだ。

　しかしその細い眉(まゆ)が、次第に困惑で歪(ゆが)む。

「ファン、クラブ……とありますが……」

「はい！　ソーラちゃんファンクラ部です！　みんなもどうですか!?　兼部歓迎です!!」

　歓声が起こる。この熱気だ、賛同を得られないはずがない。

　一見、部活動っぽい字(じ)面(づら)をしてるけど、結局ただのファンクラブじゃねーか……。倶楽部って書けよ往生際が悪い!!

「あの、いくら何でも学園内でファンクラブの活動は……」

　慧理那が対応に苦慮している。代表の男子は勢いづいて続けた。

「ツインテール部っていう部活もあると聞きましたよ！　ツインテイルズのファンクラブみたいなものじゃないんですか!?」

「違ぇよ！　……ぇ……ぉ……あ、ツインテールだ!!」

　思わずいつもの調子でツッコんでしまい、俺は咄嗟(とっさ)に自分のツインテールを摘(つま)んで持ち上げた。

　人の注意を逸(そ)らす時、「あ、ＵＦＯだ！」と言うのは鉄板だ。俺ならば、ＵＦＯよりもツインテールだろう。

　生徒たちは皆、意図を摑(つか)めず戸惑っている。何とか事なきを得たか……。

　俺にしては、機転が利いた方だろう。成長しているな。

「ほら、ソーラさんも慣れない場所で緊張しているようですし、周りがしっかりサポートしなければ‼」

　くそう、何かこいつも結構機転の利くやつだ。

　だが、今の俺のこの状況をサポートなどという上等な呼称をするなら、消費生活センターへの苦情を許してほしい。

　俺が文句を言いかけた時、生徒の波を掻(か)き分け、桜川(さくらがわ)先生がこちらへと向かってきた。

「そろそろ解散しろ。理事長もある程度はお許しになられていたが、ちとはしゃぎすぎだぞ。生徒としての規律を守るんだ」

　学舎(まなびや)でメイド服着用という、教師としての最低限の規律を火星までブン投げた大人が、真顔で生徒を律する。

「あ、桜川先生！　実は、ソーラちゃんをみんなで支えようという、とっても崇高な目的の部活動を立ち上げたのですが、先生もいかがですか⁉」

　しかし怖い物知らずなのかテンションが上がっているのか、代表男子はこともあろうに桜川先生に入会届を差し出した。

　――――まずい。

　愛香(あいか)に危機感がないと散々釘(くぎ)を刺されている俺ですら、察知し自力で回避できるクライシスに、あの男子はクラウチングスタートでダッシュし突っ込もうとしている。

「いいだろう」
「え、いいんですか？」
　いともあっさりその場で判子を押す桜川先生に、代表の男子はご満悦だ。
「恩には恩で、判には判で返すのが日本人の美徳だ。私は君のファンクラブの入会書に判を押した。……後はわかるな？」
　エプロンのポケットから、婚こん姻いん届とどけを出す桜川先生。
　束で売ってるＡ４コピー用紙ぐらい枚数がありそうな気がするが……どうやってポケットに入れていたのだろうか。
「そして、部員諸君も連帯責任だ。先ほど歓声を上げていたものは全員、入部の意志があると見ていいな？　全員記憶しているぞ……」
　高々と持ち上げた右手から腰の高さの左手へ、マジシャンの曲芸技フラリッシュさながらに婚こん姻いん届とどけを捌さばいていく桜さくら川がわ先生。大きさも重さもカードより不安定でありながら、身体からだの一部のように自在に操っている。
　それは、どれだけシャッフルしたところで、ジョーカーしか出てこない悪魔のトランプだ。
　顔面蒼そう白はくになり、後ろに見えるよう腕を振り上げる代表男子。
「逃げろ、みんなー!!」
「ふふ、十秒だけ猶予をやろう、全力で逃げるがいい！　逃がさんがな！　婚姻という制度の重さを知れ!!」
　生徒の暴走を止めるべき教師の暴言で、和なごやかだった日本の祭りは突如としてスペインの牛追い祭りへと姿を変える。俺を乗せた御み輿こしは爆走してついに玄関を抜け、グラウンドへと繰り出した。

　俺は、仰ぎ見る空の青さに、眼めを細める。

　この噎むせ返るような夏の暑ささえ、校舎の中の熱気に比べれば霞かすむだろう。

　体育祭も文化祭も、まだ先だよな。何な故ぜ今、陽よう月げつ学園の生徒たちは一体となって、青春の汗を煌きらめかせているのだろう。

　青空に零こぼれ舞う汗の雫しずくをよそに、俺だけは涙の雫を煌めかせた。

キャラクター名鑑
015

ソーラ

SOLAR



DATA

性別：女（中身は男）

年齢：15歳

誕生日：2月2日

身長：146㎝

体重：45㎏

変身を解いても男に戻れず、女のままとなった総二の姿。テイルレッドの時と同様、無尽蔵に人を惹きつける魅力は健在で、学園をパニックに陥れる。女の子の身体で生活する総二の興味は自前のツインテールにばかり集中してしまい、トゥアールたちが期待したように女体への興味にはあまり繋がっていない。意外と胸が大きく、愛香の嫉妬の対象となっている。割りと感度がいい。

第三章　まなツインテール。

神しん堂どう家の屋敷は、途方もない敷地面積を誇る。

大型のショッピングモールが駐車場ごと、それも数店舗分入ってもまだ余裕があるといえば、だいたいの人に規模は伝わるが、同時に真偽も問われる。それほど常識離れした邸宅だ。

室内プールやテニスコート、ヘリポートなど、庶民が豪邸に想像する設備は、当然のように完備。

邸内も至る所が高価な装飾品に彩られ、職業メイドが何十人も従事する。

そんな〝期待を裏切らない〟大豪邸の中で、ただ一室だけ、異彩を放つ部屋があった。

神堂家の跡取り娘──慧え理り那なの自室である。

三〇メートル四方はあろうかという巨大な一室は、しかし、その壁のうち二面が、床から天井まで余さず物が置かれた棚で埋まっている。

それらは全て、特撮玩がん具ぐだった。

番組連動の子供向け商品から、高めの年齢層を狙ねらったコレクターアイテムまで。最新作はもちろん、古くは昭和に遡さかのぼる。

ここまで来ると、もはや彼女の部屋自体が特撮番組のアーカイブを担っているようですらあった。

特に、変身アイテムが年代別に整列している所が、彼女のこだわりを感じさせる。

決して、年頃の女の子に似つかわしいインテリアとは言いがたい。

しかし、陽よう月げつ学園高等部生徒会長として、多くの生徒の模範

たらんと肩肘ひじを張って過ごす慧理那が、その重責から解放され、ありのままの自分でくつろげる場所でもあるのだ。
　そんな慧理那の自室の中心で、慧理那と、もう一人の女性が、テーブルを挟んで向かい合い、座っていた。
　神堂慧ぇ夢む。
　陽月学園の理事長であり、慧理那の実母。そして、類たぐい希まれなるツインテールを持つ、厳格な女性である。
　張り詰めた静寂しじまが、部屋を満たす。
　一言も発さず目を閉じ座る母を前に、慧理那は、ずっと俯うつむいたままだ。
　ちなみに二人がテーブルを挟んで座っているソファーの上に置かれたクッションは、昨年放映されていた変身ヒーローの武器を模したもので、関連商品のバーコードをはがきに貼はって送ると抽選でもらえる、貴重な非売品である。
　どんなに欲しいものでも決して神しん堂どうの名を使わず、一般のルール通りに収集する。それが慧ぇ理り那なのポリシーだった。
「あの……」
　二人だけで話がしたい、と母を部屋に招きながらも、慧理那はこうして言い淀むだけで、なかなか話を切り出せずにいた。
　その心中を察したのか、慧ぇ夢むは努めて優しく語りかける。
「婿むこ殿のご容態はどうなのです？」
「あ、はい。もうすぐ退院できると思いますわ」
「ふむ。それはいつごろに？」
「ええと……もうすぐ……ですわ」
　見透かされているのを悟る慧理那。
　自分の母が、婿候補の総そう二じの入退院の情報を摑つかめないはずなどない。

　約束通り、今慧理那が打ち込んでいる「何か」を信じて、深く追及しないでいてくれているのだろう。
　そして、再び沈黙が続き、慧夢は焦じれたように言った。
「慧理那、母はお父様と違ってそういうことには理解があるつもりですよ。遠慮せずに相談なさい」
「や、やっぱり、相談ごとだとわかりますか……？」
「わたくしも、慧理那と同じ年の折、いつも悩んでいましたもの」
　完かん璧ぺきに見える母でさえそんな時期があったことに、親近感を覚えたのだろう。
　慧理那の表情は和らいだ。
「こうして母娘二人─娘から相談を受けるというのは、母親冥みょう利りに尽きるものですわね」
「お、お母様……」
　おほん、と上品に咳せき払いをし、慧夢は居住まいを正して言った。

「まずは、回数をこなすことですわ」

「───回数？」
「婿殿も貴女あなたも、初心者同士。最初は上う手まくゆかないのは当然のこと。むしろ、婿殿に手練がないことを喜ぶべきですわ。貴女色に染めるも、貴女が婿殿の色に染まるも、自在なのですから」
　慧理那は目を点にし、頭の周辺にハテナマークを浮かべている。
「婿殿は、体力はありそうに見えましたが、どうなのです？」
「え、体力……は、あると思いますわ。たしか、武道を嗜たしなんでいたそうですので」
　ふむふむ、と、着物の袖そでで口くち許もとを隠し、心なしか嬉うれしそ

うに頷うなずく慧え夢む。

「肉体からだはしっかりと出来上がっているのですわね。頼もしいですわ。ならば慧え理り那な、遠慮はいりません。いえ、遠慮こそが今もっとも乗り越えるべき障害。どちらが気遣うことなく、精根尽き果てるまで求め合えばよいのですわ。そこでようやく、一つ壁を乗り越えることができるでしょう」

「……求め……」

慧夢の重厚な言葉に気け圧おされつつも、言葉の意味を読み解こうとする慧理那。

「慧理那さえよければ、母が一緒に指南するのもやぶさかではありません。もちろん、母は範と割り切りますので、気遣いは無用。貴女あなたはしっかりと横で最後まで見て……」

「！」

そこで、ようやく母との齟そ齬ごに気づく慧理那。顔を真っ赤にし、両手をぶんぶんと振って否定する。

「ちょ、ちょっと待ってくださいまし！　お母様、何か勘違いをされてますわ！　回数って、もしかして……!!」

「勘違い？　母はてっきり、婿むこ殿が貴女との夜の生活で精根尽き果て、学園を休んでいるものとばかり……！　それで、奇病などと言わなければいたたまれないのだと！」

可愛かわいく頭を振り、ツインテールを振り乱す慧理那。

「違いますわっ……そ、そんなことは、まだ一度も……！　していませんわっ!!」

「何と、一度も!?」

着物の裾すそが翻ひるがえるほどに勢いよく立ち上がり、再び厳格な母の顔に戻る慧夢。

「情けない！　慧理那、貴女は婿殿よりも年上なのですよ！　床へ

誘いざなうのは貴女の役目！　殿方に恥をかかせてはなりません!!」
「そ、そんなあ……」
　いつの間にか総そう二じを婿殿と呼んでいることといい、慧夢の中ではどんどんと将来設計が進められているようだった。
　当の本人は、矢継ぎ早に繰り出される赤面ワードに、ただただ狼狽うろたえることしかできない。
「わ、わたくしまだ、そういうことは怖いですし……そもそも、観み束つか君がまず、年頃の男の子と違って、あまりそういうことに興味がなさそうで……」
　心こころ許もとない反論だが、そこに拒絶の意志は含まれていない。
　慧夢は、何かを納得したように、こくりと頷いた。
「ふうむ。ツインテールを極めすぎて、女体への探求心が薄れていると。しかし、そんな性に淡泊な殿方を自らに溺れさせることこそ、女の醍だい醐ご味み！　やがて攻守逆転……もとい、溺れ溺れさせと、理想的な関係を築くことができるのですわ」
　花を周囲に散らすような優雅な歩みで慧理那に近づき、肩が触れる距離で隣に腰を下ろす慧え夢む。
「……貴女あなたが嫌いやがっていれば、こんなことは言いませんわ。しかし、婿むこ殿を見つめる貴女の瞳が情欲に濡ぬれているのを、見過ごす母ではありません」
「ひぅ……っ」
　茹ゆでだこのようになった娘を、愛いとおしげに見つめる慧夢。
　着物の袖そでから、煌きらめく櫛くしを取り出す。
　母猫が子猫の毛繕いをするような優しさで、慧え理り那なのツインテールを梳すき始めた。
「そういえば、以前理事長室で見かけたあの妾めかけの少女、なかなかに豊満な肉体の持ち主。ツインテールにしていないのが幸いです

が、あの娘がもしツインテールにしたならば、相当手て強ごわいのは間違いないでしょう。それでなくとも、積極的なようですが？　彼女に遅れは取っていませんね、慧理那？」

「……それは……」

　慧理那も、トゥアールが二度とツインテールにできないことは知っている。しかし、その理由と決意を聞いている以上、いかなる話題にも繫つなげることは憚はばかられた。

「……そ、相談とは、実はそのことなのですわ……」

「ほう？」

「津つ辺べさんも、トゥアールさんも、観み束つか君の家のすぐ近くに住んでいるのです。特に津辺さんは、彼の幼おさな馴染なじみで、言葉なくとも心が通じ合っているようで……。それに比べればわたくしは、どうしても距離を感じてしまうのですわ」

「それで、慧理那。貴女は何か自分からアプローチをしたのですか？」

「一緒に学校に行こうと、朝、観束君の家に行きました」

　慧夢は櫛を仕舞うと、優しく、力強く慧理那の肩を摑つかんだ。

「先ほども言いましたが、慧理那。貴女は年上として、もっと婿殿を強引に導かなければなりませんわ」

　今度は、はい、としっかり頷うなずく慧理那。

「子供の頃行った島を覚えていますか？　我が家の所有している砂浜ビーチならば、余計な横よこ槍やりも入らず、婿殿にたっぷりと女をアピールできますわ。慧理那、海へ行きなさい」

「そんな、海なんて……わたくし、こんな子供っぽい体つきでは……」

　くわっと表情を引き締め、娘の弱音を斬きって捨てる慧夢。

「いずれはその水着さえ脱ぎ去り、裸一貫で他の妾たちと戦わねば

ならないのですよ！　そんな弱気でどうします!!」

　慧夢は、再び袖に手を差し入れ、中から一本の巻物を取り出した。

「慧理那、貴女に神しん堂どう家に代々伝わる奥義の一つを授けましょう。これを海で婿殿に披露するのです」

「奥義!?　何かかっこいいですわっ!!」

　巻物を広げ、慧ぇ理り那なに見せつける。

　墨絵で描かれた年代物の図画だが、ところどころにツインテールの女性が描写されている。

　その女性は、ダンスを踊っているように様々なポーズで描き連ねられていた。

「ツインテールを用いた演舞です。これを見た男性は、たちどころに滾たぎりますわ。仕事で疲れてくたくたになったお父様を、強制的に活性化させる時に重宝したものです」

「ええと、とにかく、観み束つか君にアピールできるのですわね？」

　立ち上がった慧ぇ夢むは、早くも華麗なる舞いを披露し始めた。

「必ずかかります。ツインテール好きの男性ならば、目を逸そらそうとしても逸らせぬはず。いいですか慧理那、母の動きについてきなさい!!」

「は、はい!!」

　立ち上がり、ぎこちないながらも慧夢の動きを真ま似ねていく慧理那。

　緩急自在に、ツインテールが舞い、揺らめき、踊る。

　総そう二じほどツインテール好きでなくとも、目を奪われ、心を奪われるであろう。

　……言ってしまえば、糸で吊つるした五円玉の代わりに、ツインテールを使った洗脳催眠だった。

「体幹を揺るがせてはなりません。ツインテールのみで、宙空に極美を描くのです!!」
「はいっ!!」

　母娘の秘密の特訓は、それからしばらくにわたって続いたのだった。

◇

　女の身体になって二日目の朝。
　もう、一晩寝て起きれば自然と元に戻っているという、淡い期待は捨てた。
　あとは、トゥアールの分析を待つか、俺自身で、男に戻る方法を突き止めるかだ。
「よっ……と……」
　できるだけ自分の身体を見ないように、感覚だけを頼りに着替えをしていく。
　もうすっかり、ブラジャーのつけ方も覚えてしまった。
　こんなこと、男に戻ったら何の役にも立たないのに……。
　トゥアールが基地に置いていた姿見は、そのまま借りて自分の部屋に持ってきていた。
　制服を着込んで準備を万端にしてから、鏡に映った自分の姿を見る。
　女の姿であること━その違和感よりも、ツインテールではないという、焦燥感にも似た不安が胸をちくりと刺す。
　違う……。これは、喪失感だ。
　半身を失ったような。思い出が消え去ったような……。

「よし」
　俺は呼吸を整え、リボンを手に取った。
　神経を研ぎ澄まし、昨日愛あい香かに手伝ってもらってようやく完成したツインテールに、今日こそと自分の力のみで挑む。あえて先に身支度を調ととのえたのは、限界まで集中するためだ。
　思いつく限りの最良の動作で、疾とく髪を結んでゆく。

　────遅い……。

　完成したには、した。
　しかし、所要時間は片方で二分。素人もいいところだ。
　俺は、微妙に小さくなってしまった手の平、細くなってしまった指を見つめながら、無力さに打ちひしがれた。ツインテールを結ぶのに、これほど時間がかかってしまうとは。
　ここまで時間をかけてもなお、微妙に左右で高さがずれている。大きさも合っていない。
　ツインテールは、左右のバランスが要かなめだというのに。
「くっ、これじゃあ……駄目だ」
　愛香はもっと、なめらかに、踊るようにツインテールを結んでいた。
　両房合わせて、かかった時間はほんの八秒ほどだったはずだ。
　しかも、無造作に結んでいるわけではない。あの長髪で、釣り合った天てん秤びんのように調和の取れたツインテールを作り上げるのに要する時間としては、脱帽すべき速さだ。
　ましてや愛香は、鏡すら見ていない。朝に目を覚まして、まず伸びをするような当然さで、ツインテールを作り上げる。あらためて、その凄すごさを肌で感じた。

俺も、あの高みへと昇りたい。だが、まだ絶対的に経験が足りない。

これればかりは、身体からだで覚え込むしかないな。

俺は部屋のラックから白紙を一枚抜き出し、机の上に置く。

そしてわかりやすく大文字で、今後のスケジュールを記入した。

トゥアルフォンのスケジューラではなく、直じかに紙に書いて、そして壁に貼はる。心構えの問題だ。

「こんなところか」

まずは、朝昼夜で合計三〇回──ツインテールを結ぶ練習だ。

慣れたら、少しずつ増やしていこう。

最初から回数を多くし過ぎれば、必ずどこかで雑になってしまう。

練度が大切だ。

一回一回を丁寧に、脳と手の平に染み込ませるように、動作を反復するんだ。

まずは形を。そして、速さを。その両方を磨かなければ。

「──ん？」

何かが引っかかる。

いや、何もおかしくないはずだ。ツインテールになったのだから、ツインテールを結ぶ練習をするのは当たり前だ。……そうだよな。

「おはようございまぁす」

ビクリとして、後ろを振り向く。

部屋の入り口が音もなく開かれ、ネグリジェ姿のトゥアールが立っていた。

「おはよう、トゥアール」

　トゥアールは薄く笑い、後ろ手にドアの鍵かぎを閉めた。
　思わず後あと退ずさってしまった俺を追うように、トゥアールは、前屈かがみになって覗のぞき込んできた。
　うう、谷間が強調されて……というか、ネグリジェ自体が薄くてほとんど透け──
「ふふ、総そう二じ様。ツインテールを結ぶ時間に悩まれているようですが」
「わかるか。実は、そうなんだ」
「私はもう、ツインテールを結ぶ指南はできませんが……お手伝いはできるかもしれません」
　トゥアールは、胸の谷間から何かを取り出し、俺の手に握らせた。
　ほのかに人肌で温ぬくもったそれは、金属でもなく、プラスチックでもなく……テイルギアに近いような、不思議な感触だった。
「よろしければ、どうぞ」
「これ、髪留めバレッタか……？」
　菱ひし形がたのアクセサリーだ。
　薄く優しい光沢の銀色で、自己主張の強くない程度に柄がらが彫られている。
「はい。これをこうして……」
　トゥアールに指を添えられ、左右に引っ張るように力を加える。
　バレッタは二つに割れ、三角になった。
「私が以前使っていたものです。ツインテールにしなくなってからは、お守りのように持ち歩いていました」
「受け取れないよ、そんな大事なもの……」
　その人の持つ属性力エレメーラが消えれば、属性力エレメーラがある時に撮った写真や録画映像なども、変わってしまうと聞いた。トゥアー

ルがツインテールだったことを証明するのは、このように「ツインテールでなくなっても形として残るもの」だけだ。

　トゥアールにとっては、手元に残る数少ない思い出の品のはずだ。

「どうせ、捨てることもできず取っておいていたものですから。むしろ総二様に使ってもらえるなら、私は嬉うれしいです」

　迷った末……俺は、受け取った。

「わかった。ありがとうトゥアール、使わせてもらうよ」

　俺はリボンを外し、バレッタでツインテールを結び直した。

　なるほど……普通のバレッタと違って、ツインテールを留とめやすい作りになっている。

　留め金も髪の量に合わせて調節もできるようだし、髪を巻き込まないよう工夫されていたり、細かい部分にこだわりが見える。

　……トゥアールのツインテールへの愛が、全身に染み渡るような気がした。

「トゥアールとこうやって二人きりで話すのって、珍しいよな。いつもは愛あい香かが──」

　ちょっと待て……そうだよ。トゥアールが、一人で俺の部屋にいる!?

　見過ごしてしまいそうなほど何気ないことだが、よく考えれば物もの凄すごく珍しい出来事だ。

　一応同居しているのだから、本来当たり前のはずだが、トゥアールは、必ず愛香と一緒だった記憶がある。

　夜中に全身タイツで来たこともあったが、最後にはやっぱり愛香が突っ込んできた。

「愛香さんなら、ぐっすりとおねむです。当分目を覚まさないでしょう」

「な、何でトゥアールが知ってるんだ？」
「時限式で噴霧する超強力催眠ガスの装置――アンチアイカシステム四号、アイカネムラセールを愛香さんの学生(かばん)に仕込んでおきました。一〇分前の起動をリモートで確認していますので、上手(うま)くいったようです」
　時限式か……。眠っている間に起動するなら、愛香も異変を察知できなかったのだろう。
　ところで、何でそんな物騒な攻防を毎日のように繰り広げているんだろう、二人は。
「あ、あのさ……喧(けん)嘩(か)するほど仲がいいのはわかるが、だんだん引っ込みがつかなくなってきてないか？」
「女の子の友情って、こういうものなんです♪」
　……強いんだな、女の子って……。程度の差はあるだろうが、みんなこうして仲を深めているのか。

　気づけば、ベッドにトゥアールと二人、肩を並べて座っていた。
「すごく似合っていますね」
　少し寂しそうだけど、トゥアールはバレッタをつけた俺を見て、喜んでくれているようだ。
「……ごめんなさい、総(そう)二(じ)様……少しだけ……」
　トゥアールは俺のツインテールを掬(すく)い取ると、自分の頰(ほお)にそっと寄せた。
　俺は、小さく「うん」とだけ答える。
　俺のツインテールを通して、在りし日のツインテールの思い出に浸ってくれればいいな……。
「――はっ……もしかしたらっ……!!」
　突然トゥアールが大声を上げ、まどろんでいた意識が引き戻され

た。
「総そう二じ様、わかったかもしれません、総二様が元の身体からだに戻れない理由が!!」
「何だって!?」
　今のこのやりとりの中に!?　俺は何も気がつかなかったが……さすがトゥアールだ。
「今すぐ服を脱いでください、全部です！」
「ああ！」
　俺は言われるまま、さっき着たばかりの制服に手をかけた。
「私も今すぐ服を脱ぎます、全部です！」
「ああ！」
　トゥアールもぽいっとネグリジェを投げ捨てる。
　出来る限り、見ないようにしないと……。
　とにかく俺は、原因がわかったという昂こう揚ようで、他のことは考えられなくなっていた。
「そ、それでは、目を瞑つぶってください……」
　下着姿になったところでトゥアールに促され、俺は目を瞑る。
「ぐへ、ぐへへへへへ……とりあえずこの姿の時で一度……」
　瞬間、轟ごう音おんが響き、咄とっ嗟さにドアの方に視線を向ける。
　ドアが、絞った雑巾のようにひしゃげて床に転がっていた。

「――今日は……間一髪だったわ……」

　ツインテールをライオンのタテガミのように乱し、息を荒らげ、愛あい香かが部屋の中に入ってきた。パジャマ姿だ。
　充血した目とその下のくまは、決して寝不足からだけではないだろう。

「のえええっ、どうして起きていられるんですか、愛香さん!?　一吸いで大型の肉食獣をも昏こん倒とうさせる特製のガスが、効かなかったというんですか!?」

「効いたわよ……。胸騒ぎがして目を覚ましたら、その瞬間ガスが吹き出てきたわ。でも、意識が途切れる寸前、足の小指をベッドガードに叩たたきつけて、痛みで意識を保ったのよ……」

「な、なんという執念……！」

　ほんとだよ。

　この二人の喧けん嘩かはどこまでエスカレートしていくんだ。

　とにかく、愛香の誤解を解かなくては。

「待ってくれ愛香、ようやく、元に戻る方法がわかったらしいんだ！　トゥアールはそのために……」

「だからあんたは騙だまされやす過ぎなのよ！　部屋に鍵かぎかけられた時点で怪あやしみなさいよ!!」

　部屋の鍵？　ドアノブごと捻ねじり砕かれた今、あったのかなかったのかさえわからないが……。

「よく見てくれ！　俺は服を全部脱いだけど、ツインテールは解ほどいていないぞ!?」

「……で？　それがどうしたの？」

　――ホントだ……。

　よくよく考えてみれば、それがどうしたんだろう……。

　急に頭の中がクリアになった。

　論破は終わった、とばかりに愛あい香かはトゥアールへと飛びかかる。

「いや――愛香さんに全裸でベッドに押し倒されるのはいや――――っ」

「柔らかいベッドの上で気絶できると思わないことね！　今日とい

う今日は楽にはトばさないわよ!!」
「あっぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああ」
　原因がわかったって、嘘うそだったのか……。いつもの、虚無の思考時間シークタイム＝ゼロだ。
　でも、トゥアールなりに、俺を元気づけてくれたんだろうな。
　悲鳴の只ただ中なかでしんみりとしていると、部屋の奥のクローゼットから物音がした。
「うーん、もうちょっとだったのにねえ」
　クローゼットから母さんがのっそりと姿を現すと、関節技のフルコースを浴びるトゥアールと愛香を尻目に、手を振りながら部屋を出ていった。
「朝ご飯作っておくわね～」
「ああ」
　としか、言いようがない。
　深く考えるとものすごく恐ろしいことが起こったような気がするが、愛香とトゥアールは互いに夢中で気づいていないようなので、俺も今見た和風ホラーを気づかなかったことにするべく、全力で記憶をリライトする。

　慣れたとか、順応性が高いとかじゃ、ないんじゃないか。
　俺の周りが、急に女になるぐらい取るに足らないほど、現実離れした日常を作り上げているからじゃあないだろうか……。

◇

　さすがにソーラ一人のために全校生徒が授業を潰すようなことは

もうないが、その分、休み時間が大変になった。
　廊下に出た途端、生徒に殺到される。
「ＮＯ　ＭＯＲＥ　ＭＩＫＯＳＨＩ」を合い言葉に、桜さくら川がわ先生が慧え理り那なに加え俺も警護してくれるようになったが、近づくな、とまでは言えないので行列が廊下の果てまで続いていたりするのだ。
　昼休み、愛あい香かの先導で追っ手を撒まき、人目につかないように部室に駆け込む。
　もう部室だけが、学校の中で唯一のオアシスとなっていた。

　俺の対とい面めんに座っている慧理那が、もじもじしている。
　俺の方を見て、すぐ目を逸そらして、くねくねしている。
「……脱ぎたいのか、慧理那？」
　それしか心当たりがないので、俺はできるだけ穏やかに尋ねた。
「どうして観み束つか君は、すぐわたくしが脱ぐと思っているんですのっ!?」
　何度問われても、誰だれもが納得できる最良の答えが用意できない。
　俺が苦悩している間に、慧理那はまたもじもじし始めてしまった。
　ノートＰＣとにらめっこしていたトゥアールが、苦い表情を浮かべる。
「この数日、総そう二じ様のバイオリズムを記録していたのですが……学校での騒ぎがややストレスに感じる傾向がある以外、特に変化は見られませんね」
「やっぱそうか。俺自身、何も変わったようには感じないよ」
　引きこもるよりは色々環境を変えた方が、と女の姿でも無理に登

校してみたが、早くも手詰まりの様相を呈してきた。
「この騒ぎでややのストレスで済むって、テイルレッドで慣れすぎよね……」
　お行儀悪く長机に突っ伏している愛香だが、苦労をかけているからな。疲れていると思う。
　もじもじしていた慧理那が、意を決したように立ち上がった。口をぱくぱくさせ、目を見開いて俺に向き直る。
「そうだ、海に行きませんか総二様？」
「あの、観束くえええええええええええええええええええ!?」
　鳥のような奇声を上げる慧理那。
「何な故ぜ、トゥアールさんが先に言ってしまうんですの!?」
　ほえ？　と首を傾げるトゥアール。
「いやよ」
　即座に否定する愛香を無視し、トゥアールは続ける。
「ストレスばかり感じていても好転はしません。この辺で一度リフレッシュしてみれば、何か効果があるかもしれませんよ？」
「ごめんトゥアール、海はちょっと……。俺も、水着とか恥ずかしいし」
　そうだ。考えてみれば、今の俺は、女物の水着を着ないといけないじゃないか。
　制服はともかく、水着はちょっとな……。
　この妥協ラインが、自分でもよくわからないが。
「んもう、総そう二じ様ったら、そんなに恥ずかしがらなくてもいいじゃないですか、この前一緒にお風ふ呂ろに入った仲なのに♪」
　太平洋と同じぐらいの広義の意味でとらえれば、確かに一緒に入ったと言えなくもないかもしれないが……何な故ぜトゥアールは慧え理り那なの方をチラチラ見ながら、聞こえよがしに言うのだろう。

「お風呂!?　観み束つか君とトゥアールさんが!?」
「もちろん、タオルは巻いていませんでしたよ!!」
　見ないようにしていたが、タオルの代わりに荒縄で巻かれていたような気がするが……。
「み、観束君！　一緒にお風呂って、どういうことですの!?」
　当然、規律に厳しい慧理那は聞き逃のがさず、身を乗り出して詰問してくる。
「違うの会長、そーじが女の身体からだのことわからないから、教えてあげただけなの!!」
　……テンパってるんだと思うが、愛あい香か、その言い方だと誤解を招きやしないか。
「津つ辺べさんも一緒だったんですの!?　いつもなら止めてくださるのに!?　お、お、お、女の身体を教えるって、どういうことですの!?　どこを、どうやって!?　何を教えましたの!?」
「そ、それは……」
「蛮族といえど哺乳類ですからね~、いつもいい子ぶってるくせに性欲は一丁前なんですよおあはい来たあっ!!」
　またトゥアールが天井に刺さった……。少し余裕さえあるように見えるのが恐ろしい。
「ッ……い、行きましょう、海！　わたくしもそう提案しようとしていたところですの!!」
「急にどうしたんだ、慧理那!?」
　突然、慧理那が胸の前で拳こぶしを握り締める。
「海でしたら、神しん堂どう家所有の場所がありますので、そこなら周りの目を気にしなくていいと思いますわ！」
「会長……それって、プライベートビーチってやつじゃない!?」
　驚く愛香に、そういうものでしょうか、と恐縮する慧理那。

「プライベートビーチって、トップレスどころか全裸になっても怒られない、あのプライベートビーチですよね⁉」

　何故かガッツポーズするトゥアール。

「認識は人それぞれだと思いますが、一応そのプライベートビーチだと思いますわ」

「じゃあ！　それなら、文句ありませんよね、愛香さん！　決ーまりっ‼」

　はしゃぐトゥアールと対称的に、ひどく沈んでいる愛香。

「ま、負けませんわ……。わたくしには、お母様から教わった奥義が……‼」

　すごく不穏な言葉が聞こえた気がするが……こうなったらもう、思いっきり羽目を外してみるのもありかもしれないな。

　俺たちは、明日の休日から、海に行くことに決めた。

◇

　アルティメギル基地のホール正面廊下は、ファッションショーのステージと化していた。

　モデルたるダークグラスパーが、廊下の端(はし)から端まで見事なモデルウォークを披露し、颯(さっ)爽(そう)とターン。自信たっぷりに腰に手を当て、再び戻ってくる。

　何往復しただろうか。

　通りがかったエレメリアンたちは、何(な)故(ぜ)か皆「あ、そういえば」と急に何かを思い出して、彼女に負けず劣らずのクイックターンで踵(きびす)を返し、元来た道を去って行く。

　何度目かの廊下の端まで来たところを、メガネドンに摑(つか)まるダークグラスパー。

「これ、廊下ではしたない。何や、その格好」
「次のライブのステージ衣装じゃ」
　ダークグラスパーは、スクール水着に身を包んでいた。
　本場のファッションショーでスポットライトを浴びるモデルそのままの、不敵な笑顔で。



「スク水て！　今時スク水て！　どんだけあざといねん！　えっちなゲームばっかしとるから、そんな二次元常識に毒されるんやで!!」
「あざとさあってこそのアイドル！　あざとさを恐れては、アイドルは高みには立てぬ!!」
「あかん、こらあかんこの子あかん」
　くねくねとポーズを取り、評価を求めるダークグラスパー。
「で、どうじゃ？　感想を聞こうと思っても、通りがかるやつ皆、何な故ぜか急に帰ってしまうのじゃ」
「そらそうやろな……ええんとちゃうの。ていうか、ライブって何や、海ででもやるんか」
　投げやりに聞き返すメガネドンだが、ご明察だったようだ。
「お、よくわかったのう。せっかくじゃし、無人島で開催しようと思っておるのじゃ」
「せっかくって何やねん!?」
「手頃な無人島を見み繕つくろわねばならんな。太古の巨大生物が潜んでいるくらい、活いきがいいところがいいのじゃが」
　浮かれるアイドルを前に、肩を落とすゆるキャラ。
　その夜早速、無人島のピックアップが始まった。

◇

　透き通るような青空と、遥はるか水平線の彼方かなたでさえ底が見えてしまいそうな、輝くエメラルドブルーの海。
　不快な湿度とは無縁な、からっと晴れた砂浜を高台から望み、俺たちは呆あっ気けに取られていた。
「……ここが……私有地？」

　畏おそれ多さすら感じて、俺は一歩後あと退ずさった。

「え、ええ。一応……」

　恥ずかしそうに俯うつむく慧え理り那な。

「島だよな」

　見れば当たり前のことを、思わず口にしてしまう。

「日本では、本当の意味でのプライベートビーチは難しいからな」

　大荷物を軽々と抱えた桜さくら川がわ先生が、誇らしげに言う。

「……スケールが違う……」

　確かに、日本だと制限が厳しいという話は聞いたことがあるが、だからといって無人島丸々一つ私有地にしてしまうとは……。

　水着なんて、市民プールや学校のプールで着るのがせいぜいで、レジャープールにすら行ったことのない俺や愛あい香かにとっては、雲の上の話だ。

　砂浜の入り口から延びた道路はすぐ近くのホテルに繋つながっており、そこで着替えて海へと向かうのだと思う。

　海の家や、板張りの簡素な更衣室といった、日本の海の砂浜でお馴な染じみのものなど、探すだけ失礼というものだろう。

　今日ここへやって来たのは、俺と愛あい香か、トゥアール、慧え理り那な、桜さくら川がわ先生の五人だ。

　絶対に母さんが行きたいと言い出すと思ったのだが、おばさんの水着なんて見たくないでしょ、と苦笑し、普通に送り出してくれた。

　いや、あの、いつもの女幹部コスプレ……。

「観み束つか君、とりあえずホテルに行って休みませんこと？」

「そうだな」

　そう提案されるほど疲れてはいないが、とりあえず海に行く前に一休みはするべきだろう。

「んまあいやらしい台詞せりふをさらっと！　天性の淫いん乱らん娘ですね……男を誘う言葉を熟知しています」
　トゥアールは相変わらず音声を録音しているようだった。
　旅行でも、やっぱり白衣は着ずにはいられないらしい。

　たどり着いたホテルも、溜ため息いきしか出ない豪華さだった。
　コテージタイプが数棟、広大な庭を挟んで、十階建てはあろうかというビルタイプのホテルがその後ろにある。
　案内されたのはテラスから海を一望できる一番正面のコテージだったが、あまりの豪ごう奢しゃな内装に面食らってしまった。
　皮相な俺の知識では、これがスイートというやつだろうか、という感想しか出て来ない。
「さあ総そう二じ様、一緒に着替えましょう!!」
　荷物を置くや、やおらトゥアールがとんでもない提案をしてくる。
「大丈夫だって！　女物の水着くらい一人で着れるから!!」
「……そーじ。元に戻る時までその台詞記憶しておいて、よく反はん芻すうしてみなさい……」
「のーのー、着替えれるとか着替えれないとかどうでもいいんです、おっぱいの見せあいっこしましょう!!」
　愛香がチョークスリーパーでトゥアールを軽く落とした。
　さすがの愛香も、これだけ豪華な部屋では、天井や床に突き刺したり、内装品を武器に使うことはできないのだろう。
「会長、ずっとここで休んでようよ、無理して海入る必要ないわよ……」
「ええっ、海に来ましたのに!?」
　愛香はここに来てからひどく憂ゆう鬱うつな顔をしており、これほど

の海を目の前にして引きこもりを提案する。
　早速トゥアールが、愛あい香かの周囲で小刻みに反復横跳びを始めた。
「おやおや早くもギブアップですか？　まあ海に見放された真夏の敗者は、ホテルのスパで岩盤浴でもしていればいいんじゃないですか？　後から入ってきた私が、岩盤と間違えて愛香さんに覆い被さっちゃうかもしれませんけどね～」
「はあ!?　ふ、ふ、ふざけんじゃないわよ、誰だれがっ……あんたなんかとおおお風ふ呂ろで抱き合うって!?」
「何照れてるんですかここは私を殴るところでしょう!!」
　………………トゥアールはもしかして常日頃から、愛香に殴られたがっているのだろうか。
　でも、二人のやりとりに微笑ほほえましさを感じてしまって、少し緊張が緩んだ。
「じゃあ、着替えようか」
　慧え理り那なの荷物を運び終わった桜さくら川がわ先生が、おもむろにメイド服のスカートをめくり上げたので、俺は思わず手で顔を覆った。
「ちょっ……」
「はっはっは。お嬢様の警護とはいえ、私も今日を楽しみにしていてな。メイド服の下に水着を着てきてしまったぞ」
　……スカートをって露あらわになったのは、水着だった。
　思わず安あん堵どの溜ため息いきをつく。
「くおらああああああああああああ！　どんだけ浮かれてるんですか、年とし増まがやっていいシチュエーションじゃありませんよ!!」
　トゥアールが桜川先生に絡んでいる隙すきに、俺は部屋の奥の脱衣所に向かった。

　やたら金ピカの調達品に囲まれて落ち着かないが、今のうちに着替えてしまおう。

◇

　砂浜までやって来たが、何な故ぜか俺は一列に並んだ女性陣の前で気をつけをさせられていた。
「えっと……」
　意図がわからず途方に暮れる俺。
　業を煮やしたのか、桜川先生がじれったそうに急せかしてきた。
「お前、女の姿をしているとはいえ、男だろう。男は、女の水着を見たらきちんと感想を言うのが礼儀だぞ」
「そ、そうなんですか……すいません」
　俺はちらっと愛香に視線を送った。
　初等部の頃に何度か愛香と二人で市民プールに行ったけど、特にそういうことは言われなかったな。ある程度年齢が上がってから適応される礼儀なのだろうか。
「………………」
　ちらっと視線を送っただけに留とどまるはずだったが、思わず俺は愛あい香かを二度見してしまった。
　愛香の水着は、薄水色のビキニだ。ボトムがスカートになっている。
　フリイギルディも絶賛していた脚線美は、幼い頃からの鍛錬の賜たまものだろう。
　瑞みず々みずしく、光沢すら放ちそうなほどの健康的な肌を、ツインテールが彩る。
　しかし、ツインテールに見とれてもなお看過できない、決定的な

ダウトが胸部をむしばんでいた。
……胸があるのだ。
鮮やかなストライプの上ブ部ラははちきれんばかりに押し上げられ、主人へのお情けを俺たちに求める。
どうか気づかないふりをしてあげてくださいませ、と。
「…………似合ってるな、愛香」
「そう……あ、ありがと」
カンペを書く時間が欲しい。全く言葉が浮かばない。
愛香は横目で隣を窺うかがい、勝利を確信したように微笑ほほえみを浮かべている。
俺も愛香の隣に視線を移し、慧え理り那なの水着を見た。
「……わ、わたくしは……別に……」



　どこか拗すねるように俯うつむき、身体からだを縮こまらせる慧え理り那な。
「うふふ、慧理那さんの裸はレアですよねえ」
　トゥアールに内心を悟られたようで焦る。
　その通りなのだ。いや、裸という表現は違うが……慧理那の身体はレアだ。
　……あれ、これも何か誤解を招く表現だ。
　愛あい香かやテイルイエロー（脱衣）は身体のラインがわかる格好だし、トゥアールはよく脱ぐが、慧理那はそうでない。
　確かに、慧理那の体つきは幼い。
　手足は細く、女性らしい丸みやくびれもほとんどない。
　しかし、それらを包むツインテールが気高く凜りん然ぜんとしているため、いわゆるギャップが生まれるのだ。
　フリルに色づけされたカラフルな水着は、慧理那の全身からあふれる純真さを際立たせる。
　それはツインテールの加護を受けて、彼女の魅力を最大限に引き出す。
　俺は、わけもなく感動し、心のままに素直な言葉を贈っていた。
「可愛かわいい……」
「え」
「ご、ごめん、ありきたりなことしか言えなくて」
「っ……い、いえ、充分ですわっ」
　なるほど……これが女性のコーディネートというものか。
　ツインテールが主役でも脇わき役やくでもある。前菜でもメインディッシュでもある。
　このバランスを見極め実行するのは、俺が考えている以上に容易ではないだろう。

そういう意味では、慧理那の隣で不敵に笑う桜さくら川がわ先生などは、主題がはっきりとわかる。
「すごく大人っぽいです」
簡潔な感想ではあるが、あらゆる賛辞を込めたつもりだった。
「ふふん、そうだろう。なんせ、それが私の強みだからな」
桜川先生も、言葉に宿った賞賛を充分に感じ取ってくれたようだった。
そもそも、婚こん姻いん届とどけ渡し魔としての印象が先行してしまっている桜川先生だが、その均整の取れた肢し体たいは、トップモデル顔負けのものなのだ。
上下が繋つながっているので、大別すればワンピースなのだろうか？
お腹なか周りと背中の大きく開いた水着は、桜川先生だからこそ難なく着こなせる、大人の証だ。
そして、ここでもやはりギャップが活いきてくる。
桜川先生のツインテールは、ふわふわと柔らかそうな上結びだ。
それがこの匂い立つような大人の魅力と化学反応を起こし、色香を引き立てるのだ。
そしてさらにその隣のトゥアール。
白く、面積の小さなビキニ。縁が黒のラインで飾られているとはいえ、そのシンプルな水着は、彼女の絶対的な自信……自分への信頼を窺うかがわせた。
とても綺き麗れいだと思った。
美辞麗句を並べるのは簡単だが、最後には誰だれもがそう締め括くくるだろう。
「綺麗だ……」
「…………………………私だけ、批評文が短い気がします……」

　トゥアールは軽く肩を落とした。
「批評文!?」
「でも、嬉うれしいです。多分わかってくれたでしょう。私ほどの肉体を持つ女に、飾り気など不要。シンプルであればいいのです」
　俺の印象通りだった。やっぱりそういう考えあってのセレクトなんだなあ。
　礼儀だ、とは言われたけど。
　こうしてみんなの笑顔を見るのは、むしろ俺の胸が温かくなる。
　それぞれに魅力があって、学ぶべきところも多い。
　俺は幸せ者だ。
「……あの、総そう二じ様、もうツッコんであげてください。気づかないふりしても生殺しです」
　内心まとめに入っていた俺を、トゥアールが引き留とめる。
　横目で愛あい香かを窺い、あれが夏の日差しが生み出した蜃しん気き楼ろうではなかったことを再確認する。
「介かい錯しゃくすべきか、やっぱり」
「何よお!!」
　慎重に言葉を選んでいると、愛香が詰め寄ってきた。
「水着にパッド入れポケットがついてるのよ！　使えってことでしょ！　使える機能を使って何が悪いのよ!!　メーカーさんに申し訳ないと思わないの!?」
　おもらしの限界まで追い詰められてようやく、俺はその逃げ口上に頼ったのだが……。
　逆ギレをあざ笑うかのように、トゥアールが理路整然と偽りの胸を貶おとしめる。
「愛香さん。天然物の巨乳がダイヤモンドだとすれば、パッドで盛ったおっぱいなど、安物のメタルラックについたサビくらいの価

値しかありませんよ。ある意味、貧乳よりも必要とされていない廃棄物です」
　愛香のブラの隙(すき)間(ま)から、一枚パッドがずり落ちた。
「……」
「…………」
　その光景はあたかも、崖(がけ)のわずかな出っ張りに片手で掴(つか)まっていたものの、ついに力尽きて奈(な)落(らく)へ落ちてしまったような無念さの具現であった。
　多分、水着の内側のパッドポケットは限界まで伸びきり、破れる寸前だろう。愛香の代わりに俺は、心の中でメーカーさんに謝っておく。
　トゥアールは手で口(くち)許(もと)を隠しながら含み笑いをもらし、さらに傷口を抉(えぐ)る。
「第一、パッドなんて、まだ素っ裸を見せていない段階で『こいつ案外着やせするんだな』、とか男性を(だま)くらかして点数稼ぐために使うものですよ。テイルブルーに変身して、愛(あい)香(か)さんのスタイルはすでに白日の元に晒(さら)されているんですから……今さら盛っても手遅れです」
　まさかの正論……。
「うわあああああああああああああああああああああああああああああん地球上の海全部干上がれ――――――――――――――――――――ッッ!!」
　水の力を操る戦士とは思えない大暴言を吐き、愛香が砂浜を爆走する。
　この星の生きとし生ける全てのものたちよ、いつの日か全ての海が干上がってしまっても、愛香の貧乳を責めないでやってほしい。
「ごっあああああああああああああああ!!」

　遅れて悲鳴が聞こえる。

　珍しくただ逃げを打ったと思っていたら、愛香の腰にはロープが巻かれ、その先に繋つながれたトゥアールが、砂浜の上をボンボンとバウンドしていた。

　足腰を鍛きたえるために、タイヤを引っ張って走る──ああいう特訓のようだ。

　スポ根だなあ……。

「……それにしてもだ」

　桜さくら川がわ先生は顎あごに手を添えて俺をツインテールから下までじっくりと見回すと、勢いよく指を突きつけた。

「一番可愛かわいいのがお前だというのが、納得いかん!!」

「ええ!?」

　似合う似合わないとか全然考えないで、トゥアールがくれた中で、一番着替えやすそうな水着を選んだだけなんだが……。

「客観的に見ても、お前がこの中で一番バランスが整っている！」

「そうですわね、観み束つか君……素敵ですわ……」

　慧え理り那なまで一緒になって、羨うらやましそうに見つめてくる。

　そうか。

　俺は原因もわからず女の子になってしまっただけで、何か努力をしたわけではない。

　それでこれだけのツインテールを手にしているのだから、弛たゆまぬ錬磨の果てに今のツインテールへと至った二人からすれば、当然思うところはあるだろう。

「ええと……ほ、解ほどくよ」

　吐血しそうなほど辛つらいが、仕方がない。

　俺はバレッタを外し、ツインテールを解ほどいた。

　この瞬間だけは、どうも慣れない。無心無気力になり、賢者のような境地に達してしまう。
「……何な故ぜ、ツインテールを解くのだ」
「いや、納得いかないって言うから」
「お前の身体からだには心臓の代わりにツインテールでも入ってるのか!?　何でもかんでもそれに結びつけるな！　ツインテールだけにな……」
　────上う手まい……！
　俺は感心すると同時、どこかでこの言い回しを使わせてもらおうと、心の中で相互使用の提携契約書にサインをした。
「む、お前今、心の中で婚こん姻いん届とどけにサインをしなかったか？」
「してません!!」
　内心焦った。色々な人が、色々なことに特化した第六感を持っているものだなあ。
「全く、仕方のない奴やっだ。どれ、その髪かみ留どめを貸せ。結び直してやる」
　桜さくら川がわ先生は俺の手の平からバレッタを摑つかみ上げると、後ろに回って髪を掬すくい上げた。
「あ、あの……！」
「ええい、動くな」
　くすぐるようなじれったさで、背中に桜川先生の胸が触れる。
　しかし、ツインテールという生命線を握られた俺は身動じろぎもままならず、身体を強こわ張ばらせることしかできない。
「ほら、できたぞ」
　さすがの速さだ。しかし、早速房を摘つまみ上げようと持ち上げた手が、空くうを切った。

「もしかして、先生……これ」
「うむ、私のように上結びにしてみたのだ。気分転換にどうだ？」
　なるほど……！
　確かに、俺自身はツインテールの初心者だ。
　必然、慣れ親しんだベーシックなツインテールを徹底的に練習することに終始したが、せっかく女の子の身体になったのだから、
色々なツインテールを楽しんでみるのもありだろう。
「いいかもしれない」
　俺は後頭部に垂れるツインテールの感触を、首で、背中で、そして手の平で確かめた。
「観み束つか君っ……そ、それならこっちはどうですの!?」
　慧ぇ理り那なが桜川先生と俺の間に、その小さな身体を滑り込ませてきた。
　慧理那は俺のバレッタを外し、自分と同じように下結びにしていく。
「慧理那、上手だね」
「そ、そうですか？　嬉うれしいですわ。他の人にするのは初めてでしたので……」
『慧ぇ理り那なちゃんはホントに無意識にエロいわねえ～……あ、やばい、音声入っちゃった』
　────今、遠く離れた自宅にいるはずの母さんの声が聞こえた気がするが、新たなツインテールの昂こう揚よう感の前に微かすかな違和感など消し飛んでしまった。
「でも観み束つか君、髪が長いですから……立ち上がっても、髪が地面についてしまいますわね」
「そっか。あらかじめそういうことも考えて結ぶのが大事なんだな」

上結びにしたり、下結びにしたり。
新しい世界が開けたような気分だ。
「今は普通のツインテールの練習で精一杯だけど、少しずつ、この二つの結び方も練習してみるよ。ありがとう、二人とも」
「ふ、向上心があるのはいいことだ。夫としての自覚が出てきたようだな」
「い、いつかおそろにできたらいいですわねっ」
和なごやかな雰囲気になった俺たちの目の前に、空からトゥアールが落下して来た。
釣り上げられたばかりの魚のように、ビチビチと元気よく跳ねている。
「そーじっ！」
唐突な自主トレを終えて帰ってきた愛あい香かが、汗に濡ぬれた手で俺の肩を摑つかんだ。
「あんたねえ、今後があっちゃ駄目なのよ!?　リフレッシュして、その後はしっかり原因を突き止めて男に戻らなくちゃいけないんだから!!」
「そ、それはそうだけど」
愛香に詰め寄られる俺を見て、慧理那がぷう、と頰ほおを膨らませている。
すまない、せっかくツインテールの結び方を教えてもらっていたのに。
「観束君っ！　日焼け止めを背中に塗っていただいてよろしいでしょうかっ!?」
桜さくら川がわ先生が運んで来たバッグから小さなボトルを取り出し、慧理那がお願いしてきた。
「え、お嬢様、私が塗りますよ」

「いえ、わたくしは観束君に……」
　桜川先生が受け取ろうとすると、慧理那は必死に腕を上げてボトルを遠ざけようとした。
「ちょっとどうします、このちびっ子誘ってますよ……うっかり手が滑ったり指が入ったりしても許してくれそうですよ、ふへへ」
　日本の法の外にいる、凶悪な犯罪者がビキニを着て笑っている。
「二人でやっちゃいましょう総そう二じ様。小っちゃい子、みんなで触れば怖くない、です」
「その倫理観はこの世界に持ち込まないでくれ……」
　桜川先生は慧理那がやんわりと拒否しているのにも気づかず、ぐいぐい押していく。
　でも、何で慧理那は俺が塗るのにこだわるんだろうか？　何かの練習になるのかな。
「ですから観束君に……」
「何な故ぜですか？　別に私でも大丈夫でしょう」
　愛あい香かは半ば呆あきれながら、二人のやりとりを見つめていた。
「……最近、あの人が何であの年まで結婚できなかったかわかってきた気がする……」
「そして明日は我が身ですよ、愛香さん。今のままでは孤高のアマゾネスとして余生を終えるしかありません」
　余裕たっぷりの表情で、愛香の肩を叩たたくトゥアール。
「そーじ、スイカ割りしない？」
　おもむろに変身したかと思えば、愛香は学校水着属性スクールスイムを発動した。
　トゥアールが頭だけを砂上に残し、身体からだを全部埋められてしまう。
「やめてください何で砂に埋めるんですかそれはトゥアールちゃん

の頭ですよ!!」
　──何な故ぜ、躊躇ためらいもせず仲間に使うんだ……。

◇

　そうしてしばらくの間、俺たちは貸し切りの海を堪能した。
　日差しはきつすぎず、景観は最高。人の手もあまり入っていないので、自然のよさも実感できる。
　この絶好のロケーションに、愛香とトゥアールも、いつも以上にはしゃいでいるようだ。
「何でですか、やりましょうよビーチバレー！　愛香さん、運動神経いいんだから別にいいじゃないですか!!」
「嫌いやよいかがわしい」
「四の五のうるさいですね揺らしたいんですよおっぱいを!!」
　望み通り、ビーチバレーが始まった。
　ただしマンツーマン、なおかつトゥアール自身をボールにした愛香の無限ボレーという、スポーツ界に激震の走る新ルールだったが……。
　やはり、気心の知れた友達同士で遊びに来るのは楽しいものだ。
　色々と設備が整っているのもありがたい。
　水上バイクも体験できたし、補助具や遊具も揃っている。
　泳ぎ疲れて波間を漂っていた俺は、トゥアールをスキー板にしてジェットスキーを楽しむ愛香という、最先端のレジャーを目の当たりにしてしまった。
　夏を満喫してるなあ……。
「よくもあたしの水着外そうとしたわね!!」
「腰こし簑みのだけで充分な野人の胸に余計な布がついてたから、取っ

てあげようとぐぼふああああ」
　見事な空中ターン。着水と同時にトゥアールが白目を剝むく。
　見とれていた俺は、バイクの旋回が巻き起こした大波をもろにかぶってしまった。
「わあっ！」
「ごめん、大丈夫!?　そーじ」
　その台詞せりふは足元で白目を剝むいている、縁の下の力持ちに言ってやれ……。
「あっ！」
　妙に胸のあたりが冷たいと思ったら、ブラが脱げて、どこかへ流されてしまった。
「そーじ、ホントに大丈夫？」
　バイクを沖に止め、愛あい香かが泳いで戻ってくる。
「み、水着の上が、流されちゃって……」
　俺は腕で胸を隠しながら、周囲を見回す。
　トゥアールから貰もらったものなのに、なくしてしまったら大変だ。
　そう思った直後、トゥアールがバタフライで俺の側そばまで迫ってきた。謝らないと。
「何で総そう二じ様がそのイベントを発生させるんですか――――――――っ!!」
「イベント!?」
　全く予期せぬ叱しかられ方をして、謝罪の言葉が浮かばない。
「くっ……どのタイミングでやろうか悩んでいるうちに、まさか総二様自身に先を越されるとは……先ほどから後手に回ってばかりです！」
　また、よくわからないことを……。とりあえず、今は水着だ。

　ゴーグルをしなくても、これだけ透明度の高い海なら、すぐに見つかると思うのだが。
「――ぷはっ……ほら、あったわよ」
　しかし、俺が懸命に捜すまでもなく、愛香が捜し当ててくれたようだ。
　右手に握った水着を、俺に差し出してきた。
　水面から顔を出し、頭を振って水を切る愛香。
　ツインテールから飛び散る水みず飛沫しぶきが、宝石のように夏の空を彩る。
「何か、人魚みたいだ……」
　礼をいうより先に、俺はそんな益体もない賛辞をこぼしていた。
「えっ……」
　愛香は、急にもじもじとし始める。
「人魚っていうか半魚人じゃないですか？」
　潜水して音もなくトゥアールの背後に回り込んだ愛香が突如として浮上し、海藻でトゥアールの目を塞ふさいで海中に引きずり込んだ。
　ただ生きているだけで怪談を生み出していくな、愛香は。

　沖に上がると、慧え理り那なが精力的に身体からだを動かしていた。
　何な故ぜそんなに慧理那に日焼け止めを塗りたがったのかはわからないが、最後まで断られた桜さくら川がわ先生は一人、砂の城を作っている。
「慧え理り那な、何やってるの？」
「じゅ、準備体操ですわっ……」
「準備体操!?　今の今まで、たっぷり泳いだあとでか!?」
「今思い出したんですの！　観み束つか君もわたくしを見て、お手本

にしてくださいましね！」
「お、おう？」
　珍しく、慧理那がやる気だ。
　準備体操と言うより、軽やかなダンスのようだが、実に洗練された動きだ。
　あまり運動は得意ではないと言っていたけど、謙遜（けんそん）だったんだな。
　非常に綺麗（きれい）なフォームだ。普段からしっかりと身体（からだ）を動かしているのが、動きの柔らかさでわかる。
　それにしても綺麗だな。
　ツインテールがふわりふわりと揺れて、こっちが手本にさせてくださいってお願いしたいくらいだよ。
　ほんと、綺麗、で、あれ、うん、綺麗……

　どくん――。
　自分の大きな心音が、大気に反響するような錯覚を覚えた。

　な、何だ、この感覚は……。
　慧理那のツインテールの動きを見ていたら、身体が……熱い……。
　意識が遠くなる。熱射病だろうか。水分は充分補給したのに。
　俺は砂浜に膝（ひざ）をついてしまった。
　慧理那が慌てて駆け寄ってくる。
　ああ、本当に、なんて魅力的なツインテールなんだろう。
　世界がぐるぐる回っているのに、ツインテールだけがはっきりと見える。
　鼓動はますます早くなるし、息も上がってきた。

「観束君、ええと、わたくしを見て、何か……思ったり、とか……」

　特段心配する様子はなく、慧理那は俺の顔を覗のぞき込んできた。

　ああ、だめだ。もう、がまん、できない。

「はあ、はあ……！」

　俺は、慧理那を力任せに砂浜へと押し倒した。

「きゃんっ」

　可愛かわいらしい声を上げる慧理那は、見上げた俺が尋常ならざる目をしているのに気づいたのだろう、慌てて離れようとする。

　しかし俺は、慧え理り那なのお腹なかの上に腰を下ろし、太ふと股ももで挟んでがっちりと身体からだを押さえ込んでいた。非力な慧理那が力任せにほどけるはずがない。

「み、観み束つか君……」

　そう、俺は今、自分で自分が正常でないのがわかっている。心の隅で、激しく警鐘を鳴らしているというのに……止まらない。

　俺は慧理那へと両手を突き出して本能のままにそれを鷲わし掴づかみにし、荒々しく揉もみしだいた。

「ひゃあんっ！」

「はあ、はあ……」

　何て気持ちのいい感触なんだろう。

　まるで、手の平に吸い付くようだ。

「み、観束君、正気に、戻って……くださいましっ……」

　涙目で訴えてくる慧理那は、しかし、次第に頬ほおを赤らめ始めた。

　俺はさらに全身の血液が沸騰していくのを感じ……一層、手に力を込める。

　揉みしだかれ、すっかり乱れてしまった慧理那の──ツインテー

ル。

　焼き切れた自分の意識を、激痛と共に繋つなぎ止める。

　駄目だ、こんなのいけない……！　止ゃめろ、止めるんだ!!



「……身体からだ、が……いうことを……きかない……」
　肩が乱暴に摑つかまれ、俺は砂浜に引き倒された。
「貴様、お嬢様に何をしている！」
　せっかく戻りかけていた意識が、また胡乱うろんになっていく。
　あ、桜さくら川がわ……先、生、だ。
　よかった、もうだいじょうぶだ。
　あれ、あそこにもツインテールがあるぞ。
　俺は、雲のようにふわりと揺れる桜川先生のツインテールを、力一杯ジャンプして摑んだ。
「わ―――っ!?　お前、何で女の姿ではそんな肉食系に!?　やめろ―――っ、婚こん姻いん届とどけに判も押していないくせに!!」
　必死に振り解ほどこうとしてくる。
「ッ……み、観み束つか君。それは……それはわたくしせいなのですわ……尊みこと、離してあげてください。観束君を、わたくしに……。わたくしを、気の済むようにさせてください……」
　慧え理り那なが後ろから抱きついてくる。
　俺は、一体何をしているんだ。
「ちょっと、何事!?」
「津つ辺べーっ、どうにかしてくれ、観束が急に理性を失った!!」
　駆けつけた愛あい香かに助けを求める桜川先生。
　違う、俺もわかっているんだ。
　冷静になればなるほど、身体が別の何かに支配されてゆく――。
「え、ちょっと、千載一遇のチャンスじゃないですか、どいてください！　私はこの時を待っていたんです!!」
　突進してきたトゥアールが、愛香に止められる。
　背中が俺に向けられ、そのきめ細やかな銀髪が目に映った。
「……ァ……」

結びたい。
結んであげたい。

いけない感情が、身体の中心で渦を巻いているのがわかる。
結んでいいか、と尋ねたい。
それは……それだけは、駄目だ！
「っは──」
激しい罪悪感に細胞が苛さいなまれ、俺は意識を取り戻した。
何てことを考えてしまったんだ、俺は。
いや……本当にそうか？　罪深い、大それた願いか？
トゥアールは、属性力エレメーラを失えば絶対にツインテールにはできないといっていた。
だが、俺ならどうだろうか。
この世界で一番強いツインテール属性。
それがあれば、世界の強制力とやらにも立ち向かえるのではないだろうか。
俺なら、トゥアールを元に戻してあげられないのか……？

◇

参った参った。
慣れたつもりでも、こうして激しい運動をすると顕著だ。男と女の身体からだの違い……あったはずの筋肉が急になくなっているせいか、上限を考えずに酷使させてしまう。
さっきの罰として、俺は桜さくら川がわ先生に遠泳を命じられた。
確かに、一度性根を鍛きたえ直す必要性を痛感したので、甘んじて

受け、今に至る。
　遠泳を終えてくたくたになった俺は、身体とツインテールを休めるため、桜川先生に見つからないよう、ついつい浜辺の岩陰に隠れてしまった。
「□□□□!?」
　瞬間、俺の頭を鮮烈なツインテールの気配が過ょぎった。
　勘違いだと信じたい。
　こんなところであいつの気配を感じるはずがないのだから。
　頭を少しだけ出し、愛ぁぃ香ゕたちが俺に気づいていないのを確認して、俺は変身した。
　みんなにはいずれ気づかれるだろうが、その前に一人でやらなければならないことがある。
　景観を損なわない完ゕん璧ぺきなバランスで整備された林道を駆け抜け、島の反対側へと急いだ。
　島の正反対も砂浜が開けており、そこには人影があった。
　予想した姿を果たして目にした俺は、手近な岩陰に身を躍らせ、動向を窺ぅかがった。
「この島など、会場にどうじゃ」
　間違いない。何で、ダークグラスパーがここに!!
　いや、今は善ぃぃ沙すな闇ぁん子こか……。何な故ぜかスクール水着を着ている彼女と、もう一人。
　打ち合わせのようなものをしている。
　隣の着ぐるみは、何だろう。シャチ……いや、鮫さめか？　なんて絶妙に残念なデザインだ。あれじゃあ地方自治体のマスコットを任された途端、過疎化のプレリュードを奏でそうだ。
「反対側に何か建物あるみたいやったし、まあ私有地やろなあ」
　あのエセっぽい関西弁……さては、中身はメガ・ネプチューン

か!?

「たわけ、私有地だろうが国有地だろうが、善(いい)沙(すな)闇(あん)子(こ)のライブ会場にしたいとあらば所有者も二つ返事で了承するであろう」

　無(む)茶(ちゃ)苦(く)茶(ちゃ)なことを言っている。多分、ノリで出た軽いジョークではなく、本気なのだろう。

　ライブ？　を開くための無人島を片(かた)っ端(ぱし)から探していたのなら、ここに来たのは偶然か。そこは安(あんど)すべきことだが……。

「でもここ、かなり遠いで。ライブツアーはツアーでも、ライブに行くためのツアーとして企画せなあかんレベルや」

「だからこそ付加価値がある！　無人島でアイドルといっしょ、胸躍るシチュエーションであろう!!」

　あいつ最悪や……。あ、移った。

　あの自信はどっから来るんだ。あいつの言う通り、アイドルには必要な要素なんだろうか。

「それより、ほれ。注目すべきところは他にあろう。ん？　ん？」

「……何や。いや、うん、わかってる、前から気いついとったんや、でもな」

　メガ・ネプチューンが困るのも無理はない。

　ダークグラスパーは、神眼鏡(ゴッドめがね)をかけたままだというのに、おでこに水泳用ゴーグルもかけている。

　あれが彼女のボケなのだろう。普段から地球最高レベルのボケツッコミを見慣れているせいか、俺にはそれほどパンチがあるようには感じない。

　しかし、ダークグラスパーはあくまで自分のセンスに絶対の自信があるようだ。

「ユーモアのセンスをもっと磨くのじゃ。これももちろんライブ衣

装じゃぞ。まずこの状態で一曲歌い終わったあと、ＭＣの間にお前が現れ、ツッコむ。待ち望んだ展開に観客は一体化し、ボルテージも一気に上がるというもの」
「嘘うそやろ、そんなダダ滑りにウチも巻き込まれなあかんの⁉　いややー‼」
　何か、メガ・ネプチューンが普段からああいう感じで苦労しているのだろうな、ということは伝わった。
「ほんっま、アイドル活動ばっかりに精出して、部下はんたちが報われへんで」
「報われておるじゃろう。作戦はとうとう次の段階にシフトしたのじゃ、あいつらもやる気が増すはずじゃ」
　――――何⁉
　あいつ今、何て言った……次の段階⁉　トゥアールの予想していた通りだったのか⁉
　続きを聞こうと気が逸はやる俺をあざ笑うかのように、メガ・ネが話の腰を折ってしまった。
「ああっ、イースナちゃん！　名札、名札ァ‼」
　着ぐるみが、イースナの胸をヒレで指し示す。
「当然であろう。名札なきスク水など、牙きば無き獣も同然‼　これは必須じゃ‼」
「ちゃうわ！　名札、うっかり『だーくぐらすぱー』って書いてまっとるやないか！　剝はがしとき‼」
「ぬああああああ貼はったり剝がしたり何なのだ貴様、おかんかああああああああああ‼」
「□□□□□□‼」
　メガ・ネプチューンが、イースナのスク水の名札を引っぺがした。

　力加減を間違ったのか、名札どころか水着の胸部分まで破いてしまい、小さな胸が露(あら)わになる。
　焦った俺は身動(じろ)ぎしてしまい、テイルギアの脚パーツが岩にぶつかってしまった。
「何やつ!!」
　バレた……！　トゥアルフォンの変声機能で猫の鳴き真(ま)似(ね)でもしようかと考えたが、そのためには変身を解除しなければならない。あいつのすぐ側(そば)で、それはリスクが高すぎる。
　俺は大人しく、岩の後ろから姿を現した。
「む、テイルレッドではないか！　何(な)故(ぜ)ここに!?」
「俺は……パ、パトロールの途中だ！」
　この島の所有者が、慧(え)理(り)那(な)の家だとばれたらまずい。俺は必死に言葉を選んだ。
「それに、それはこっちの台詞(せりふ)だぞ！」
「ふむ？」
　……いや、そうか。何でここに、とは言えないよな……。私有地だろうが公共施設だろうが、お構いなしに現れる連中だ。おとなしく、こいつの反応をキャッチして駆けつけたふうを装っていた方が賢明だろう。
「お前、俺に正体知られたくせに平気な顔してアイドル活動続けやがって、どういうつもりだ！」
「ふふん、ならば逆に聞くが、仲間に善(いい)沙(すな)闇(あん)子(こ)の正体を教えておらぬじゃろう？　何故じゃ」
　ダークグラスパーは、悪びれもせず、質問を返してきた。
「知るか。言うタイミングを逃(のが)しただけだ」
「フッ……かわいいやつ。テイルブルーがあの気性では、善沙闇子の正体を知ったならば、生放送中だろうが乗り込んで来るじゃろう

からの」
「…………」
　見透かしやがって……。その通りだ。
　もし愛あい香かがダークグラスパーの正体を知れば、善沙闇子を目にした途端、生放送のスタジオだろうがライブ会場だろうが出撃して大暴れするだろう。その時こいつが徹底して一般人のふりをし続けるだけで、テイルブルーの評価は今度こそ終わりだ。
　バラエティ番組で恨みが積もっているだけに、他の芸能人も危ない。
　お笑い芸人がテイルブルーの物真似をしていたら、後ろから本人が現れるという拍手喝かっ采さいのサプライズが実現しかねない。
　そんな俺の苦悩など知らず、ダークグラスパーはずかずかと近づいてくる。
「もっとも、わらわの認識攪乱装置イマジンチャフは正体隠匿の一点にのみ力を注いでいるため、お前のように自らはっきりと認識しない限りは、善いい沙すな闇あん子こにはたどり着かぬぞ」
「何だって!?」
「少しは罪悪感が薄れたか？」
　だからか。あの戦いの後も、トゥアールさえも気づいていなかったのは。
「どうじゃ、お前もその無粋な鎧よろいを脱いで、一度素顔をわらわに見せてくれぬか」
「ふざけるな！　お前には言ったはずだぞ！　これは、トゥアールから託された大切なものだって！」
　眼鏡めがねのブリッジを指で持ち上げ、ダークグラスパーは蠱こ惑わく的な笑みを見せた。
「何じゃ、随分とつれぬではないか。ちゅーした仲であろう？」

「ッ……！」

　思わず唇くちびるを押さえてしまう。

　心を乱すな、こいつの思うつぼだ！

「トゥアールの完成した女の魅力も捨てがたいが、わらわはお前に目覚めさせられてしまったのじゃな、ふふ」

　俺の敵意など軽く受け流し、ダークグラスパーはなおも俺を妖あやしく睨にらみ見る。

「お前、眼鏡が一番好きなんじゃなかったのかよ！」

「その通り。わらわは眼鏡をこれ以上ないほど愛しておる。……じゃが、一番愛する者はと聞かれれば、今ははっきりお前じゃ、と答えるであろう。次がトゥアールじゃな」

「何が言いたいんだ」

「ほう、何が言いたいか、わからぬということか？　……やはり、お前という存在は危ういのう。だが、だからこそ可愛かわいいいのじゃが」

　言葉の意味がわからず混乱していると、メガネ鮫ざめの着ぐるみを脱ぎ、メガ・ネプチューンが姿を現した。手を持ち上げて合図をし、ダークグラスパーがそれに頷うなずいた。

「まあよい。お前の厚意に甘え、テイルブルーらの前では、引き続きダークグラスパーとして振る舞うとしよう」

「何？」

「お仲間のご到着じゃぞ」

　俺とダークグラスパーの中間に、大岩が落下して来た。砂が舞い上がり、降りかかるも、ダークグラスパーは微笑ほほえみをたたえたまま不動を崩さない。

　後ろを振り向くと、テイルブルーとイエロー、そして微妙にバージョンアップしてデザインが少し変わったマスクをかぶった、仮面

ツインテールが勢揃いしていた。
「……ダークグラスパー……!!」
　う闊かつなことを言って、ここに俺たちがいたことを知られまいと、ブルーは憤ふん怒ぬの形相の下に必死に言葉を隠している。
　胸を隠さず仁王立ちする善いい沙すな闇あん子この駄目な潔さに、仮面ツインテールが猛抗議した。
「ぎゃあああああああああ！　何ですかイースナ、その攻撃的なスク水は!!」
　そうか、未いまだに善沙闇子とダークグラスパーがイコールで繫つながっていない愛あい香かたちには、今のこいつは「スクール水着を着たダークグラスパー」なんだ。
「おおお、その声は！　やはりあの時の仮面女はトゥアールであったか」
　自分へのターゲッティングが外れたせいか、トゥアールはもはやかつてほどの危機感を持っていないようだ。
「ギャラリーも増えてきたし、おっぱい丸出しはまずいで。とりあえず、これ貼はっとき」
　メガ・ネプチューンは、イースナの胸に一枚ずつ白い四角のシールを貼った。
「イースナちゃんが頼んだ通販の箱に貼ってあった、宛名のシールや」
　……ああ、あれをカッターとかでペリッて剝はがしてからじゃないと、資源ごみで段ボール捨てる時ちょっと不安だもんな。
「ううむ、粘着力が心こころ許もとないが、致し方ない」
　仮面ツインテールが、地団駄を踏みながら善沙闇子に指を突きつける。
「あなたは毎度毎度、恥部におもしろデコレーションすることに命

懸かけてるんですか!?　負けませんよ!!」
「張り合うなよ!!」
　……待てよ。通販の宛名シールなら、あそこにイースナの住所が……アルティメギル基地の住所が書いてあるのか!?
　俺は目を凝らし、イースナの胸をまじまじと見つめた。変身していれば、この距離でも見えるはずだ。
　しかし、そんな視線をイースナは誤解してしまったようだ。
「……む、何じゃテイルレッド、そんなにわらわのおっぱいを見つめて。吸いたいのか？」
「吸う？　そんなぺったんこな胸、ブラックホールでもない限り無理でしょ」
　ブルーが、ドヤ顔で痛烈な一打を放った。
　──学ぶんだ、イースナ。これが真のボケというものだ。
　愛香のこの捨て身のボケに比べれば、お前が一生懸命考えたゴーグルの仕込みも、所詮は歌の合間のひと山いくらの小ネタに過ぎない。
　トゥアールも文句があったようだが、先に愛香のあの蛮勇を見ては、沈黙するしかない。
　身を削そぐようなブーメランボケを見事放った勇者が、ダークグラスパーに敵意を向ける。
「……グラスギアをつけなさい、ダークグラスパー。言っておくけどあたしは、あんたが丸腰でも平気でブン殴るわよ」
　ブルーの陰に隠れながら、仮面ツインテールがシュッシュッと拳こぶしを突き出す。
「いちいち騎士道なんて気取らないで、すぐブン殴ってくださいブルー。そこがあなたの欠点です」
　いや、その騎士道という名の理性がなくなった時、どうなるか

散々目の当たりにしてきたじゃないか……。
「残念じゃが、お前たちと戦うのは、部下の役目じゃからのう」
　この期に及んで煙に巻こうとするダークグラスパーに、ブルーの殺気が頂点に達する。
　一触即発の状況になった、まさにその時。
　一際大きな波が浜辺に打ち寄せ、それに流されて何かがごろん、と転がってきた。
「何だ、これ」
　大きな深海魚が何匹も絡まって打ち上げられたのかと思ったが、よく見れば、エレメリアンの姿を模した彫像のようだった。あまりの生気のなさにそう感じてしまったのだが、それは、生きた本物だということを自ら動くことで証明した。
　幽霊のような恨めしさに満ちた声が、常夏に涼風を吹き込む。
「腹筋の……腹筋の割れた女子おなごはおりませぬか……冥めい土どの土産に、老い先短いこの爺じいに見せてくだされ……」
　まだお盆も遠いというのに、彷徨さまよえる魂が海を渡り彼岸から舞い戻ってきたのだ。
　ダークグラスパーが眼鏡めがねの右フレームを指で摘つまんで一振りし、嘱しょく目もくする。
「誰だれじゃ貴様は!?」
「こっちの台詞せりふだあああああああああああああああああああ!!」
　俺は全力で突っ込むが、どうやら指揮官であるダークグラスパーすら、この突然現れたエレメリアンに全く心当たりがないようだ。
また、随分と耄もう碌ろくした雰囲気だが……。
「はあ、どなたですかのう……」
　よろよろと覚おぼ束つかない足取りで、ゆっくりゆっくりと歩いてく

るエレメリアン。
「おい貴様、わらわも知らぬがどこの部隊の者じゃ。よもや単独行動ではあるまいな!?」
　その問いに、スローモーションのような鈍重な動きで、首を傾げる。
「はて、リヴァイアギルディ様に一言言ことづて伝して、出撃しましたがのう……」
「リヴァイアギルディ……？　一月以上前にこやつらに倒されておるぞ、嘘うそをつくな」
「おおお、それは困りましたのう……。爺の知らぬ間に、戦いは終わっておったのですか」
　何か泰たい然ぜん自じ若じゃくとしているというか、悲壮感があまり感じられないな。
「いや、だからさらに増援が来て戦いの真っ最中じゃ！　今まで何をしておった!!」
「この通り、生きていても化石も同然の爺でしてのう……海辺を目指している途中で力尽き、そのまま波にさらわれて、こんなところまで流されてきてしまいましたじゃ……」
「そ、それは……長旅ご苦労」
　ダークグラスパーはライブ会場に見み繕つくろうし、漂流したエレメリアンが流れ着くし、この島、慧え理り那なには悪いけど何か呪のろわれてるんじゃ……。
「リヴァイアギルディの部隊の生き残り……？　巨乳属性ラージバストじゃないでしょうね？」
　いかん、エレメリアンハンターに目をつけられた。もはや、こいつの命は風前の灯ともし火びだ。
「いえいえ、胸と腹の高みを目指す者同士仲良くしようと、誘って

いただいて部隊入りしたのですがのう……。恩返しもできず、年寄りの方が生き残ってしまいましたか……」

　長生きしていただけはある、運も味方についているようだ。巨乳属性ラージバストを肯定していたら、今の台詞せりふを最後まで言えずに属性玉エレメーラオーブになっていただろう。過去の例からして。

「爺じいは、シーラカンスギルディと言いますじゃ……。申し訳ありませんのう。割腹筋属性シックスパックは稀き少しょうゆえ、徐々に活力を失って、今はこの通りですじゃ」

「しっくすぱっく……？　六個の袋の属性ですの？」

　聞き慣れない言葉に戸惑うイエローに、ブルーが説明する。

「ムキムキに割れた腹筋のことよ」

「さすがはブルーですわ！」

「何で!?　何でさすがなの!?　あたしなら知ってそうだから!?」

「いえ深い意味があって言ったわけでは!?」

　殺気も逸それてこれ幸いと、現指揮官であるダークグラスパーは、シーラカンスギルディにあらためて命令を下す。

「ううむ、まあよい。とにかくここは任せたぞ。戻るぞ、メガ・ネ」

「だ、大丈夫かいなこのお爺ちゃん。……戦闘員アルティロイドはんたちー、手伝ったってな」

　心配そうにしながらもメガ・ネプチューンは飛行形態に変形し、ダークグラスパーを乗せて一気に飛び立っていった。

　入れ替わりのように現れたゲートを通って、モケモケと戦闘員アルティロイドたちが現れる。

「あっ……待ちなさい!!」

　遅れてブルーが反応するが、もう追いつける距離ではない。

　今はとにかく、目の前の敵が先決だ。

「こいつの反応って、今までキャッチできてなかったのか？」
「活性化した属性力エレメーラをメインの判断材料としてエレメリアンを探知していますので、意図して気配を絶っていればはさすがにその存在を察知できません……。さもなければ、地球上の全人類の属性力エレメーラに誤反応してしまいます」
「なるほどな……」
　あらためて、なぞの闖ちん入にゅう者しゃを見定める。
　確かに、図ずう体たいの割りにほとんど生気を感じない。
　よく目を凝らさないと、動いているか動いていないかさえわからない。
　動物園に稀まれにいる、日単位でしか移動を確認できないような動物を見るようだ。
　ただの筋肉ならともかく、腹筋じゃあな。リヴァイアギルディたちがいた頃じゃまだバリバリでツインテール最優先の侵攻だったんだ。
　ツインテールが似合って腹筋がメチャ割れの女の子を探すなんて、まさに砂浜から一粒の砂を探すようなものだろう。
　力尽きて海の藻もくずとなったのも、わからないでもない。
「お前がここに来たのは、偶然か？」
　俺の質問には答えず、シーラカンスギルディは、ブルーをじっと見つめたあと、頭を弱々しく垂れた。
「腹筋がありそうな気配を感じたのですがのう……残念ですじゃ。胸の筋肉をそれほど鍛きたえるのなら、何な故ぜ腹筋を鍛えませんかのう……これでは冥めい土どの土産になりませぬ」
　…………………………………………ブルー目当てか。
　愛あい香かも何だかんだで、結構エレメリアンに好かれる体質だよな。

　侮辱されたブルーは即座にシーラカンスギルディの懐に飛び込み、冥土の土産にならない代わりに冥土に送る気満々の強烈なアッパーを見舞った。

「誰だれが胸筋を鍛えてるってェ!?」

「ふぉほほ、照れずともよろしいですじゃ、どう見ても鍛え抜かれた筋肉しかその胸──」

　落下ざま暴言を重ね、ダイレクトボレーで今度は真横に飛ばされる。

　為す術すべもなく砂浜を転がっていくシーラカンスギルディ。

　見かねたイエローが止めに入る。

「ブ、ブルー……。いくら敵でも、ご老人のようですし、あまり乱暴な真ま似ねは……」

「あたしは、お爺じいちゃんに『老人に手加減するのは、若者の最大の不敬』って言われて育ったのよ」

　……で、最後には爺さんが、強くなりすぎた愛香に手も足も出なくなって、色々言い訳してそれを取り消そうとしてたんだよな……。

　愛香は気づいてなかったけど。

　立ち上がったシーラカンスギルディが、今までの弱々しさが嘘うそのように猛ダッシュし、ブルーに迫る。

「この動き……。今はまだでも、割腹筋の素質有りと見受けましたじゃ！」

　生いき甲が斐いを取り戻した老人は、時として若者以上の活力を見せることがある。

「割れないわよ！　身体からだ中じゅうあまり筋肉がつかないように、ちゃんと気をつけてるんだから」

「そ、そうなのか!?」

　陰ながらそんな努力をしていると、初めて知った。
「も、もったいないですじゃ……。どれ、爺がお腹なかに振動マッサージをば」
　魚の頭部のような両手を巧みに放つ。武術の心得のある動きだ。
「うわ、速っ……あんた、とろそうなのはブラフだったのね！」
「逸材を見つけて、老体に鞭むち打つ決心がつきましたじゃ……！」
　ブルーと組み手が拮きっ抗こうしている。今にも天に召されそうだった第一印象と打って変わって、いきいきとした動きだ。
　銃撃音と共に、戦闘員アルティロイドが空を舞う。
「ヴォルティックブラスターッ!!」
「モケー」
「モケンケ」
　戦闘員アルティロイドは──イエローに任せていても大丈夫だろう。
　ヴォルティックブラスターの扇撃ちで、次々と戦闘員アルティロイドを吹き飛ばしていくイエロー。
　そして、パーツの噛かみ合わせがいまいちなプラモデルのように、ポロポロと武装が脱げていく。
「……待て、撃ってないのに何な故ぜ脱ぐ」
　今までは、無駄撃ちでもとりあえずは発射した後脱げていたはずだ。
　イエローは俺の方に向き直ると、とろんとした瞳で釈明をした。
「わたくし、気づきましたの。別に撃たなくても、テイルギアを脱げることに」



ッ……とうとう、たどり着いてはいけない真理に……!!
「きょ、今日なら武装以外も脱いでいいような気がしてきましたわ……ご主人様……早くご命令を……」
「〝やめろ〟――――――――ッ!!」
夏の太陽が、イエローを開放的にしてしまっていた。
ただでさえ開放的なのに、これ以上開放的になられたら手がつけられない。
後ろから押さえつけようと思った瞬間、先ほど理性を焦がして慧理那(えりな)を押し倒したことを思い出し、腰が引けてしまった。
ブルーはシーラカンスギルディとの戦いで精一杯だし、このままじゃイエローが全裸になってしまう!!
「腹筋こそが、真の男女平等なのですじゃ……。女性の社会進出が叫ばれる中、なにゆえ女性に腹筋があってはいけないのか……！爺(じい)は、それが心残りで旅立てませぬですじゃ……!!」
「時代に取り残されたようね！　腹筋がなくても、女は社会進出するわ!!」
なかなか社会派な話題だ。内容の是非(ぜひ)は置いておくとして。
二人の組み手は、すでに先端の手足が残像を残すまでに激化していく。
「不完全なのですじゃ！　バリバリのキャリアウーマンが、スーツの下に綺麗(きれい)に六つに割れた腹筋を隠し持っていたら……！　惚(ほ)れぬ男はおりますまい……」
元気な爺さんだなあ……。
「……口だけじゃなく、武術も達者じゃない。あんたと手を合わせていると、あたしのお爺ちゃんのことを思い出すわ……」
「おお、それでは爺を、本当の爺と思ってくれて構いませんですじゃ！」

俄が然ぜん元気になったシーラカンスギルディが、両りょう掌しょうを突き出した。

魚の頭部のような手が口を開くように展開し、ブルーの両腕に噛かみ付く。

不安定な体勢のまま持ち上げられたブルーは、力の乗らないキックしか放てず、振り解ほどけずにいた。

「し、しまっ……」

「これで、一瞬で腹筋を鍛きたえることができますじゃ!!」

シーラカンスギルディの腹部から飛び出した、大きなスタンプのようなパーツが、ブルーのお腹なかに押し当てられる。

「ちょーっ……ふざけないでよ、そんな深夜通販の怪あやしい機械みたいなので！」

俺は慌てて飛び出し、シーラカンスギルディの拘束を振り解こうと組み付いた。

「――え？」

片手で軽々と弾はじき返され、俺は砂浜に尻しりもちをついた。

今度は強く殴りかかるも、そっと肩を叩たたかれただけのように、見向きすらされない。

思わず、自分の手を見つめる。もう、疑いの余地もない。

俺は……テイルレッドは、弱くなっている。

『蛮族らしからぬおセンチに浸ったせいでピンチですね……レッド、こうなったら、フュージョニックバスターを!!』

「！　そうか……よし！」

俺はトゥアールの通信の意図を瞬時に察し、三つ編み属性トライブライドを発動させた。

属性力エレメーラを発動させるだけなら、今の俺でも何とかできるはずだ。

「属性玉エレメーラオーブ――三つ編み属性トライブライド!!」
　俺のフォースリヴォンからブレイザーブレイドが飛び出し、目の前で制止する。
　全部脱衣パージされてしまっていたイエローの武装も続けて反応し、合身巨大砲ユナイトウエポンに結合した。
「イエロー！　ほら、合体！　合体するぞ！　好きなんだろ!?」
「はあ、はあ……は、い……好きですわ……」
　イエローへの言葉選びを失敗したような気がしてならないが、時間がない。
　そして最後に、ブルーだ。リヴォンから強制的に発動したウェイブランスがシーラカンスギルディを跳ね飛ばし、目の前にやって来た。
　さすがに不意の攻撃には対応できなかったな。これで、二人とも窮地を脱したぞ！
「た、助かったわ、レッド」
「ああ！　イエローも、大丈夫か!?」
　三つの武器が合体し、フュージョニックバスターが完成する。
　イエローはつやつやした表情で、右の定位置についた。
　そして、やけにノリノリでシーラカンスギルディを指差して叫ぶ。
「ターゲット、ロック！」
「え、どこで!?」
　覗のぞき込むスコープなどついていないのだが、イエローがそう言っているのだから、トリガー担当の俺は信じて引き金を引くだけだ。
「ファイヤ――――――――――ッ!!」
　ダークグラスパーとの戦いの時のように、また発射合図のタイミ

ング外しが来ると困るので、言い終わってから充分に間を置いて引き金を引く。

　早押し問題の引っかけで失敗し、次以降、二の足を踏む回答者のようだった。

「うわ――――――――――――――――――っ!?」

　最近不調な俺は初発射の時以上に踏ん張りが利かず、今にも吹っ飛ばされそうになる。

「ああ、アンカーが刺さらなくて……きゃ――――――!?」

　イエローにとって、砂浜がバトルフィールドなのは鬼門のようだ。

　ツインテールで身体からだを支えられず、衝撃で後ろに転がっていった。

　まずい、このままじゃ俺も……！

「くぬぬ、今日は飛ばされないわよ!!」

「ブルー!?」

　前傾姿勢になって踵かかとを砂浜にめり込ませ、フュージョニックバスターの圧力に耐えるブルー。

「おお――」

　光の奔ほん流りゅうが、戦闘員アルテイロイドもろともシーラカンスギルディを飲み込んでいく。

「爺じいには見えますじゃ……。このまま戦い続け、見事な割腹筋を我がものとした、テイルブルーの勇姿が―」

　とてつもなく不吉な言葉を遺のこし、老兵は光の彼方かなたへと去った。

　バスターの光波は海を二つに割り、水平線の彼方へと突き進んで

いった。
「……絶対……ぜーったいムキムキになんてならないわよ!!」
　しかし、今ハリウッドで作られている俺たちの映画で、お前は──
　俺は頭を振り、ブルーの宣言を信じた。

　転がっていったイエローを見つけ、俺たちは元いた砂浜へと帰る。
「さすがにこんなことがあって、一泊というわけにもいかないですわね」
　変身を解除した慧え理り那なが、肩を落とした。
「せっかくみんなが俺のために企画してくれた旅行なのに、こんな終わりになっちゃって……悪い」
「いいえ。充分楽しめましたし、それにもうすぐ夏休みですわ。その時ゆっくり、またみんなでおでかけいたしましょう」
「ああ！」
　愛あい香かは空を見上げ、大きく伸びをした。
「やっぱ、アルティメギルを全滅させない限り、旅行もろくにしてられないのね……」
「そうだな……。でも、あまりそういうことは考えないようにしようぜ」
　あいつらのことで四六時中頭をいっぱいにしていても、仕方がないさ。
　また何かを企たくらんでいるようなダークグラスパーは、少し気がかりだけどな。
　以前あいつは、自分の眼鏡めがねは全てを見通すとか言っていたが……悪ふざけで俺の心を乱した張本人が、さっきみたいに俺のツインテールへの愛を知ったように笑うのが、癪しゃくに障る。

こうやって余裕を奪うことがダークグラスパーの狙ねらいだったとしたら、大成功だろう。
戦いは自分の役目ではないと嘯うそぶきつつも、あいつのせいで確実に俺の力は削そがれている。
そろそろ本腰を入れて、男の身体からだに戻る方法を探さなければ。
……今の不調な状態では、次なる強敵が現れた時に、対処できないかもしれない。

◇

慧え理り那なたちがコテージへと戻ったあと、愛あい香かはトゥアールを呼び止め、砂浜に残っていた。
「おっかないですね理事長……まさか催眠術を伝授してたなんて」
「しかもそれにまんまとかかっちゃうそーじも……」
慧理那のおかしな踊りも気になるが、本題はそれではない。
ソーラの……総そう二じの、トゥアールの背中を見たあの一瞬の葛かっ藤とう。
愛香がトゥアールに尋ねたかったのは、愛香自身が考えていたある可能性についてだった。
「あの時そーじ、あんたの髪を結ぼうとしてたみたいけど……。そーじぐらいツインテール属性が強い人間でも、絶対に無理なの？」
「はい、無理です」
少しの逡しゅん巡じゅんもなく、トゥアールは答えた。
「考えてもみてください。私は自分の世界で、アルティメギルに作戦の要かなめとして選え出らばれました。この世界での総二様が、私

だったんですよ？　もちろん、総二様にはツインテールへの愛では敵かなわないでしょうけど……それでも、私は自分の世界で、一番ツインテールを愛していたんです」
「そう、だよね……」
「それが今じゃ、仮面ですら満足にツインテールを再現できないほど、属性の呪のろいに縛られているんです。気づいていましたよね？」
　愛香は無言で首しゅ肯こうした。
　総二だからこそ、初見でツインテールを意匠にしていると看破したが、仮面ツインテールのマスクは一般人にはとてもそうだと気づけるものではない。
　トゥアールの言う通り、属性力エレメーラの後遺症は服飾にすら及ぶ。それは、何とか検閲をくぐるギリギリを模索するような、苦心の末のデザインだったのだろう。
「怒らないで聞いてほしいんだけど」
　愛香は膝ひざを抱きながら、トゥアールの表情を横目で窺うかがった。
「トゥアールってさ、不自然なくらいツインテールには触れないじゃない。あたしの胸とか、暴力とか、そういうところは色々言っても……あんたから、ツインテールの話題振ってきたことって、ないよね」
　返事はないが、愛香は続ける。
「さっきも、結局そーじはあたしたちの水着よりツインテールを見てた。そういう時……悔しくないの？　それこそ、あんたが他の世界で最強のツインテールだったなら……元に戻れたら、そーじなんて一発でまいっちゃうかもしれないじゃん」
　愛あい香かは、前置きをしてもなお、怒られることは覚悟していた

のだろう。

　トゥアールのリアクションが、予想外のもののようだった。

「だって……一度でもツインテールを羨うらやましがったり欲しがったりしたら……総そう二じ様はきっと、後ろめたさを感じて、テイルギアを思う存分使えなくなってしまいます」

　からっとした笑顔で応こたえ、愛香の背中を叩たたくトゥアール。

「……トゥアール……」

「一度失った属性力エレメーラは、二度と元には戻りません。私はちゃんとその覚悟をして、自分の属性力エレメーラを託したんですから」

　その笑顔には、強がりも悲壮感も、負の感情は何も感じられない。

「ツインテールを好きな総二様に、共感できない……一緒に、ツインテールを好きだって笑い合えない。思いを分かち合えない。辛つらいと言えば、それが一番辛いです」

　ツインテールな女の子を羨むのではなく。

　ツインテールへの愛を分かち合えないのが悲しい。

　そう言ったトゥアールの横顔を見た愛香は、どこか敗北感さえ滲にじませていた。

「……やっぱあんたって、アルティメギルに狙ねらわれるだけのことはあったのね」

「そうですか？　でも、戦う総二様たちを、ただ見ているだけしかできないのは、歯は痒がゆいです。私も、一緒に戦えたらなあ……って」

「思ったより、色々考えてるんだ」

「失礼ですね」

　もう愛香からも、ぎこちない遠慮は消えていた。

　愛香は、喉のど元もとに何かつっかえているように、もごもごと呟つぶ

ゃき始めた。
　やがて意を決したように、トゥアールに向き直る。
「でもさ。やっぱ、辛い時って、あるでしょ。そういう時は――」
「はい？」
　ツインテールの毛先を指で絡め取りながら、愛香はぶっきらぼうに言い放った。
「あ、あたしに愚ぐ痴ちっていいから」
　簡潔なその言葉がひどく難解な呪じゅ文もんのように、トゥアールはしばらくきょとんとして愛香を見つめていた。
「か、勘違いしないでよ！　あんたが変に溜ため込んだら、その分そーじに変なことするだろうと思って……」
　焦じれて言い訳を始めた愛香を見て、トゥアールは苦笑する。
「ありがとうございます」
　不意打ちのような感謝に、愛香はうん、と小声で応えた。
「確かに私、溜たまってますから、解消させてもらいますね」
「い、いいわよ」
　まさか早速言われるとは思わなかったのか、愛あい香かは動揺を隠すように腕組みをした。
「じゃ、そこで指を咥くわえて見ていてください。初めてが女の子同士なのは不本意ですが、それでもできるという覚悟をしらしめるつもりです!!」
　トゥアールはやおら立ち上がると、コテージの方へとダッシュした。
「待ちなさいよコラ!!」
　それに反応できない愛香ではない。即座に背中にタックルして引き倒す。

「離してください！　なんなんですか、神妙に話すから熱でも出たのかと思えば、私の身体からだを狙ねらっていたんですね!!」
　砂浜の上で、いつもの一方的なキャットファイトが展開される。
「そうねえ熱で心にもないこと口走っちゃったわ、もーいい、二度と言うもんですか!!」
「あああああああちょっと水着がずれてる！　おっぱい出てる！　なんで愛香さんにだけサービスショットしなきゃいけないんですか!!」

　総そう二じの気分転換にと企画された旅行だったが。
　それ以外にも、ほんの少し、効果はあったようだった。

キャラクター名鑑 015

アラクネギルディ



DATA

身長：207㎝

体重：236㎏

属性力：男の娘属性（ガールズボーイ）

幹部エレメリアン。男の娘属性（ガールズボーイ）を極めんと邁進する求道者。愛刀・男の娘の棒（アマノムラクモ）から繰り出される神速の剣術は脅威。部隊内外に多くの弟子を持ち、慕われているが、弟子に一目惚れしてしまうなど自分の未熟さを自覚しており、前線で属性力奪取のための戦闘に参加することはなく、後進を育成することで組織に貢献している。本体より戦闘力は劣るが、かつての自分の映し身を生み出し、群体で使役することができる。

第四章　俺のツインテール、進化します。

　アルティメギル基地の廊下を、上機嫌で歩くダークグラスパー。
　デビューした鮫さめ型のゆるキャラ・メガネドンが、思惑通り子供に大人気。一部、コアなファンもつき始めたのだ。さらに、国外のファンの獲得も軌道に乗り始めた。
　アイドル活動は順風満帆と言える。
「次のシングルには、メガネドンのフィギュアをつけるぞ」
「最悪や、パッケージが無駄にぶっとくなって、店員さんが陳列に困るパターンや……」
　隣を歩くゆるキャラの中の人、メガ・ネプチューン＝Ｍｋ．IIは硬質な肩を揺らし、溜ため息いきをついた。
　今日は心なしか、溜息さえも金属質だ。
「そうじゃ、お前無駄にいい声なのじゃから、キャラ作りはどれだけやってもやり過ぎということはあるまい。次からは語尾に『メガネ』とつけるメガネ」
「お断りするメガネ!!」
　移動中でも、隙すきあらば企画会議。売れっ子アイドルの鑑かがみだ。
「あんなーイースナちゃん、アイドル活動に精出すのもええけど、そろそろ本業にも力入れへんと、首領さんに怒られてまうで」
　わかっておるわ、と生返事するダークグラスパー。
「少しの間、アラクネギルディのように指導力のあるエレメリアンに部隊の強化を任せ、戦力を底上げせねばと思うておる。あまりわらわが口を出すのは得策ではなかろう」
　テイルブルーへの過度の怯おびえは多少収まったが、まだまだ一般

兵は緩みきっているのだ、根本的な戦力強化は急務だ。
「今わらわが注目しておるのは、やはり男の娘属性ガールズボーイじゃな。芸能界でもその風は感じる」
「ほんまやな？　アイドル楽しくて、部隊の指揮がめんどくさくなってるだけちゃうやろな」
「無論、それもある！」
　悪びれもせず胸を張るダークグラスパー。
「そんなん、本末転倒やんか！」
「転倒させておけい本末など!!」
　ダメ上司まっしぐらなダークグラスパーだが、思惑はしっかりしている。
「かつてない最強のツインテール戦士のいるこの世界──男は皆、彼女に憧れておる。男の娘属性ガールズボーイと性転換属性トランスセクシャルは、この世界で必ず強く芽吹く。多くの男子が、自分もテイルレッドのようになりたい、と思うはずじゃからの」
「なるほどなー。でも、あのクモはん、落ち込んでるみたいやったけど大丈夫なん？」
「そうじゃな。どれ、またアラクネギルディの様子を見に行くか」
　軽い気持ちで、そう思いつきさえしなければ……。
　ダークグラスパーは、この直後、恐ろしい光景を目撃することになるのだった。

　正座して精神統一を始めて、何時間が経たっただろうか。
　アラクネギルディは目をそっと開き、最後になるであろう自室の道場を目に焼き付けた。
　立ち上がり、振り返ると、そこには弟子たちが勢揃いしていた。
　弟子たちは皆、素顔がわからないほどの厚化粧をしている。

一切の気配も感じさせなかったのは、弟子たちの成長ゆえか、それともアラクネギルディが見事、明鏡止水の境地に達したためか。
「ふふ、穏行の術すべまで指南した覚えはないでござるが。全く、揃いも揃って」
アラクネギルディが、今日は稽けい古この日ではないぞ、としらを切っても、弟子たちは頑かたくなにそこを動こうとしない。
「師せん範せい。どちらに行かれるのですか」
つけまつ毛を盛りすぎて瞼まぶたからカイザーナックルが飛び出したようなエレメリアンが、真顔で問い詰める。
「しばらく、山ごもりでもしようかと思う。この道へ場やは好きに使うがよい」
「相変わらず……嘘うそが下手な方だ……」
アラクネギルディの教えを守り、各々にできる最高の化粧を施ほどこし、この場に望んだのだ。
とぼけ果おおせぬことは、アラクネギルディ自身がわかっているだろう。
「〝征いかれる〟のでしょう」
あまりにも口紅を塗りすぎて、唇くちびるを中心に南極の大クレバスが出現してしまっているエレメリアンが、確信を込めて言う。
「ワームギルディの散さん華げを聞いて以来、拙者は一度も剣を振れておらぬ。けじめをつけたいのでござるよ」
それでも。ダークグラスパーに念を押されてから、数日は耐えた。
主君の意を汲くもうとした。
その末の、結論なのだ。
「これは上意討ちではござらぬ。拙者の意志で……ツインテイルズに挑むのでござる」

「師せん範せい！」

「師せん範せい……!!」

　我の強い者が多いアルティメギルの中、徹底した自己鍛錬と、後進の育成に邁まい進しんした戦士。

　そんな彼が、生涯でただ一度の不忠──我わが侭ままを通そうとするのだ。

　止められる者がどこにいよう。

「水くさいではありませぬか!!」

「ならばせめて！　せめて……一緒に死んでくれと！　我らも共に来いと、何な故ぜ言ってはくれぬのです!!」

　つけすぎなファンデーションが、熱気で溶けてマグマのように頬ほおを滑っていく者。

　引きすぎたアイシャドウが涙で崩れ、アンドロメダ銀河のような顔面になってしまった者。

　今、亡者もかくやの醜しゅう貌ぼうを晒さらす彼らではあるが、その叫びは麗うるわしく、美しかった。

　男おとこの娘ことは本来、少女そのものの愛貌を誇る美少年にこそ、与えられる称号だったはずだ。

　しかし、かくも美しい心の花を咲かせる彼らが、男の娘を名乗っていけないはずがあろうか。

　もはや、何ギルディなのか……どんな風か貌おの者たちなのか、判別がつかない。

　だからこそ、男の娘なのだ。

　単なる女装ではない。心まで可か憐れんな乙女なのだ。

　化粧不細工で、筋骨隆々で、声が野太いだけで、彼らは皆、可愛かわいい男の娘なのだ──。

「ダークグラスパー殿は、拙者の指導者としての力を買ってくだ

さっているが……拙者には、それしかできぬ。これ以上、組織への貢献はできぬでござるからな」

　それを聞き、とうとう弟子の一人が、板張りの床に膝(ひざ)をついて訴えた。

「スネイルギルディの気持ちがわからぬのですか！　あ奴(やっ)も、ワームギルディに思い寄せておったのです！　しかしそれをひた隠し！　ワームギルディに栄えを持たせ、あなたの元へ凱(がい)旋(せん)をさせたいと！　その願い果たせぬまま、散ってしまったのですぞ!!」

　それは、決して言うまいとここにいる皆が誓った秘密なのだろう。

　皆、堰(せき)を切ったように崩れ落ち、涙を流した。

　アラクネギルディは、終(つい)ぞ知ることのなかったスネイルギルディの心に慟(どう)哭(こく)する。

「――――スネイルギルディが……。拙者が未熟ゆえ、性転換属性(トランスセクシャル)について何も教えてやれなんだ……愛想を尽かされて出て行ったとばかり思っていた、あ奴が!!」

「ブフゥ――――――――――――」

　火炎放射器のような勢いで泡を吹くダークグラスパー。メガ・ネがナプキンでいそいそと拭く。

　部屋に入ろうとしたところで、アラクネギルディと弟子たちがただならぬ雰囲気になっているのを目撃し、扉の陰に身を隠したダークグラスパーだったが、話がとんでもない方向へと転がっていた。

　出撃前のスネイルギルディとワームギルディの会話、そして戦闘中のやりとりが、全く別の意味となる。

「それだけではありませぬ!!」

もはや、敬愛する師を止めるためならば、何でも言う。

墓場まで持っていくと誓った秘密、臓ぞう腑ふを潰してでも吐き散らそう。

「ここに集った愚弟子全員！　ワームギルディに思い寄せておりましたぁ!!」

「しかし！　師せん範せいの思い知るゆえ、皆、そっと心に秘めて……！」

「ワームギルディの仇かたきを討ちたいのは、我らも同じなのです!!」

弟子たちは、血を吐くように声を張り上げた。

「お、お前たち!!」

「おのれらどんだけブッ込めば気が済むのじゃ、もう受け止めきれぬわああああああ!!」

「気いしっかり持つんや！　えーと、眼鏡めがねとゴーグルのボケ、おもろかったで!!」

眼鏡の奥の瞳の瞳どう孔こうを開いて苦く悶もんするダークグラスパー。

優しい嘘うそで気付けに勤いそしむメガ・ネだが、この光景を目の当たりにし正気を保つのは、並大抵のことではない。

「拙者は——よい弟子を持って幸せでござる」

一瞬の喜色が弟子たちに浮かぶも、アラクネギルディは、だが—と、否を繋つなげた。

「拙者も最初は仇あだ討うちに走ろうとしたが……今は違う。言ったであろう、けじめをつけたいだけだと。己の心にな……」

「……師せん範せい——」

アラクネギルディは咽むせび泣く弟子たちに、優しく語りかける。

「男の娘属性ガールズボーイは、この世界でまだまだ花咲く。必ず強く芽吹く。未熟者の拙者が果たせなんだことを、お前たちに託すのだ。……頼むぞ。自慢の弟子たちよ」
　その晴れ晴れとした顔を見せられては、もう縋すがりつける者はいなかった。
　この多くの思いを背負い、なお、無心のままに剣を振るうのであろう。
　アラクネギルディは、弟子たちに男の娘属性ガールズボーイの未来を託し、踵きびすを返した。
　桜吹雪く花道が見える。
　敬愛する師の出立かどでを、せめて最後の瞬間まで目に焼き付けようとする弟子たち。
　呼吸困難を起こしながらメガ・ネに運ばれていくダークグラスパーの姿は、彼らの目には映っていなかった。

　力尽きて変身を解除したダークグラスパーを、何とか自室まで運んで来たメガ・ネ。
　イースナは倒れ込むように玉座にへたり込んだ。
「……風紀が、乱れきってる……」
「いや、乱れとんのは風紀やなくて、もはや常識そのものやからね」
　望まずして暑苦しいメロドラマを見せられ、イースナの困こん憊ぱいは激しい。
「このことを、貴の三葉ノーブル・クラブの連中に、知られちゃ駄目……。あそこは、腐ったのが多い……」
「腐った？」
　アルティメギル四頂軍の一つの名を告げるイースナだったが、そ

の後に続いた言葉の意味がわからず、メガ・ネは首を傾げた。
「もういい。男の娘属性ガールズボーイは、あいつらに好きにさせる。……アイドルがんばろっと……」
「あかん。刺激が強すぎたんやな、イースナちゃん……」
　トップアイドルとはいえ、世の酸いも甘いもかみ分けたとは到底言えぬ少女に、まだまだ世界の闇やみは深すぎたのだった。

◇

　女になって変わったことは、朝の目覚めがよくなったことかもしれない。
　よく女の子は低血圧で寝起きが悪いと聞くが、俺の場合、起きた瞬間ツインテールを結ばなくてはという使命感に燃えるため、微睡まどろんでいる暇がないのだろう。
　二度寝は、ツインンテールの大敵だ。
「おはよう愛あい香か。今日も早いな」
「やっぱり戻ってないわね……」
　部屋に入ってきて早々、愛香は溜ため息いきをついた。
　この数日は、気になるのだろう……時間ギリギリにならなくても部屋まで起こしに来てくれているのだが、やはり寝て起きれば治っているというような、風か邪ぜのようにはいかない。
「……そーじ、あんた今……いつの間にツインテールにしたの……!?」
「え？　愛香が溜息ついてる間にじゃないのか」
　おはようと言ったら、それはツインテールを結ぶ合図だ。
　愛香が項うな垂だれているうちに、俺はしっかりとツインテールを結んでいた。

「いやいやいや、そんなの三〇秒も経(た)ってないじゃない!!」
「見損なうなよ、俺だって毎日練習してるんだぞ？　愛香には敵(かな)わなくても、だいぶ速くなってるんだ」
　愛香は(かばん)を床に落とし、自身もへなへなと崩れ落ちた。
「男には戻れないのに……ツインテールを結ぶのだけどんどん速く……」
「時にはツインテールを解(ほど)かなくちゃいけない——お前のおかげで、その必要性は充分にわかった。でもやっぱり、朝起きたらすぐツインテールにしたいじゃないか。ちゃんと目標があると、練習にも身が入るよ」
「ソウネ」
　死んだような目で返してくる愛(あい)香(か)。
「何か思い出すなあ……俺とお前で並んでさ、爺(じい)さんに言われて日が暮れるまで正(せい)拳(けん)だけやってたりさ」
「やめて————子供の頃の思い出を汚さないで————っ!!」
　あと、やっぱりトゥアールからもらったこのバレッタのおかげかな。
　自分のもののようにしっくりくるので、すっかり気に入ってしまった。

　俺が女体化したまま戻れない原因の特定こそ停滞気味だが、海に行ったことの一番の目的であるリフレッシュは、充分に達成された。
　あの心地よい暑さを知ってしまうと、どうしても、地元はただ蒸し暑いだけに感じてしまう。
　開店前の喫茶店の店内を通り、外に出る。
　十人ほどの人が、干(ひ)涸(か)らびながら呻(うめ)き声を上げ、軒先にたむ

ろしていた。

「うわあああああああああああああああああああ!?」

　ショッピングモールの入り口で蠢うごめくのに飽きたゾンビが、やってきてしまったのだろうか。

「ご、ごめんね……不審者じゃないんだ、開店を待っているだけなんだ」

　比較的意識が残っている人が、俺を気遣って言う。

　今の彼らを不審者と呼んでは駄目なら、もはや世の中の何がそれに当てはまるのか。

「あの、ここ個人店だからあまり早くに来られても……」

　さすがにお客さんを失ぅせろ、と空の彼方かなたに蹴り飛ばすわけにもいかず、愛香がやんわりと注意する。

「わかってるよ愛香君。でも、つい来たくなっちゃうんだよね」

「なんであたしの名前覚えちゃってるのよ!?」

　多くの常連ができたのはいいことだが……何か、この店どんどん魔的な方向に進んでないか。

「それにしても愛香君、女の子の制服似合ってるね。今流は行ゃりの男おとこの娘こってやつでしょ？」

「失せろおおおおおおおおお！」

　生きもがくゾンビを、女戦士の剛脚が吹き飛ばす。

「お客さんだぞおおおおおおおおおおおおお!?」

　エレメリアンからも人間からも男の娘と認定され、愛香の暴虐は加速の一途をたどっている。

　この店のお客さんなら、ノリだと思って流してくれるとは思うけど……。

　あまりサービスしてエスカレートされても困るので、母さんに水だけ配ってもらって家を離れたが、俺は、さっきのお客さんの言葉

が気になっていた。
　男の娘が、流行っている──。
　何故だ？　ワームギルディたちは倒したし、そもそも男の娘という存在も、かつてのツインテールのようにマイノリティなもののはずだ。
　ただの偶然で、一過性の流行になっている、とかならいいのだが……。

◇

　始業前のアピールタイムは、日増しに手が込んできていた。
　ソーラとして生徒に囲まれることに対しては結構余裕が出てきたのだが、果たしてこれはいいことなのだろうか。
「ソーラソラソラソーラソラ!!（はいっさー）」
「ソーラソラソラソーラソラ!!（ほいっさー）」
　学ランを羽織ったガタイ自慢の応援団による、廊下中に響く大音声。各運動部の大会が始まり、一年で一番忙しい時期だと思うのだが、うちの応援団は大丈夫なのだろうか。

　ソーラちゃんファンクラ部はなまじ創設時が大人数だった分、あっという間に細分化してしまった。
　俺がつい何度か、男言葉に戻って強く言ってしまったことで生まれた「罵っていただいてありがとうございます班」、治安維持組織を自称しているくせに自ら騒ぎに加わる「ソーラちゃん見廻組」、女生徒だけで編成された「私たちなら合法団」という過激派まで存在する。
　なお、「ＴＥＡＭロリ巨乳最高」は、愛香の暗躍により即座

に壊滅したことを加えておく。
　しかし、これほど数を揃えておいて、ツインテールに注目した派閥が一つもないことに憤いきどおりを覚える。
　細かいことに「なあ、あのアホ毛が気にならない課」というセクションはあるくせに、だ。お前たちは、俺の何を見ているんだ、と。
　……いや、見られても困るんだけどな。
　覚えきれないほど増えた派閥の中、一つだけ、気になるものがあった。
〝ソーラちゃんのようになり隊〟
　活動中は、ツインテールを真ま似ねて、女子の制服を着て、ソーラになりきる男子たち。
　きっかけはソーラへの興味や憧れでも、やがて、男の娘という存在そのものに目覚めるかもしれない。
　今朝、喫茶店でお客さんに聞いたことと同じだ。
　テイルレッドに、ツインテール以外で注目する人もいて、それに目覚める──。
　それはテイルレッドが、ツインテール以外の属性をも拡散させることを意味する。
　部下たちも報われて、やる気を出す……海で、ダークグラスパーたちはそう言っていた。
　作戦が次の段階にシフトしたという事実が、現実味を帯びてしまった。

「ソーラちゃん、その髪飾り、可愛かわいいね！」
　横を歩いていた男子が、バレッタを指差した。
　思考が中断され、その男子の方へ振り返る。

「本当？　ありがとうっ」
　色々褒ほめちぎられて今日ようやく、という感じだが、朝方俺もこのバレッタの有り難みを再確認したばかりだったので、嬉うれしくなり自然に笑えた。
「わ、笑ってもらえた……！　これって、結婚してもらえるってことだよね!?」
　感激した男子が詰め寄ってきた瞬間、桜さくら川がわ先生が間に割って入る。
「よくわかってるじゃないか。女の笑顔はプロポーズの返事だ。さあ、私の笑顔を受け取れ」
　男子はＵターンし、安全圏へ離脱する。
　婚こん姻いん届とどけを渡す側と拒む側、緊迫する制空圏の争いだ。
　婚姻届という名の呪じゅ符ふを操る退魔師として、桜川先生は男子生徒にすっかり恐れられている。
　そして男子が下がると、今度は女子が近づいてきた。綱引きメーターのようだ。
「ソーラちゃん、家庭科の時間に作ったクッキー、食べて！」
「授業の内容わかる？　ノート見て！」
「ソーラちゃん、体操着着てみて！　それで、ここにある新品と交換して!!」
　ありがたい申し出ばかりなのだが……いや、たまに疑問符が浮かぶようなのもあるけど、その都度女子は、俺に身体からだをペタペタ触ったり、ひどければ自分の身体を俺に触らせようとしてくる。
　一定の距離を堅持する男子と違い、遠慮なくスキンシップをしてくる女子の方が困るのは、テイルレッドの時と変わらない。

　前を歩いていた愛あい香かが、トゥアルフォンを取り出して何か会

話している。
「最初はみんな生でいいっすかぁ～!?　あたしビッチャーで！　ビッチだから!!」
　通話を終えた途端、女の子が何人か詰め寄った。
「ど、どうしたの愛香!?　愛香はビッチじゃないよ！　一筋だよ!!」
「ち、違うの、こーゆーアプリでね、ああもう、切るの忘れてたー、てへッッ!!」
　トゥアルフォンの音声改かい竄ざん機能が、また誤解を生んでしまっている。
　あの妙な言語に変換されてるってことは、通話内容はエレメリアン関係だ。
　今、姿が見当たらないトゥアールが、先に部室に行ってかけてきたのだろうか。
　きっと、エレメリアンの出現を知らせる連絡だったに違いない。
　まずいな、もう授業が始まる。普段だったら何とか抜け出せただろうが、今だと保健室に行くと言っても、必ず何人かは付き添いをすると言いそうだ。
　慧ぇ理り那なが背伸びをし、耳打ちしてきた。
「……大丈夫ですわ。津っ辺べさんと話して、今日はわたくしと津辺さんだけで出撃することにしました。観み束つか君は、授業に戻ってくださいまし」
　慧理那は「任せてください」と、足早に部室棟の方へと向かった。
　そうだな、最近調子がよくないし、お言葉に甘えて二人に任せよう。
「…………」

──いや、駄目だ！　あの二人だけで出撃するのは、危険だ!!

　愛あい香かも慧理那も、何がトリガーで暴走するかわからない。俺がついて行かなきゃ、不測の事態を収められなくなる。

　そうだ、こういう時こそトゥアルフォン越しに話せば──って、それじゃ愛香と同じだ！

　古代ツインテール語に変換されたら、周りの生徒が総お二れとの関連性を疑う！

　やばいぞ、早く出撃しないと……！

　予鈴が鳴っても廊下に棒立ちな俺を心配したのか、余計に人垣が大きくなってきた。

「どうしました、ソーラさん!?」

「具合でも悪いんですか!?」

「体操着に着替えようよ!!」

　口々に気遣いの言葉を投げかけてくる。

「お、おトイレに……行きたいんです……」

　涙目で顔を真っ赤にし、絞り出すようにそう呟つぶやくと、廊下をドミノ倒しのように静寂が拡散していった。

　特に男子は皆顔面を蒼そう白はくにし、生涯でこれ以上があるかも疑わしい罪悪感を滲にじませる。

　瞬間、廊下を埋めていた人垣は真っ二つに割れ、男子は頭突きをする勢いで土下座を始めた。

　将軍家の大名行列でさえ、これほどに通路の果てまで続く土下座を目の当たりにすることはないだろう。

「私が！　私がついて行くのよ!!」

「あたしに決まってるでしょ、保健委員なのよ！」

「私は飼育委員よ!!」
　そして町娘たちがトイレへの随伴する権利を争い、大立ち回りをしている。
　俺は恥ずかしさに身を縮こまらせながら、土下座道を突っ切った。
　幸い、女子もこの状況で無理に追いかけて来ようとはせず、苦もなくツインテール部の部室にたどり着けた。
　あとは、トイレに行きたいフリが上う手まくなってしまった自分への、後悔との戦いだな。

◇

「なんで来たのよ！　あたしたちのこと信頼してないの!?」
「してるよ！　強さは!!」
　出撃ゲートをくぐる直前でブルーとイエローに追いつき、文句を言われながらも俺は一緒に出撃した。

　夏の暑さから切り離されたような、清涼な竹林。
　たった一体のエレメリアンが、舞い落ちる葉に包まれ─正座をして待っていた。
　武士。それが、第一印象だった。
　裃かみしもの肩衣をはねた上半身は、背の巨大な八本脚が目立つ。さやに収まった長刀を手に、そのエレメリアンは立ち上がった。
『強力な属性力エレメーラ……間違いなく幹部クラスのエレメリアンです。気をつけてください』
　トゥアールに注意を促される前から、力は痛いほど伝わってきていた。

　だが、それだけではない。こいつから感じる、この得体の知れない凄すごみは何だ!?
「拙者はアラクネギルディ。男の娘属性ガールズボーイを持つ武士にござる。ツインテイルズよ、よくぞ拙者の果たし合いの申し出に応じてくれた」
「アラクネ……？」
　聞いたことがない名前だったが、トゥアールが解説してくれた。
『半人半蜘く蛛もの怪物です。ただし、その半人部分は女性体のはずですが……』
　それで、男の娘属性ガールズボーイから生まれたのか。
　それにしても、果たし合いの申し出、とはな。
　違和感の一つに合点がいった。
　シーラカンスギルディがそうだったように、エレメリアンは、暴れるなどして属性力エレメーラが活性化しない限り探知できない。
　しかしこいつは、あんなにも見事な正座で待ち構え、少しも精神を乱していなかった。
　その上で、俺たちが襲撃と勘違いするほど強力な属性力エレメーラを発散していた。
　すでに持ち得た力以上の、さらなる異質な何かを兼ね備えた手練れなのだ。
「ここに来るまでに、この世界を見させてもらった。素晴らしい世界だ。テイルレッドという明確な目標があるがゆえに、男おとこの娘こが皆、生き生きとしているでござる」
　立ち上がり、空を振り仰いで晴れ晴れと語るアラクネギルディ。
「何を知ったように言ってんのよ、男の娘なんてそんなそこかしこにいないっての」
　げんなりとする愛あい香かに、アラクネギルディは恐ろしい疑問を

投げかける。
「果たしてそうでござるかな？　お主が気づいておらぬだけで、周りの友人らの中にも、実は男おとこの娘こがいるかもしれぬぞ」
「こっそり潜伏してる宇宙人みたいに言ってんじゃないわよ!!」
　言ってしまえば、その通りなんだよな。事実、俺が――
「…………」
　俺は……なんなんだろう。
「あなた……もしかして、お化粧をしていますの？」
　イエローに言われてよく見てみると、確かに、アラクネギルディは薄く化粧をしていた。
「武士は死し合あう前、化粧を嗜たしなんだという。自らの死に顔が醜くあっては、死力を尽くした相手に申し訳が立たぬという心意気の表れなのだ」
　わたくしお化粧していませんわ、と面目なさそうにするイエロー。
　化粧は必要ないけど、着衣は必要だから、そこに気をつければいいと思うんだ。
「つまり！　男の娘とは、常に死合う覚悟を身にまとった武士もののふ！　武士道とは、死ぬことと見つけたり！　なればこそ、武士道を、男の娘と見つけたり!!」
　愛するものを、死への覚悟に結びつける。こいつの愛も、どこか歪ゆがんでいる気がした。
「――斗たたかいの前に、一句仕つかまつる」
　アラクネギルディは、筆と句札を取り出し、詠うたい上げながら一筆認したためた。

　上になく

下にあれども
裡うちにをとめ

（訳：私は、おっぱいがなくて、下にはあれがついちゃっているわ。
でも、それがどうしたっていうの？　心は女の子なのよ──）

「受け取ってほしい。拙者の辞世の句にござる」
「さっきの化粧の話といい……お前、初めから死ぬつもりで、この戦いに……!!」
　いかなる雑音にも惑わされず、凜り々りしく気高くあろうとする男の娘を詠よんだ一句か。
　思わず納得してしまったが、ブルーに突っ込まれる。
「何であんたは、いっつもこういう馬ば鹿かに反応するトコがズレてんのよ!!」
　アラクネギルディは、腰に穿はいた長刀の鯉こい口ぐちを切った。
　音もなく抜き放ち、切っ先を俺たちへと向ける。
「拙者の愛刀、男の娘の棒アマノムラクモの業の冴さえをしかと見よ、ツインテイルズ!!」
　俺はこいつの力を読み切れず緊張していたのだが……ペースを崩された。
　ブルーたちは気づいていないが、また例によって妙な名前の武器が出てきたぞ。
　最悪だ、あれと斬きり結んだりしないといけないのか!?
「一度あえて完全なる女性へと変態することで女め々めしさを超越して、真なる男性性を獲得する──男おとこの娘ことは、いわば元服の儀に

ござる!!」
　変態、と聞いて先ほどの学園での阿鼻叫喚がフラッシュバックする。
「いざ、参らん!!」
「悪いけど、果たし合い挑んできたからって、一人ずつ相手するなんて思わないでよ？」
　……俺は一対一で戦う気だったのだが、ブルーは非情な宣告をした。
「無論、果たし合いを受けてくれただけで重畳、それ以上は求めぬ。だが──」
　アラクネギルディの背中にある脚が翼のように開き、先端から飛び出した光弾が次々と人の形を取っていく。
「なんだあれは!?」
「三対一では分が悪い。拙者も、奥義にて仕るぞ!!」
　彼我の戦力差が、即座に塗り替えられる。
　三対一は三対五、三対十へ……
「アラクネギルディとは、かつて小僧っ子だった拙者が元服を迎えし姿！　ここに生まれしは、かつての拙者の現し身!!」
　そして今や、三対五十の構図となった。
「これこそ拙者の弛まぬ錬磨が生み出しし奥義！　〝男の娘の楽園〟ッ!!」
　短い蜘蛛足が両手両足から突き出した、蜘蛛型怪物の大群。
　アラクネギルディにそっくりでも、色は正反対で気味悪いほどに全身黒一色だ。
　分身だけあって意識はないようだが、それが一層不気味さを引き立たせる。
「うわああああああこれはヤバい！　変態に耐性はついてきてもコ

レは駄目だ！　大量の虫は駄目だあああああああああああああああ!!」
　変態への拒絶とはまた別の、より原初の恐怖。
　生理に、本能に訴える、〝数〟の暴力。
　戦闘員アルテイロイドはのっぺりした見た目でそこそこ愛あい嬌きょうもあるからまだしも、こんな節くれ立った虫の大群がわさわさと迫ってくるのは、耐えられるものではない。
　目を逸そらすように隣を見ると、ブルーはけろっとしていた。
「お前、何でこれは大丈夫なんだよ!?」
「別にうねうねもしてないし。──虫が調子に乗ると踏み潰されるだけってことを、思い知らせてやんないとね」
　やべえ何この人かっこいい。
　だけどさすがにイエローは怖がるだろう……。
　反対を振り向いた俺は、キラキラと子供のように輝く瞳を目の当たりにした。
「燃えますわ！」
「何でえええええええええええええええええ!?」
「そもそも虫型の怪人というのは、特撮では定番中の定番ですのよ！　それが大挙して押し寄せるシチュエーション！　戦士として一皮剥むけたわたくしの真価が試される時ですわ!!」
　ブルーはボキボキと指を鳴らし、イエローは肩を回している。
　女子って強っぇえ……。
　ビビってる俺が馬ば鹿かみたいじゃないか！
「あたしとイエローで先にこの雑ざ魚こを引き受けるから、それまでお願いね、レッド」
「え……あ、ああ」
　俺が分身体を怖がっている以上、ブルーがそう配慮してくれるの

は当然の成り行きだった。
　しかし俺はやっと、自分がどれだけ愚かなことをしてしまったか気がつく。
　不調なのを黙ってのこのことついてきて、あろうことか幹部クラスと対峙(たいじ)してしまった。
　ブルーたちに正直に話そうとした時には、もう遅い。
　すでに戦いは始まり、爆発音が背後で響き始めていた。
「ッ……こいつら、強い！　かませの雑魚じゃないわ！」
　ブルーが驚きの声を上げる。
　ただの時間稼ぎの分身体ではない。まさに、ワンマンアーミー。
　たった一人で一部隊並みの戦力を持つエレメリアン、それがアラクネギルディなのか!!
「……くそ、やるしかない。戦いながら調子を取り戻していけばいいんだ！」
　俺はアラクネギルディへと斬(き)りかかるが、男の娘の棒(アマノムラクモ)で軽々と受け止められてしまった。
「な、何!?」
　間髪容れずに胴斬りを放つが、何と今度は、それを素手で鷲掴(わしづか)みにされた。
「拙者を侮辱しておるのか？」
　手加減をされたと勘違いしているのだろうが、俺にはそんなつもりは全くない。
　アラクネギルディの一閃(いっせん)を、紙一重で躱(かわ)す。
　しかし、剣先がかすった腰のパーツが、半分から先がバラバラになった。
「テイルギアが、あっさり砕けた……!?」
　ここまで……ここまで、俺は弱くなってしまっていたのか!?

『総(そう)二(じ)様、おかしいです、テイルギアに流入しているツインテール属性がどんどん弱くなっています！　このままでは危険です、ブルーたちと一緒に一旦退却してください!!』

「そんな……!?」

　ツインテール属性そのものが弱くなるなんて！　嘘(うそ)だ、属性力(エレメーラ)は一度育てば弱くなることはないって、トゥアールが教えてくれたんじゃないか！

「……俺は……ツインテールそのものに、見放され始めたのか……!?」

　脱力すると同時に、ブレイザーブレイドも消えてしまった。

　駄目だ、気をしっかり持て、まだそれが原因だと決まったわけじゃない。

　しかし……変身の不調や、ソーラへの変化、そして弱体化……それらは、テイルレッドの力の源であるツインテール属性が、少しずつ弱まってきていたと考えれば、説明がつく……。

　ブルーやイエローの方を見ると、二人とも激闘の真っ最中だ。

　俺の状況にも気づかないほど手一杯で、退却ができるような状況ではない。

「いきますわよ――食らいあそばせっ!!」

　イエローが完全脱衣形態(フルブラストモード)で猛攻し、ブルーもエグゼキュートウェイブを炸(さく)裂(れつ)させる。

　しかし、吹き飛んだのは数体だけで、すぐに後ろのスパイダギルディたちが殺到してくる。

「仲間の助けは届かぬようだな。拍子抜けだが、どうやらわざと手を抜いているようでもなさそうでござる」

　失望したような声が、背中にかけられた。

　自覚してしまったせいだろうか。もはや変身が解除されないのが

不思議なほど、俺はツインテールが弱まっているのを感じた。
「ならば、せめてもの情け。いたぶることのないよう、これにて頂ちょう戴だいいたす!!」
　アラクネギルディが腕を天にかざすと、大きな輪が空間から溶け出してきた。
　あのリングだ。
　一度は慧ぇ理り那なのツインテール属性を奪った、忌まわしきリング。
　まさか、俺自身があれにかけられることになるなんて。
「御免ッッ!!」
　アラクネギルディの声でリングは俺に向かって迫ってくる。
　おれは、どこか他ひ人と事ごとのように、その輪を最後まで見つめていた──。

◇

　空も地もないような、見渡す限りの〝無〟に彩られた、見知らぬ地平。
　重力からさえも解放された不思議な空間を、俺は一人揺蕩たゆたっていた。
「────ここは……」
　俺はツインテールを奪われようとするその瞬間、白昼夢を見ているのか。

　激しい閃せん光こうに見舞われ、俺は咄とっ嗟さに腕をかざして遮さえぎった。
　しかし、すぐに腕を下ろし、光をまじまじと見つめる。

　なんて神々しい光なんだ。

　雲一つない青空に燦さん々さんと輝く太陽を、直じかに見上げているようだ。

　それなのに、全く眩まぶしいと感じない。

　とても、温かい……。

「観み束つか総そう二じよ」

　この空間全体を包み込むような、重厚な声が響き渡る。

　不思議な声こわ音ねだった。

　男性か女性かも定かではない。多くの声が重なっているように聞こえるのに、神秘的に調和しており、暖かさを感じる。

「……誰だれだ……？」

　俺は、導かれるように光へと歩み寄りながら、そう尋ねた。

「私は、お前のツインテールだ」

「何……!?　俺のツインテールだと!?」

　目を凝らすと、確かに光には形がある。

　ツインテールだけが人の頭を離れ、形を保っているような輪郭だ。

　この光が俺のツインテールだとすれば──俺は今、自分の心の中にいるのか。

　言葉にするとおかしなことだけれど、そのとんでもない状況さえも、俺は受け入れてしまっていた。

　再び、ツインテールの声が響く。

「何な故ぜ、立ち上がらない。このまま、ツインテールでなくなってしまってもいいのか」

　ツインテールを奪われること──それはつまり、この光が消えてし

まうことを意味する。
　それなのに。自衛を促す叱責しっせきというよりも、親が我が子を優しく諭さとすような、身体からだに染み渡る温ぬくもりを感じるのは……何故だろう。
「俺だって……ツインテールを守りたい……みんなを守りたい！」
　今まで何度も、そうして立ち上がってきたはずなのに。
「だけど、力が出ないんだ！　あいつらと戦うだけの力が、今の俺にはない!!」
　俺に、世界を守る力を与えてくれたテイルギア。
　自分自身の身体さえもコントロールできなくなり、力も失ってしまった今、初めて、この未知のテクノロジーを怖いと感じてしまった。
「自分のことがわからないんだ！　俺は……お前ツインテールに見捨てられてしまったんじゃないのか!?」
　数日間耐えに耐えてきた不安が──とうとう爆発した。
「愚かな……。聞くに耐えぬ詭き弁べんだ」
　ツインテールは、俺の不安を冷たく嘲ちょう弄ろうする。
「私はお前のツインテールそのものだ。その私が、お前を見捨てる……それはすなわち、お前が自分自身を見捨てていることにほかならない。人はそれを──諦あきらめと呼ぶ!!」
「っ……!!」
　返す言葉もない。
　諦め……この虚脱感は、まさにそうだ。
　自分のツインテールに見透かされるっていうのは、何ともむず痒がゆい気分だな……。
「……お前は諦めたのではない。自分の愛を見失っているに過ぎないのだ」

「愛!?」
　突然の指摘に、俺はツインテールを仰ぎ見た。
　確かに、諦めていたら、このツインテールは……俺の心は、輝いていないはずだ。
「ツインテールを愛することと、人を愛することは別のものだ。混同してはならない」
「お、俺だってそれぐらいはわかる！」
　トゥアールも言っていた。
　人への愛と属性力エレメーラは違うと。別々で当たり前だと。
「だが事実、女性の温ぬくもりを知った時、お前は後ろめたさを感じてしまった。ツインテールへの愛が、揺らいでしまうのではないかと」
　温もり……イースナの、唇くちびる──。それが、恋や愛を強く意識させた。
　ツインテールを好きだという気持ちは、実は簡単に揺らいでしまうのではないか。
　そんな不安が、心で操るテイルギアに、影響を与えないはずがなかった。
「そうだ。お前は自分自身を許せず、より強固なツインテールとの結びつきを求めた。決して解ほどけない、決して消えないツインテールを求めた──。それが、ソーラという少女だ」
　なんてこった……。
　ツインテール属性が弱まったんじゃない。俺が暴走させてしまっていたのだ。
「……男おとこの娘こや性転換の属性の敵と戦って……俺は、不安に思ってしまったんだな。正体がばれることなんかじゃない、〝俺はこのままで大丈夫なのか〟って」

　ただ、好きだと思うだけでいいのか。変身するだけでいいのか。

　俺自身がツインテールにならなくていいのか、って──。

　あの夢のテイルレッドは、俺自身の心だった。自分の中のツインテールが消えてしまうと思い、俺は無理に繋つなぎ止めようとしてしまった。

　ソーラを生み出したのは、ほかならぬ俺自身の心の弱さだったんだ────!!

『何が言いたいか、わからぬということか？　……やはり、お前という存在は危ういのう』

　イースナも見抜いていたんだ。俺が、二つの愛を混同してしまっていることを。

「時として人は、形なきゆえ愛を恐れる。お前が身を以もってその愛を形にしなければ、不安に押し潰されそうになったようにな。……だが、それを乗り越えた先にこそ、本当の愛がある」

　テイルレッドに憧れて男おとこの娘こになった人たちを見て、焦りを感じるのも当然だ。

　形のないことに不安を感じ、形を求めてしまった。

　一番わかりやすい、繋つながりを求めてしまった。

　ソーラも、あの人たちと同じだったんだ。

「思い知ったはずだ。たとえ身体からだが女になっても、自分のツインテールは輝きはしないと」

　確かに女になることで、俺はツインテールの多くを学んだ。大きく成長できただろう。けど、偽りの絶対を求めたところで、それは本当の強さじゃない。本当の愛じゃないんだ。

「そうだ……。俺は男の娘でも、性転換者トランスセクシャラーでもない。どこまで行っても、ツインテールを愛する男、観み束つか総そう二じなんだ」

俺は、世界から爪弾きにあって当然の人間だ。
だが、そんな俺だからこそ、人の心を守るために戦うことができるはずだ。
愛する属性が消えてしまうかもしれないという恐怖を知ったからこそ、今まで以上に強く、人の心を守りたいと思う。
俺は意を決して立ち上がり、視線を切った。
「わかったよ。もう、決して恐れはしない。俺は、俺のツインテールを信じる!!」
光り輝くツインテールが、ゆっくりと頷いた。
「そうだ……戦え、観束総二よ！　ツインテールある限り!!」
「……いい加減、水くさい言い回しはやめろよ。お前は、俺なんだからさ」
俺は、光のツインテールへと右手を差し出す。
「フッ……そうだな。訂正しよう。観束総二よ、共に戦おう！」
「ああ、俺が」
「そうとも、私が」
光のツインテールは、右の房を持ち上げて、俺に差し出した。
「「ツインテールを愛する限り──!!」」
手と房が触れ合い、がっちりと結びあった瞬間──世界が白滅した。

◇

「何ッ!?」
最初に耳朶を叩いたのは、慮外の光景に漏れたアラクネギルディの叫びだった。

慈悲なき魔輪がついにツインテールを捉えようとしたその瞬間。

俺はブレイザーブレイドを抜き放ち、瞬きをも先置いて両断していた。

慣性のままに舞い飛び、俺の後ろに反弧を描いて別たれたリングは、程なく宙で爆(は)ぜ砕ける。

「男の娘(だんし)三日会わざれば──と申すが……。幼子とはいえ、女性は強いものでござるな……。一息の間も許さぬ一瞬で、刮(かつ)目(もく)すべき存在へと変わる……」

力が漲(みなぎ)る。初めて変身した、あの時の昂(こう)揚(よう)を思い出す。

俺のツインテールは今、復活した──!!

「一体どうしたの、レッド……あいつの与太話じゃないけど、確かに見違えたみたい」

当惑するブルーに、俺は堂々と答える。

「……俺は、内なるツインテールと腹を割って対(は)話(な)してきた。それで、吹っ切れたんだ」

ブルーとイエローが、肩を寄せ合って泣いている。

「……どうしよう、もう頭を強く叩(たた)いて百億個ぐらい脳細胞死滅させるぐらいしか、あいつを助ける術(すべ)が思いつかない……」

「早まってはいけませんわ!!」

どうやら、随分と心配をかけちまったみたいだな……。

「誰(だれ)もがツインテールにできるわけじゃない。だけど俺は、ツインテールだ──」

絶体絶命の窮地にこそ、そう言って強く立ち上がれと。いつか、母さんが教えてくれた。

通信で母さんが「全然違う」とかなんとか言っているような気が

するが、約束をちゃんと果たした息子を見て、感極まっているのだろう。
「な、何を言っているでござる……!?」
「──今からお前を倒す、と言ったんだ……!!」
　もう、迷いはない。俺は、テイルレッドとして戦う!!
「ブルー。イエロー。ありがとう、俺を守ってくれて。──今度は、俺がお前たちを守る」
「無む茶ちゃよ！　いくら本調子に戻っても、それだけの数相手に一人じゃ!!」
　アラクネギルディの前には、王を守る親衛隊のように、スパイダギルディが結集している。
　ブルーとイエローがかなり消耗している今、むしろこの方が好都合だ。
　俺が積極的に囮おとりとなって、こいつら全部と真っ向からぶつかるんだ。
「完全解放ブレイクレリーズ!!」
　一回転するほど思い切り振りかぶったオーラピラーを、スパイダギルディへと投げ放つ。
　紐ひも状に限界まで伸長させたオーラピラーは、輪ゴムのように一気に縮んでスパイダギルディを捕縛した。
「グランドブレイザー!!」
　浅い。
　必殺の手て応ごたえを感じたのは数体分だけだ。充分な捕縛力を維持できなかったオーラピラーはスパイダギルディの大半を取りこぼし、グランドブレイザーが直撃する瞬間の離脱を許してしまった。
　さらに、技の直後の隙すきを突いて、爆炎を突き破りアラクネギルディが懐に飛び込んできた。

「くっ！」
　最上段から振り下ろされた奴やつの剣を咄とっ嗟さにブレイドで受け止めるが、想像以上の膂りょ力りょくに即座に左手を刃やいばの腹に添え、弾はじき飛ばされるのを堪こらえた。
　こんな細身の身体からだで、その腕力は重量級のエレメリアンに勝るとも劣らない。
　アラクネギルディは鍔つば迫ぜり合あいを迷わず切り上げ、目にも止まらぬ剣けん戟げきを繰り出して来る。
　当てずっぽうのような危うさで無む理り矢や理り剣を振り回すことでしか、防御ができない。
「この活力……とても死ぬ覚悟をしてる奴の攻撃とは思えねえな……！」
　万全の体勢であっても、こいつは易やす々やすと勝てる相手じゃあない。
　かつて、実力に開きのあるドラグギルディと互角に斬きり結べたのは、奴がツインテールの剣術の使い手だったからだ。俺はツインテールを研ぎ澄ますことでその剣けん閃せんを見切り、何とか互角に持ち込んだ。だが、こいつは違う。
　俺自身が……俺のツインテールを加速させなければ、こいつの剣には届かない!!
「目の前の拙者の剣に集中するでござる。その美しいツインテールが余よ所そ見みの内に刀のさびとなるのは、忍びなかろう!!」
「だったらあの蜘く蛛もの群れを引っ込めやがれ！　もう二人は限界だ、一対一だろう！　俺は逃げも隠れもしねえ!!」
「尋常な勝負を所望しはしたが、主君の命を遂行するが武士の本分。テイルレッドよ、お主が拙者の相手をするのならば大いに結構、我が分身が、仲間のツインテールを手にする!!」

「くそっ……!!」
　言動はふざけていても、そこには甘えも遊びもない。
　泰たい然ぜん自じ若じゃくとした、鉄の目的意識──まさに、武士だ。
「ツインテール属性が最強であるのはもはや動かしがたい事実。お主のようにツインテールを究めた者が最強であるが道理。しかし、果たして他の属性が、それほど劣るのか!?　同じく頂きに至った時、本当に敵かなわぬのか!?　拙者は、自分の可能性を試したいのでござる!!」
　振り絞るような信念。
　しかし、俺はそんなに過大評価されるような男じゃないんだ。
「俺はまだ、ツインテールを究めてなんかいない……！　頂きどころか、やっと麓ふもとにたどり着いた程度だ！　仲間に比べたら、俺は今まで何もしていないに等しかった……！」
　俺は……このツインテールを、当たり前のように錯覚していた。
　素晴らしいツインテールを持つ人たちは……俺の仲間はみんな、努力をしていたんだ……。
　そう知ったからこそ、もっと、守りたいという気持ちが強くなった。
「だから俺は、こんなところで屈するわけにはいかない!!」
　俺がアラクネギルディを弾はじき飛ばすと同時に、胸から光が飛び出した。
「むおっ!?」
「何だ!?」
　見覚えのある光──心の色だ。
　光に包まれるように、何かが浮かんでいる。
「トゥアールからもらった、バレッタ……」
　服や身につけているものは全部、変身時に分解収納されている。

　それがまるで意志を持ったように、俺の目の前に浮かんでいた。
　何の機能もない、普通の女の子のアクセサリーだったはずなのに……。
　何を求めているのか、理解できる気がする。
　だけど……これは、一人で戦い続けたトゥアールの、数少ない日常の象徴なんだ。
　残った大切な思い出なんだ。
　これを使うことは、それを壊してしまうことになる！
『総そう二じ様!!』
　俺の迷いを砕き散らすような、曇りのない叫びが響いた。
『それは、私の願い……気遣いは無用です。あるがままに、心を委ゆだねてください』
　トゥアール……。
　そうか。
　これは、テイルギアの。
　俺の中の、もう一つのツインテールの願いなんだな。
『私も一緒に、戦います！　手に取ってください、テイルレッド!!』
「わかった……！　使わせてもらうぞ!!」
　不意のことで警戒していたアラクネギルディが、再び剣を構える。
「お主も辞世の句を詠よんでいるのでござるか？　ならば、今一度、御免仕つかまつる!!」
　バレッタを包んでいた光が、その中に吸い込まれていく。
　俺が手に取った瞬間、バレッタは形を変え、属性力エレメーラをほとばしらせた。
「むう、それは!?」

「プログレスバレッター!!」

　テイルギアと同じように光のラインの走った、菱ひし形がたの装備。

　プログレスバレッターの放つ光に包まれ、テイルギアが再生していく。

　俺は今一度バレッターを二つに割り──フォースリヴォンへと合体させた。

　閃せん光こうに怯ひるみ、嘆声をもらすアラクネギルディ。

「これは……!!」

　かつてない力が、身体からだを駆け巡る。

　破壊されたパーツが復元しただけではない。

　肩から胸へ、背中へ、そして腕へも。

　新たなパーツを展開し、俺のテイルギアはパワーアップを果たしていた。

「これが俺の新たな力ツインテール！　ライザーチェインだ!!」

　スパイダギルディと戦いを繰り広げていたブルーとイエロー。

　そして意志なきスパイダギルディまでもが、刮かつ目もくしている。

「ライザーチェイン……あれが、レッドの新しい力……」

「ブルー！　あれ……レッドのツインテールが！」

　テイルギアの変化に合わせ、ツインテールも上結びへと変化を遂げていた。

　女の身体になって悪戦苦闘した日々は、決して無駄ではなかった。

　テイルギアは、ただの防具ではない。

腕力、脚力、視力に聴力……あらゆる身体能力を強化する。



　しかし、元からできないことだけは強化できない。
　今までの俺だったなら、このプログレスバレッターを使いこなすことはできなかっただろう。
　ツインテールを一瞬で結び直す──形態変化チェインカスタムの始動キーにして最大条件を、この数日の錬磨が可能にした。
　結び方を知ったから、練習したからこそ、テイルギアの力でコンマ数秒の域にまで強化できたのだ。
　危機を察知したのか、大軍の中から四体のスパイダギルディが飛び出し、俺とアラクネギルディの前に降り立った。
　俺はツインテールを掻かき上げるようにリヴォンに触れ、左右それぞれ二刀のブレイザーブレイドを引き抜いた。
「二刀流だと⁉」
　肩のアーマーから、翼のようなパーツが展開する。左右二対、六枚の翼からツインテール属性のエネルギーが紅あかい稲妻となってほとばしる。それは腕へと伝わり、ブレイザーブレイドを包み込んだ。
　二本のブレイザーブレイドが、激しく発光する。
　鎧がい袖しゅう一いっ触しょく。
　ブレイザーブレイドを二の字に一いっ閃せんしただけで、目の前に立ちはだかっていた四体は跡形もなく消し飛んだ。
　群体で意思がないとはいえ、スパイダギルディは並のエレメリアンよりずっと強力だ。
　それを、ここまで圧倒する力──攻撃力を最大強化した姿、それがライザーチェインか‼
「幼い！　刀を二本持てば一本を上回れるという浅せん慮りょ、微笑ほほえましくて可愛かわいいでござる‼」
　アラクネギルディは男の娘の棒アマノムラクモを構え、振り下ろしてく

る。
　あまりにも的外れな非難に軽く憤（いきどお）りを覚え、俺は力任せにそれを弾（はじ）き返す。
「むう!?」
「初めて驕（おご）りを見せたな、アラクネギルディ！　俺はツインテールだ！　なら、俺が二刀を振るうことこそ、ツインテールへの原点回帰！　より力を発揮できると何（な）故（ぜ）考えない!!」
「うう、真理！　浅慮を悔いるは拙者でござったか!!」
　俺は剣術なんて、元々棒振りの真（ま）似（ね）事（ごと）程度しかできなかった。
　なら、技術や理屈なんて関係ない。
　この方が強そうだから、強い！　それが俺の流儀（ツインテール）だ!!

◇

『ちょっと、大丈夫なの!?　すごい持ちづらそうだけど……！』
　基地では、レッドの変化に戸惑うブルーに、トゥアールが当然のように解説をしていた。
「二刀流の名手は、もれなくツインテール好きだったと史実に記されています。それは逆に言えば、総（そう）二（じ）様もまた、歴史上の名剣士のように、二刀流を使いこなせるということ!!」
『あんた、少しは自分の発言に責任持ちなさいよ!!』
　未（いま）だ大苦戦の只（ただ）中（なか）にありながら、きっちりとツッコミは返してくるブルー。
　スパイダギルディたちから距離を取り、一息だけついたところで、どうしても言っておかなければ、というように意を決して呟（つぶや）いた。

『トゥアール』
「はい？」
『よかったね……』
　それだけ言うとブルーは、苦戦しているイエローの元へと走っていく。
「……はい。そうですね」
　薄ぼけたモニターの映像を、トゥアールは瞬きもせずに見上げる。
「私の一番大切なものを……総二様は最初から、もらってくださっていたんですよね」
　彼女の祈りは届き、彼女の願いは叶（かな）った。
　戦場には届かない、戦士たちには決して見せない、少女のありのままの素顔。
　愛も、力も。もう一人のツインテイルズは、確かに分かち合っていたのだ。



◇

「こ、これがお主の真の力でござるか……！」
　技術で及ばなければ。速さで及ばなければ。
　徹底的に攻め、力の限り叩たたきつける。
　アラクネギルディを追い詰めたその瞬間、後ろから噛かみ殺したような悲鳴が聞こえた。
「ブルー、イエロー!!」
　物量の前にブルーとイエローが力尽き、それぞれ俯うつぶせと仰あお向むけに倒れている。
　とうとう倒しきれなかった十数体のスパイダギルディが、二人の属性力エレメーラを奪わんと取り囲んでいた。
「気は咎とがめるでござるが、二人のツインテール属性、確かにいただく!!」
「くそっ……!!」
　苦し紛まぎれに、スパイダギルディへとブレイザーブレイドを一本投げ放つ。
　刹せつ那な、俺の意識は再びプログレスバレッターによって導かれた。
　バレッターを外したその一瞬で、身体からだが風に溶け込む。
　初速スタートがすでに最大加速マックス。
　踏み込んだ瞬間、目標が目の前に出現していた。
　悠々とスパイダギルディの群れを蹴散らし、思い出したように後ろを振り返る。
　ようやくここまでたどり着いた、投とう擲てきしたブレイド。そのあまりの遅さに驚いてしまった。

　それはすぐに、今の俺の速さへの驚愕に変か化わる。

　ブレイドを受け止め、俺は全身を見渡す。

　先ほどとは逆に、下半身に、新たに強化装着されたテイルギアのパーツ。

　いくつもの羽根が重なり合うように、腰から足の先にまで展開されている。

　防御を重視した強化ではない。

　もはや防御という存在、概念すら忘却するほど、極限の神速を追究した形態。

　俺の意志に呼応して発動した、もう一つの姿こそ──

「──フォーラーチェイン!!」

　下結びに変えたツインテールが、翼のようにはためく。

「レッド……また、テイルギアの形が変わっていますわ──」

　俺はイエローとブルーを守るように進み出た。

　今や遥はるか彼方かなたに置き去られたアラクネギルディは、さらなる驚嘆の声を上げる。

「ふ、二つの新形態を同時に編み出すとは……まさにツインテールの化身!!」

　折り畳まれて収納された追加武装が、再び加速に猛たけり展開した。

　過剰放射された属性力エレメーラが砂金のように俺の周囲を舞い、高速旋回の軌跡を残す。

　散開したスパイダギルディを視界に収め、目に捉えた端はしから蹴散らしていく。

　この速度なら、敵の位置に合わせ最短距離を結ぶ必要さえない。

　どこにいようと、初動を視認した後でも、充分に間に合う。

「ぐむ、速い──神は速やすぎる！」

アラクネギルディが吃きっ驚きょうの叫びを上げる。

しかし、ほかならない俺自身が、そんな戸惑いの声を上げて足を止めてしまいそうでいた。

身体からだを襲う強烈な圧迫感。全身を覆う守ま護もりの光膜はとうに全開され、悲鳴を上げて限界を身体に訴えかけてくる。

俺はすんでの所で静止という誘惑を振り切り、苛か烈れつな加速の只ただ中なかへと身を委ゆだねた。

フォーラーチェインには予期しなかった弱点がある。

俺の……テイルレッドの髪の長さで下結びにすると、完全に静止したその時、毛先が地面についてしまう。

イエローの完全脱衣形態フルブラストモードのように硬化させて地面に打ち込むならともかく、無防備なツインテールを戦場の地面に墜おとす不覚だけは、断じて見み逃のがせない。

「上等だ！　全部蹴散らすまで、走り続けてやる‼」

スパイダギルディの残党と相対していると、トゥアールから通信が入った。

『総そう二じ様、そのまま聞いてください──ライザーチェインとフォーラーチェインの連続使用は危険です。ツインテール属性が上半身と下半身、テイルギアの一点に集中するため、安定性が極端に低くなっています』

「何っ」

いや、確かにそれは当然だ。

元々テイルギアは、トゥアールがたった一人で無数の敵と戦い続けるために設計し、作り上げた装備。

安定した出力こそが最大の強みだったはずだ。

俺は自分から、その上限リミッターを外してしまった。不備が起こらないはずがない。

『分析の結果予測される、各形態の連続最大持続限界は、二二秒！　それを超えては、テイルギアが限界暴走オーバーロードしてしまいます！　基本中結形態ノーマルチエインをインターバルに挟んで、属性力エレメーラを全身に流動させてください!!』

　しかしトゥアールは、使うな、と制止するのではなく、あくまで弱点を分析し、その上で背中を押してくれた。

「わかった！　その制限時間なら、体内時計でコンマ一秒まで計れるぜ!!」

　俺は共に戦うトゥアールの意志に支えられながら、力を振り絞る。

　ライザーチェインへ、フォーラーチェインへ。血流となって身体を駆け巡る属性力エレメーラのままに、姿を変えて立ち向かう。

　ついにスパイダギルディを倒し尽くした俺は、残ったアラクネギルディへと、最後の戦いを挑んだ。

「拙者、研けん鑽さんにおいて並ぶ者無しと自負しておったが、大きな間違いだったでござる。戦いくさ場ばで進化するお主こそ、武ぶ神しん！　ツインテールの神髄、確かに見た!!」

　息も絶え絶えに、アラクネギルディは自身の存在そのものをかけ訴えかけてくる。

「だがしかし、危うい！　これ以上ツインテール属性を高めていけば、お主はもはや人間という存在を飛び越え、ツインテールそのものになってしまうのかもしれぬでござるぞ!!」

「――望むところだ!!」

「望むなアホオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

　もはや涙交じりのツッコミが、満身創痍（まんしんそうい）のブルーからもたらされた。

「いや、今のは言葉のあやっていうか、売り言葉に買い言葉っていうか」

「あんたじゃシャレになんないのよ!!」

　何て信用がないんだ……！

「むぬおおおおおおおおおおおお!!」

　アラクネギルディの身体（からだ）が、変化していく。幹部クラスの変態能力か！

　背中の蜘蛛（くも）足が下半身に融合し、人の上半身、蜘蛛の下半身という、まさに伝説上の神蜘蛛そのままの風貌（ふうぼう）に回帰する。

　変態を果たし、男の娘の棒（アマノムラクモ）を正眼に屹立（きつりつ）させたあの構えこそが、アラクネギルディの最後の奥義！　武士道に殉じる気か!!

「聞けい！　テイルレッドよ！　この姿は、拙者の愛するワームギルディに捧げる最終闘体！　勝利を捧げ、あ奴（やつ）の思いに応（こた）えるでござる!!」

　血を吐くような叫び。

　愛……今、愛と言ったのか!?

「「ええええええええええええええええええええええええええええええええええええ!?」」

　ブルーとイエローが絶叫する。

「嘘（うそ）、え、それって……そういえばこいつらの属性……」

「つまり、そ、そういうことですの!?」

　……ブルー。後悔しているのか。こいつの愛する人を奪ってしまったことを……。

　けれど、俺は。

「そうか……。だけど、それを聞いても、お前を特別扱いなんてできない」

俺はそれを知ってしまって、動じるなんてことは許されない。

「お前らが、仲間思いな奴やつらだっていうことはわかっているからな……。俺たちが今まで戦ったどの相手にも、尊敬する奴や、友達がいたはずだ。だから、お前の好きな相手を倒したっていうことを心には留とめても、気後れして加減するなんてできない!!」

友情と愛とを、不等号では並べられない。

俺にできるのは、その心を覚えていてやることだけだ。

「……感謝するでござる、テイルレッド。告白せずにはいられなかった拙者の弱さ……。それを受け止め、それでも変わらぬその剣の冴さえ！　もはや、この斗たたかいに一片の悔い無し!!」

そう言ったアラクネギルディの剣こそ、今まで以上の冴えで撃ち込まれてきた。

「いくら何でも、そういうのに対して器デカすぎでしょあんたは!!」

「はわわわ、男の方と、男の方が……」

『よくも人が感激のあまりパンツ脱いだ直後に萎なえさせましたねこのくされ蜘く蛛もがあああああああああ!!』

もはやブルーたちの声も聞こえないほど、俺たちの剣けん戟げきの音は響き渡り、豪雨のように周囲を包み込んだ。

さらにはその轟ごう音おんさえも凌駕し、俺たちは時の狭間で剣を切り結ぶ。

今、最終闘体へと変化し圧倒的な機動力をもたらしている奴の八本の脚は、おそらくは背中にある時から、強力な武器として使えたはずだ。しかし、ついに振るわれることはなかった。

鍔つば迫ぜり合いの間かん隙げきでの不意打ちどころか、真っ向から

放ってきさえしなかった。

　それは俺を見くびってのことではなく、あいつが恃(たの)む己の強さなのだ。

　他の武器など不要と。奥の手を持つことすらも足(あし)枷(かせ)に過ぎないと。

　研ぎ澄ましたただ一刀を武器に、今、全ての思いを乗せて俺に挑んできている。

　剣と剣が散らす火花は流星となり、俺たちの周囲を星空へと変えた。

「アラクネギルディ！　お前は、男(おとこ)の娘(こ)とは死を覚悟して強くなる存在だと言ったな！　そのために綺(き)麗(れい)であろうとすると！」

「応(おう)とも、拙者はお主に勝って、それを証明するでござる!!」

　愛すら秘め隠し、一人孤独に頂きを目指したお前は、確かに強いかもしれない。だが──

「いいや、俺は負けない。明日を見ていないお前なんかに、俺のツインテールが負けるはずがない！　俺は、明日もツインテールを見るために、今日ツインテールを綺麗に結ぶんだ!!」

　慧(え)理(り)那(な)と桜(さくら)川(がわ)先生に、色々なツインテールの楽しさを教わった。

　愛(あい)香(か)には、ツインテールの酸いも甘いも満遍なく諭(さと)された。

　そしてトゥアールに……ツインテールの魂を託された！

「多くの人たちに支えられて、今日の俺のツインテールがある！」

　二房であっても、一つじゃない。

　ツインテールとは、生きることと見つけたり！

「俺のツインテールは――絆きずなだ!!」

　プログレスバレッターがフォースリヴォンから分離し、ブレイザーブレイドの柄つかへと合体した。
「完全解放ブレイクレリーズ!!」
　今の俺の完全解放ブレイクレリーズは、武器だけではない。
　フォーラーチェインの追加武装が全展開し、ツインテール属性の粒子を周囲にほとばしらせる。
　最大加速のもたらした炎が大気を削り、俺がアラクネギルディの周囲を旋回した軌跡が、かつてない強固なオーラピラーを生み出す。
　ブレイドを放り、瞬時に、ライザーチェインへとチェンジする。
　再びブレイドを握り締めると、背負ったバックパックがスライドし、猛然と炎を噴き上げた。
　加速移動のためではなく、渾身の一いち斬ざんを叩たたき込むための最終噴射ファイナルブースト。
　咆ほう哮こうと共に、新たなる炎が解き放たれる―。

「ライジングブレイザ――――――――――――――――ッ!!」

　ブレイザーブレイドツインがアラクネギルディを八の字に斬きり裂き、決着の火柱が天を貫いた。
「見事―」
　男の娘の棒アマノムラクモが崩れ去る。
「……今行くぞ、ワームギルディ……。不出来な師を、許せ……!!」
　続いてアラクネギルディが爆発した。

強敵だった。

属性力エレメーラは心の力……この世界での戦いが始まって一番、それを痛感させられた。

それは、俺自身のツインテールにも言えることだけどな。

ノーマルチェインへと戻り、力を使い果たした俺は、よろめきながらもブルーとイエローに歩み寄った。

「やったわね、レッド」

「……ああ。世の中ってのは、何一つ無駄なんてないな。ただのハプニングだって思ってたことが、今日の俺を支えてくれた」

死に物狂いで原因を突き止め、気づいて、もっと早くに男の姿に戻れていたら──。

今日の戦いは、勝ち残れなかったかもしれない。

「それでは、今の観み束つか君なら、元に戻れますの？」

「そうだな──」

イエローに促され、俺たちは転送ゲートへと互いに肩を貸し合いながら戻る。

基地の転送口で待ってくれていたトゥアールの前で、俺はしっかりと頷うなずいた。

ありがとう、ソーラ。またいつか──おう。

意を決して、変身を解く。

「おかえりなさい、総そう二じ様」

トゥアールの優しい出迎えに、万感の思いで応こたえる。

「ああ。ただいま」

長いようで、短い日々だった。

俺は再び、観束総二の身体からだに戻ることができたのだった。

　やっぱり、俺は男だ。

　ツインテールは惜しいけれど、心にツインテールが在る限り、俺はもう、大丈夫だ。

　晴れ晴れとした気分で部室に着き、俺はみんなに念を押した。

「とりあえず、愛あい香かとトゥアールは先に帰ってくれないか。一緒に教室に戻るわけにもいかないだろう」

　トイレに行くと言って出て行ったにしては少々時間が経たってしまったが、そこは、迷子になったとか言っておけばいいだろう。

「そうね。それじゃ会長、また放課後」

　先に部室を出ようとした愛香は、ドアを開け──すぐさま閉めた。

　今、廊下から怒号のような声が聞こえたような気がする。

　この部室はこれで一応完全防音なので、開けない限りは確かめようがない。

「何かあったのか、愛香？」

「……こっそり外見てみて」

　項うな垂だれ、ドアを指差す愛香。

　俺はごくりと生なま唾つばを飲み下し、小さな隙すき間まを空けて廊下の様子を伺った。

「ソーラちゃあああああああああああああああん！　ごめんよおおおおおおおお!!」

「もう迷惑かけたりしないよおおおおおおおおおおおおおお!!」

「だから出てきておくれよおおおおおおおおおおおおおお!!」

　──大捜索が行われていた。

　生徒だけでなく、教師の姿もある。

　犬猫が気ままに家を飛び出したどころではない、国こく賓ひんがお茶ちゃ目めでＳＰの目をかいくぐって街に繰り出したような有様だった。

　ドアに背中をもたれたまま崩れ落ちる。

「……もう一回……ソーラになるしかないのか……」

　隙すき間まから漏もれ聞こえる阿あ鼻び叫きょう喚かんを前に弱音を吐いた俺は、全力で三人に止められたのだった。

エピローグ　最強の戦士。

　イースナとメガ・ネプチューンは、自室のＰＣのモニターでテイルレッドの活躍を検分し、嘆息した。
　映像はアラクネギルディとテイルレッドが最後の激突をした瞬間までしか捉えられていなかったが、それでもあの脅威の成長は充分に窺うかがい知ることはできた。
「こらイースナちゃんも、うかうかしてられへんで」
　イースナはメガ・ネの軽口に反はん駁ばくすることもなく、昂こう揚ように身を震ふるわせ、体育座りのままその細い足をぎゅっと抱いた。
「テイルレッドちゃん、可愛かわいい……私に追いつこうと、頑張ってる……」
「うっそこの子……こら友達できんわ……」
　イースナは一時停止したモニターのテイルレッドに頬ほおを紅潮させながら微笑ほほえみかけ、のそのそと立ち上がった。
　おもむろにジャージのズボンを下げ降ろし、形のよい尻をまろび出す。
「何してんねん」
　彼女の二つ名と相反する、白いシンプルなショーツを見せられたメガ・ネは、リアクションに窮きゅうし、そう言うしかなかった。
「ぱんつ……」
「うん、パンツやね。それ、どーするん……」
「脱がずにはいられない……」
　ジャージどころか、ショーツまでも脱ぎ出そうとするイースナ。
「ここで脱いでどないすんねん、はしたない!!」
「じゃあ、テイルレッドちゃんの目の前で、脱いで、渡す……その

場で穿はいてもらう……」
「うううううわあ……ごめん、ウチ基本的にイースナちゃんの味方やけど、それは変形して後ろから轢ひき逃げしてでも止めへんとあかんやつや……」
　興奮で我を忘れ、パンツ半脱ぎの格好でモニターに抱きつく勢いのイースナ。
　メガ・ネは力一杯ドン引きし、目が本気なのを見てなお恐怖した。
「大丈夫……ちゃんと洗濯した……」
「ちゃんと洗濯して、んでまた穿いて脱いで渡したら、それも一洗濯してへんのと一緒やからね⁉」
　不毛な言い合いを続ける二人の頭上の空間が、突如として割れ裂けた。
　そこから目を灼ゃくような稲妻が飛び出し、二人の中間で炸裂する。
　稲妻は磁性流体のように波打ちながら収束し、最後に小さな長方形に収まった。
「何や？　手紙？」
　イースナは神眼鏡ゴッドめがねのブリッジを指で持ち上げて瞬時に変身すると、宙に浮かぶ封筒を手に取った。
「──これは……首領様からの封書じゃ……」
「首領さんから⁉　やばいで、最近イースナちゃんがアイドル活動にかまけて侵攻作戦の指揮全然せえへんから、罰でも与えられるんちゃうの⁉」
「な、何ということじゃ、アイドル活動も作戦の一環だというのに！」
「首領補佐になっといて単独行動ばっかしとったら作戦もクソもな

いやろ!!」

　しっかりと封ふう蠟ろうの施ほどこされた手紙を、開封する。固く瞑つぶった目を片方だけうっすら開け、おそるおそる中身を検あらためるダークグラスパー。

　その表情が、次第に険しくなっていった。

「な、何やって？」

　ダークグラスパーは、深く溜ため息いきをついた。しかしそれは、恐れていた諫かん言げんではなかったことへの安あん堵どからだけではない。手紙の内容は、あるいは、より苛か辣らつなものであったからだ。

「首領様よりの勅命じゃ。脱走した裏切り者を捕らえよ、とな」

「脱走？」

「正確には、脱獄というべきかのう。囚われの身であったのじゃからな」

　穏やかではない言葉を聞き、メガ・ネはむむ、と唸る。

「そこまでする奴やつに、何で捕獲なんて悠長なこと言うてはるんや？　倒しちゃあかんの？」

「滅せるものならば、そうされていたであろうな」

「ん？」

　首領に逆らって、その命を存えている理由は、二つだけだ。

　一つは、叛はん意いを免ずるほど、アルティメギルにとって利のある戦士だということ。

　そして、もう一つは──

「奴は、首領様直じき々じきに封印をなされたのじゃ。それがこうもあっさりと抜け出し、姿を眩くらますとは……協力者エレメリアンが暗躍しておるかもしれぬ」

　ダークグラスパーは真剣な面おも持もちで言った。

先程まで、テイルレッドの映像の前でパンツを脱ごうとしていた少女と、同一人物とは思えない。

「他にも、裏切り者がいるっちゅうことか……」

封筒の中には、一枚の写真も同封されていた。

神眼鏡ゴッドめがねのレンズに、その写真に写るエレメリアンのシルエットが反射する。

「念のため、貴の三葉ノー・ブル・クラブにも行方を追わせておく」

ダークグラスパーが僅かに視線を逸そらした瞬間。手紙と写真は、彼女の手の平の上で突然炎上し、灰も残さずに消失してしまった。

レトロな方法は、逆にその緊迫した極秘性をうかがわせる。

「さしものわらわも手を焼くであろう。メガ・ネ、お前にも働いてもらうぞ」

いよいよ、事態の重大さを飲み込んだのだろう。

「……一体、何者や。その脱走者は」

写真を見ることができなかったメガ・ネは、躊躇ためらいがちにそう尋ねた。

「かつて、アルティメギル最強と謳うたわれた戦士──」

灰すら残らなかった、自分の手の平を見つめるダークグラスパー。

秘匿のためだけではない……忠告でもあったのかもしれない。

次はもう、灰すら残すな──と。

「ツインテール属性と双璧を成す属性──ポニーテール属性を持つ、唯一のエレメリアンじゃ」

あとツインテールがき

　水みず沢さわ　夢ゆめです。水着回、パワーアップ回など多くの水沢　夢の希望が実現した四巻、いかがでしたでしょうか。次は温泉回を目指すぞ!!

　謝辞です。
　イラストの春かす日がさん。いつも可愛かわいいヒロインとかっこいいギア・エレメリアンのデザイン、ありがとうございます！　新しいテイルレッドの姿に感無量です。
　担当の濱はま田ださん、前巻はエロゲーと打ち合わせで言い過ぎだったので、次はそうならないようにと思ってたら、今巻はおっぱい連呼でしたね！　━次は何かな━━━
　今回も、完成と出版に携わって下さった全ての皆様に感謝とツインテールを!!
　エレメリアンの募集も引き続きよろしくお願いします!!

　しかし、あとツインテールがきにはいつも何を書けばいいか迷います。
　先に謝辞を書いてしまって、もうネタがありません。
　真ま面じ目めなことを書くのも照れてしまいますし、あまりふざけたことを書くのも、それはそれではばかられてしまいます。
　近況を書こうにも、おもしろハプニングには残念ながら中々遭遇しませんしね。
　……あれ？
　そういえば、エレメリアン募集のあて先は記載されているのに、もう一つ大事なあて先が、この四巻に至るまで、本の中に一度も記

載されていないような……？　気のせいかな……？

　けど、この小さなインスピレーションが、創作には大事だったりもするんです。

　ようやく書き終わって、直し終わって、さあ、たっぷり休息を取ろう、とほんのわずか意識がまどろんだ瞬間。ガチガチに固まっていた思考が柔らかくなり、いいアイディアが浮かんだりするものなんです。そのアイディアは、もちろん次に活かします。

　よし、今回も自分のインスピレーションを信じて、文字に起こしてみよう。

●ファンレター、作品のご感想のあて先はこちら●

〒１０１−８００１　東京都千代田区一ツ橋２−３−１

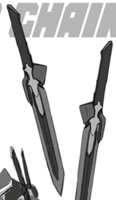
小学館　ガガガ文庫編集部　気付

水沢 夢　　係

春日 歩先生 係

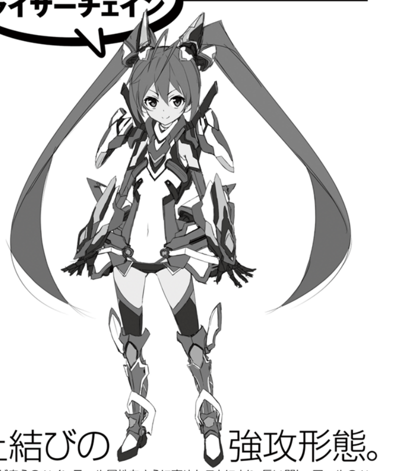
TAILRED RISER CHAIN

武器：ブレイザーブレイドツイン
ブレイザーエッジ
プログレスバレッター
必殺技：ライジングブレイザー
（フォーラーチェインとの複合技）





テイルギア設定資料
04



上結びの強攻形態。

総二が自らのツインテール属性をさらに高めたことにより、長い間トゥアールのツインテール属性の庇護下にあったバレッタが共鳴反応し、プログレスバレッターへと進化。テイルレッドのパワーアップを促した。ライザーチェインは攻撃力の増幅に特化した形態であり、基本形態の数倍の力を誇る。ただし、アーマーやフォトンアブゾーバーを形成するための力の一部をも攻撃力に転化しているため、防御力が著しく下がり、総二自身の肉体の危険もこれまでより大きい。諸刃の形態である。

テイルギア設定資料05

テイルレッド フォーラーチェイン

フォーラーチェインは高速戦闘形態であり、目にも止まらぬ速さで敵を蹴散らす。ただし、総二の肉体に凄まじい負荷がかかること、さらに下結びのため常に走り続けなければツインテールが地面についてしまうことなど、弱点も多い。また、二形態ともに、連続22秒以上形態を維持するとテイルギアの暴走を招く。そのリスクの分、速度は圧倒的で、多数の敵相手でも対応できる強みがある。

下結びの超速形態。



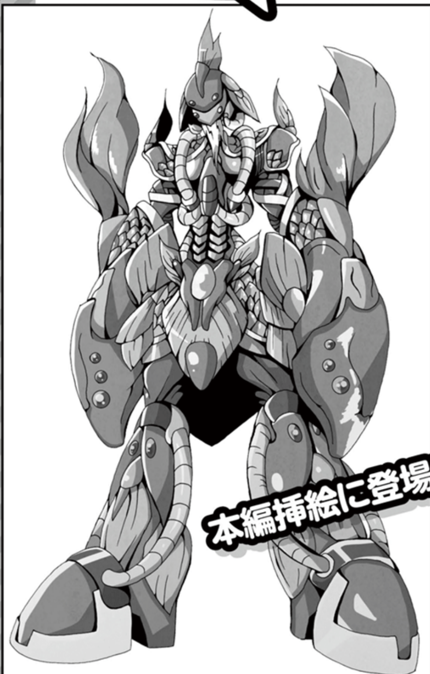
TAILRED FALLER CHAIN

武器：ブレイザーブレイドツイン
ブレイザーセイバー
プログレスバレッター
必殺技：ライジングブレイザー
（ライザーチェインとの複合技）



ぼくのかんがえたエレメリアンのコーナー

No.003
シーラカンスギルディ



東京都・だびんちさん(27歳)の作品

水沢夢の選んだポイント

嬉しいことに、デザインや属性力だけでなく、キャラ設定も練り込んで応募してくださる方も増えてきました。このシーラカンスギルディは、そのままキャラ名鑑に掲載できるほどで、「老兵」「格闘タイプ」といった設定の一部を作中に反映しています。今回の海に行く話にマッチした、絶妙にニッチな属性であったことが採用の決め手でした。なお、蜘蛛をモチーフとした応募作は前々から多く寄せられており、今回、アラクネギルディという蜘蛛型の幹部が登場したのを機に、その前身としてスパイダギルディを作中に登場させました。

応募のポイント

今回の採用作品は緻密な設定が光りましたが、もちろんあくまでそれは判断材料の一つです。出オチ、一発勝負、大歓迎です!(ただし他作品のパロディはご遠慮ください)ちなみに、モチーフに関しては、新たな四頂軍も見え隠れし始めたので、次回あたりから「メジャーではない植物」関連も狙い目かもしれません!

応募方法

ハガキの表に住所・氏名・ペンネーム・年齢・電話番号を、裏にエレメリアンの名前とデザイン、属性力を書き、下記のあて先までお送りください。また、デザインのみ、属性力のみでの応募も可能です。

▶▶▶ **〒101-8001東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館 ガガガ編集部「ぼくのかんがえたエレメリアン」係**

メールでのご応募の場合は、データファイルを添付してこちらのアドレスまで。

▶▶▶ **sukisukitwintail@gmail.com**

なお、採用したエレメリアンの著作権は著者およびイラストレーターに帰属されます。また、応募していただいたハガキ、ファイルの返却は行っておりません。

水沢　夢

Yume Mizusawa

夏！　海！　水着！　などと作品内でみんなはしゃいでいますが、僕は去年重度の日焼けで苦しんだので、今年の夏は例年以上に引きこもると心に決めました。春日さんの描いた水着を見て、海行った気分を満喫します。

小学館ｅＢｏｏｋｓ
俺、ツインテールになります。４

２０１３年７月26日　電子書籍版発行

者　水沢　夢

行人　佐上靖之

集人　野村敦司

集　濱田廣幸

行所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

本　２０１３年７月23日　初版第１刷発行

　ISBN978-4-09-451424-7